
水沢夢
[イラスト]春日歩
俺、ツインテールになります。15
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。15

水沢　夢

イラスト　春日　歩



俺、ツインテールになります。15
水沢夢
[イラスト]春日歩

CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


観束総二
津辺愛香
神堂慧理那
ソーラ
トゥアール
イースナ


テイルギアが……
世界を守る正義の装甲が……
今、侵略兵器として襲来した——

目次

水沢夢
[イラスト]春日歩

俺、ツインテールになります。15

人物紹介

観束総二（みつかそうじ）
主人公。
ツインテールを世界一愛する高校一年生。
テイルレッドに変身しエレメリアンと戦う。

津辺愛香（つべあいか）
総二の幼馴染。テイルブルーに変身する。
貧乳を気にしており、
ネタにされると激しく怒る。

トゥアール
異世界からやってきた美少女科学者。
総二たちにテイルギアを託す。
痴女。

神堂慧理那（しんどうえりな）
総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。
ドMで総二をご主人様と慕う。

イースナ
善沙闇子（いいすなあんこ）の名で活動するアイドル。
テイルブラックに変身。
普段はストーカーで引きこもり。

桜川 尊（さくらがわ みこと）
慧理那の専属メイド兼ボディガード。
婚期を焦っており、
必死に婚姻届を配っている。

観束未春（みつかみはる）
総二の母親で、自宅で喫茶店を経営する。
現役中二病患者で、
常連客に慕われている。

ソーラ
謎の少女。かつて総二が変身した姿とは
別個の存在で、
総二のことを見守っている。

俺、ツインテールになります。

14巻までのあらすじ

人間の趣味嗜好などが結晶化した精神エネルギー・属性力を狙う異世界の組織・アルティメギル。その組織に属する怪人・エレメリアンたちから世界の平和を守るべく、ツインテールへの愛・ツインテール属性を核に作られた空想装甲「テイルギア」をまとって戦う観束総二たち、ツインテイルズの戦いは続く。

総二は宿命のライバル結翼唯乃との戦いに勝利し、新戦士テイルフェニックスとしてツインテイルズに迎え入れる。だが唯乃はツインテイルズを守りたいとの思いからアルティメギル首領との決戦に臨み、死闘の果てに消えていった。総二に希望を託して――。

アルティメギル組織図

各異世界の侵攻部隊



ドラグギルディ部隊

隊長：ドラグギルディ

隊員：スワンギルディ、スパロウギルディなど

総二たちの世界に初めて侵攻してきた部隊。

- **リヴァイアギルディ部隊**　隊長：リヴァイアギルディ
- **クラーケギルディ部隊**　隊長：クラーケギルディ
- **タイガギルディ部隊**　隊長：タイガギルディ

ドラグギルディが倒されたことで侵攻部隊に増援された各部隊。
いずれも現在までに隊長がツインテイルズに倒されている。

■その他（引退戦士など）：ケルベロスギルディ



反逆者　フェニックスギルディ
ペガサスギルディ

組織に反旗を翻すなどしたエレメリアンたち。



アルティメギル首領

全エレメリアンの頂点に立つ絶対の存在。



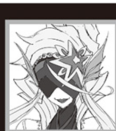
離反

首領直属戦士
ダークグラスパー

四頂軍や各侵攻軍の統率者。
後に離反し、
テイルブラックとなる。

アルティメギル四頂軍（しちょうぐん）

神の一剣（ゴー・ディア・ソード）



最高科学者：マーメイドギルディ
戦女神：ヴァルキリアギルディ
交渉人：グリフォギルディ など

ひとたび出撃すれば、狙った世界を破滅させると恐れられているアルティメギル最強部隊。所属戦士は恐るべき戦闘力と変態性を兼ね備えている。

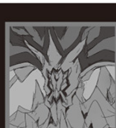
死の二菱（ダー・イノ・ランヴァス）



隊長：ティラノギルディ
右牙の副将（ライトファング）：プテラギルディ
左牙の副将（レフトファング）：トリケラトップギルディ

一般兵に至るまで強力な処刑部隊。隊長のティラノギルディはツインテイルズを壊滅寸前まで追い込む強敵だったが、覚醒したレッドに敗北した。

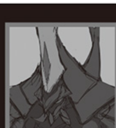
貴の三葉（ノー・ブル・クラブ）



隊長：ユグドラシルギルディ
副隊長：ラフレシアギルディ
　　　　マンドラゴラギルディ

総二たちが訪れた異世界で総力戦を繰り広げた部隊。結束力が強い。

美の四心（ビー・ティフル・ハート）



隊長：ビートルギルディ
副隊長：アラクネギルディ
隊長補佐：スタッグギルディ

ダークグラスパーと共に参戦した部隊。永い死闘の末、完全敗北した。

プロローグ　最凶の胎動。

人じん智ち及ばぬ異空間に居を構える移動要よう塞さい、アルティメギル基地。

その最奥に陣取られた薄暗く鬱うつ々うつとした部屋で、気け怠だるげな溜ため息いきをこぼす者がいた。

「............はーあ......」

アルティメギル最高科学者、マーメイドギルディだ。

先日、消し炭となるまで焼き尽くされてしまったこの研究室だが、機材が新調されてひとまずの研究ができる程度には回復している。

早くも実験器具や紙束が乱雑に置かれた机の前に座り、マーメイドギルディは憂うれいを帯おびた表情を浮かべていた。

「やっぱ、フェニックスギルディ君でも無理だったかあ......」

彼女の溜息の理由わけは、かつてこの研究室を破壊した張本人——フェニックスギルディにあった。

彼かの戦士が繰り広げた、とある頂上決戦の結末に。

アルティメギルの反逆者フェニックスギルディ——結いわ翼ばね唯ゆ乃のは、総そう二じたちと絆きずなを深め、新たなるツインテイルズ・テイルフェニックスとして迎え入れられた。

しかし、皮肉にもその絆に後押しされ、唯乃は首領との再戦を決意。アルティメギル首領の間へと乗り込むこととなる。

心の翳かげりを晴らし、十全にポニーテールの力を振るう唯乃。

降臨するアルティメギル首領の真の姿——完全生命体、テイルギルディ。

テイルフェニックスとテイルギルディの宿命の決戦は、熾し烈れつを極めた。

これまで神秘のヴェールに包まれてきた首領の正体を、そして能力

を、ことごとく曝あばく大善戦を繰り広げるテイルフェニックスだが……最後は、僅わずかに力及ばなかった。
　唯乃は後に続くであろう総二たちに希望を託し、満足げに消えていったのだった──。

「でも、まあ……首領様の強さの秘密を見せてくれたんだから、上出来ってところね」
　マーメイドギルディがどのような手段を用いて、完全結界たる首領の間での戦いを盗み見できたのかは定かではない。しかし彼女は唯乃の敗北を嘲あざける一方で、心底悲しんでいるようでもあった。
　協力関係、敵対関係……立場は何度と流る転てんしたが、マーメイドギルディにとって唯乃は、長い時間をともに過ごした数少ない存在だからかもしれない。
　しばらく溜ため息いきを繰り返していたマーメイドギルディだが、スイッチを切り替えるかのように唐突に机の上に手を伸ばした。
　そこにあったリング状の物体を掴つかむと、無造作に天井高く放り投げる。
「さあて、と」
　リング状の何かを放り投げては受け止め、また投げるマーメイドギルディ。
　天井の照明に反射し、その物体の全ぜん貌ぼうが明らかになる。
「どうしたものかしらね、これ」
　──テイルブレスオルター。
　マーメイドギルディが今手にしているのは、激化するアルティメギルとの戦いに向け、トゥアールが開発した新アイテムだ。
　これをテイルレッドが戦闘中に使用しようとするも起動せず、ついには爆発して粉々に砕け散ってしまった。

だがその爆発は、マーメイドギルディがテイルブレスオルターを強奪するために仕組んだ擬装だったのだ。
「使われてる技術そのものは、アルティメギルに存在するものとさほど変わらないのに……。どうして〝これ〟で戦うツインテイルズは、エレメリアンよりも強いのかしら……？」
技術はとっくに解析できたのだが、そこから導き出される戦闘能力では、どう計算しても幹部格のエレメリアンたちと互角以上に戦えるはずがないのだ。
「これが最後の鍵かぎになってくれるはずなのよ……。絶対に究明してみせるわ」
ツインテイルズの真ま似ねをしてブレスを右手首に装着してみるも、当然何も起こらない。
「属性玉エレメーラオーブを核として組み込まないと、ポテンシャルを発揮できないってこと……？　それなら、いくらでもあるけれど──」
マーメイドギルディが視線を落とした机の上には──属性玉エレメーラオーブが、幾つも転がっていた。
そして、それに刻まれたエンブレムは……尻属性ヒツプ、非穿属性ノーパンツなど……。
倒した後に属性玉エレメーラオーブが出現しないことを総そう二じたちが不思議に思っていた、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士たちの属性玉エレメーラオーブ──それはこうして、マーメイドギルディの手中にあった。

「──やっぱり、私の属性玉いのちを使うのが一番いいわよねぇ……？」

同胞の魂たましいを見下ろしながら、悪魔の科学者は恐ろしい独白とともに口くち許もとを歪ゆがめる。

その邪悪なインスピレーションが、起爆剤となったのだろうか。

崩壊を始める氷細工のように……マーメイドギルディの花はな冠かんむりのような頭部へ、一筋の亀裂が入った。

第一章　再会のツインテール。

　ぴみょー。ぱんぽろぺっぴん。
　れみゃんそっぽふんぱー。
　あそしゃくけっけふぉるっぴ。
　てをせりゅんたった、もっきょえぷえぷ。

「…………!?」
　どうテキストに起こしても誤字を疑われそうな奇妙な作業音で、俺は目を覚ました。
　枕元の目覚まし時計を見ると、夜中の二時だ。
　うっすらと聞こえてくる珍妙な音の出所は、自室ここの下の一階……の、さらにさらに下。俺の家の地下深くだろう。
　トゥアールが初めてこの家にやって来たその日の夜、地下基地を建造する時に一晩中聞こえていた作業音もこんな感じだった。
　その後も、トゥアールが〝巻き〟で作業する時は、こういう音を何度か聞いたものだが──
「久々に聞くなぁ……」
　ツインテイルズ関係の設備が整ったためか、最近はとんと耳にしていなかったのだ。
　懐かしく感じ、俺はベッドに座ってしばらく音に聞き入る。
　すると、最初に基地を建造した時と同じように、どういう理屈かはわからないが遥はるか地下で作業中のトゥアールの独り言も聞こえ始めた。
『あっとっと、うっかり地球の核コア近くまで掘っちゃいました……。穴に樹脂液レジンを流して塞ふさいでおきましょう……』
　ガレージキットを制作するぐらいのノリで地球そのものの爆発が食い

止められたような気がするが、聞き間違いだろう。
「何やってるか知らないけど、朝までには終わるよな……」
　今日は平日だ、数時間後には登校しないといけないしな。
　俺は寝直そうと布ふ団とんをかぶったが……ほどなく、ゆっくりとドアが開いた。
　部屋の常夜灯にうっすらと照らされる白衣姿。やって来たのは、トゥアールだ。
「うーんむにゃむにゃ……おトイレ行きます……」
　夢うつつで地下一〇〇〇メートルから地上二階まで迷いなく上がってきた女の子が、寝言で的確な状況説明をする。
　ふらふらと近づいてきたトゥアールは、そのまま俺のベッドに倒れ込んでしまった。
　仮に本当にトイレを目指してここに辿たどり着いたとすれば、この後、ベッドのシーツに凄せい絶ぜつな厄災カラミテイが降り注ぐことにならないだろうか。
　若干焦あせりつつ、俺はトゥアールに呼びかけた。
「トゥアール、起きてくれ」
「むにゃむにゃ……もう指一本も動かせませんむにゃ……」
　言葉とは裏腹に、目を瞑つむったまま正確に服のボタンを外して脱ぎだしている。
　瞬間、部屋の中に冷気が吹き込んできた。
「あーもー最近夜は寒いのにあんたはっ!!」
　眠気より寒さに愚ぐ痴ちをこぼしながら、愛あい香かが窓から入ってきたのだ。
　確かに、この一月も終わろうかという時節の深夜に窓を開けられるのはキツい。
　襲おそい来る冷気に一瞬身を縮めた俺だが、パジャマ姿でもしっかり

とツインテールを結んでいる愛香を見て、瞬またたく間に寒気を吹き飛ばした。
　北風にも負けない、元気なツインテール。このフレーズで童謡が作られることを願う。
「指一本も動かせないなら、寒くないようにあたしがしっかりお布ふ団とん巻いてやるわ!!」
「むにゃ――――――――っ!?」
　愛香は俺のベッドの毛布を使い、トゥアールを簀す巻まきにしていく。
　アナコンダが獲物に巻き付いて締めあげるような鈍い音が、深夜の薄うす闇やみに響いた。
　そうしてトゥアールは、勉強机の横にある慧え理り那なの犬小屋にダイレクトシュートされた。
「そっから出てくんじゃないわよ！　……じゃ、おやすみ、そーじ」
「あ、ああ、おやすみ」
　窓を開け、颯さつ爽そうと自分の家に帰ってゆく愛香。
　それにしても、今になって地下基地の改造をするなんて……。
　最近、トゥアールは随分と張り切ってるな。
　俺は客間から予備の毛布を取って来てベッドに入り直すと、朝まで少しでも睡すい眠みんを取るべく目を瞑った。

「犬小屋に先客ですわ――――――――――――――っ!?」

　数時間後、俺は慧理那の叫びで目を覚ましたのだった。

◇

　俺たちの高校一年生の最終学期、三学期が始まってから数日が過ぎた。
　今日は何とも賑やかな深夜から始まったが、日中はのんびりとしたものだ。
　授業中、俺はふいに教室の窓の外に目を向ける。
　流れゆく雲が──ツインテールに見えた。
　いつもの俺。いつもの平和な日常だ。
　しかし穏やかな学生生活とは裏腹に、ツインテイルズとしての戦いは確実に激化の一途を辿たどっている。
　特に、先日戦った神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士、メデューサギルディとカトブレパギルディには、あわや全滅というところまで追いつめられる大苦戦をしたしな。
　トゥアールはそんな俺たちのために新装備・テイルブレスオルターを作ってくれたのだが……いざ俺が使おうとすると、発動できずに地面に吹き飛び大爆発してしまったのだ。
　これまで使用者の安全に重きを置いて装備を開発してきたトゥアールにとって、あわや俺に危害が及ぶというその爆発は殊ことの外ほかショックだったらしい。
　もしかしたら昨夜ゆうべのように作業に没頭しているのは、初めて発明を失敗した悔くやしさを自分で乗り越えようと頑張っているのかもしれないな。
　トゥアールの席に視線をやると、小さく船を漕こいでいた。
　愛あい香かに負けず劣らず体力自慢な彼女にしては珍しい。昨夜の作業で疲れたんだろうか。
　そして愛香の方は──さすがだ。寝不足を微み塵じんも感じさせないそのエネルギッシュなツインテールを見て、俺は我われ知らず頷うなずいていた。

　トゥアールはその後の授業中も、俺や愛香と昼食をとっている時でさえ、心ここにあらずというか、どこか上の空だった。
「ねえトゥアール。今日はツインテール部、休みにする？」
　さすがに愛香も気づいて心配したらしい。だがその気遣いを聞いて逆にムキになったように、トゥアールは一人で部室棟に行ってしまった。
　俺と愛香には、少し時間をおいてから来てくれとだけ言い残して。

【部室改造中】
　言われたとおり、しばらくしてからツインテール部部室に向かった俺たちだが、そう書かれた張り紙が張られたまま、ドアは堅く閉ざされていた。
　そして、昨夜のリピート再生のように、奇妙な作業音が中から木こ霊だましている。この部室、防音機能ついてるはずなんだが……。
「まーた中から変な作業音が聞こえてるし……何やってんのかしら」
「昨夜も、遅くまで地下基地で作業してたみたいだぞ」
　愛香は廊下の壁に背をもたれ、悩ましげに嘆息した。
「無理しなくていいのに。トゥアールの奴やつ、このところ疲れてるのはあたしもわかってるのよ。だから昨夜ゆうべも、簀す巻まきにするだけで見み逃のがしたでしょ？」
　骨が軋きしむ音をあれだけ響かせて、手加減したつもりなのかお前は……。
「きっと……無理にでも何かしてないと、落ち着かないんだろうな」
「今まで散々色々造ってきて、一度も失敗がなかったのがむしろすごいのに。トゥアールは自分を過小評価しすぎなのよ」
　愛あい香かも俺と同じ考えなのかもな。トゥアールが悔くやしさを乗り越えようとしている、と。
「本人の前で言ってやれよ。俺なんかより、愛香に褒ほめられる方が

よっぽど嬉うれしいと思うぞ、トゥアールは」
「絶対ヤダ。調子に乗るだけだし」
　俺は苦笑する。素直じゃないな、ホント。

　それから少しの間、俺と愛香は奇妙な作業音に耳を傾けた。
　人の行き来のない部室棟の廊下で、静かな時間が流れる。
「──あ」
　愛香は不意に、何かに気づいたように声を出した。そして挙動不審になって、右に左にと視線を泳がせ始める。
　まるで、廊下に人ひと気けがないのを念入りに確認するかのように。
「……やば、今二人っきり……」
「愛香？」
　ぼそぼそと何か呟つぶやいたかと思えば、愛香はツインテールの毛先を摘つまみ、指に絡めて巻き始めた。
　とりあえず俺は、その巻き具合をじっと見守る。
「そーじってさ、そういう……人の頑張りとか、すぐに気づいてくれるんだよね」
「え？　ああ」
　ツインテールを見るのに忙しくて、気のない返事になる。
　愛香は俺に背を向け、後ろ手に組むと、ツインテールを翻ひるがえして振り返った。

「───そんなそーじが、あたしは……」
　きょぱあああああああああああああああああ

　部室のドアが開けられ、中から作業音が響いて愛香の声をかき消す。
「お待たせしました！　ツインテール部部室、プチリニューアルオープ

ンです!!」
　部室の中から出てきたトゥアールの制服は、火山口に飛び込んだかのようにズタズタに焼け焦げていた。
　ほぼ下着姿だ。一体どんな作業をしていたんだ……。
　トゥアールは振り返ったまま硬直している愛あい香かを見て、ジト目で含み笑いを浮かべる。
「おんやぁ、どうしました愛香さん？　そんなお情けで一枚だけイベントＣＧもらって観賞モードの『その他』欄に適当にブチ込まれたモブヒロインみたいなポーズで固まって」
「……キ……サ……マ……」
　よからぬ企たくらみを未然に防がれた悪代官のようなドスの利いた声で、憎にく々にくしげに唸うなる愛香。
「……そーじ。ちょっと今からお仕事してくるから、中を覗のぞいたら駄目よ」
　愛香は恩返しに来た鶴つるのような言こと伝づてを残し、トゥアールの首根っこを掴つかんで部室に入ってしまった。
　そういえばここ数日、愛香も何か様子がおかしいんだよなあ。
　ことあるごとに、さっきみたいに俺に何かを言おうとしているような……。
『もう少しだったのに……もう少しで告白コクれたのにいいいい!!』
『いや流れメチャクチャだったじゃないですかにゃあああああああ!!』
　部室の中からまたも防音機能を突破して、機はた織おりというより骨折りのような音が漏もれ聞こえてくる。会話はほとんど聞こえないせいで不気味さが増すが、何をしているんだ鶴さんや。
　部室プチリニューアルオープン初日に、閉店にならないといいが……。

　ちょうどその時、生徒会の仕事を終えた慧え理り那なと桜さくら川がわ先生もやって来た。
「……あの、観み束つか君？　部室に入らないのですか？」
「もう大丈夫。入っていいよ、そーじ」
　中にいる鶴さんから許可が出たので、俺は二人と一緒に部室の中に入る。
　改装中なので外で待っていたことを慧理那に話しながら入ったのだが……ぱっと見、変わった箇所は気づけなかった。壁が別の色になっていたりすると、わかりやすいのだが。
「トゥアールさん、部室を改築なさったと聞きましたが、どこが変わったんですのっ？」
　慧理那は子供のように目を輝かせ、部室の中をつぶさに観察していく。
「一番は外敵に備えた防御性能の強化や、基地との連動の応答速度上昇ですね。細かな機能も追加されていますので、追い追い説明します」
　天井に突き刺さっているトゥアールが、気をつけの姿勢のまま答えた。首から上が全部埋まっているので、声がくぐもっている。
「え、ホントに部室の防御力上がってんの？　いつもと同じパンチ加減でそうして天井に埋まったじゃない、トゥアール」
　素知らぬ顔で長机に着席している愛香が、力具合を確かめるように右手を握り開きする。
　そんな、湯加減みたいなノリで……。
「こんにちイースナ～。おっ、埋まっとるのうトゥアール」
　さらに転送ロッカーが開いて、イースナとメガ・ネもやって来た。
　仕事終わりに急いで来たのだろう、イースナはアイドル服を、メガ・ネはメガネドンの着ぐるみを着たままだ。
「トゥアールはん、この季節に天井に刺さったままやと風か邪ぜ引く

で？」
　見かねたメガネドンが、着ぐるみのヒレをうまく使ってトゥアールを引き抜いてあげた。
　ちょっと心配する点がずれているが。
「うう、すみませんメガ・ネさん……。ついでにそこの射撃の的みたいに平べったい胸に、バルカン砲を誤射してやってください……」
　トゥアールの言葉に鋭く反応する愛あい香かを、サメのゆるキャラがゆるーくなだめていた。
　全員が席につき、桜さくら川がわ先生と着ぐるみを脱いだメガ・ネがお茶を準備してくれる。
　慧え理り那なはその細かな追加も自分で見つけたいのか、壁や床に視線を移ろわせていたが……ふと思い浮かんだようにトゥアールに尋ねた。
「ですがトゥアールさん、どうして今、外敵に備えた強化を？　エレメリアンが一度でもここに攻めて来たのならわかりますが……」
「……ね、念には念を、と思いまして。ええと……アルティメギルの科学者・マーメイドギルディを見て、私も少し考えを改めたんです」
　やや歯切れが悪い気がするが……その名前を聞いて、部室内の空気が引き締まる。
　トゥアールは仕切り直すように咳せき払いをし、立ち上がった。ホワイトボードを引いてきてモニターモードにすると、そこにマーメイドギルディの映像を映し出す。
「これまで私たちは、エレメリアンの武人気質に甘えていたところもありますからね。それに比べてマーメイドギルディは、かつてないほどに行動の読めない不気味な存在です。警戒して、しすぎるということはありません」
　何をしでかすかわからない奴やつというのは、戦闘力が強大な敵より

もよほど始末に負えない。
　しかもマーメイドギルディは、同じ科学者である仮面ツインテール――トゥアールに、ぬけぬけと協力関係を申し出やがった。自分の研究を飛躍させるために、新しい刺激が欲しい。そのために、仮面ツインテールと手を組みたい……と。
　今後もトゥアールとの接触の機会を狙ねらう可能性があるから、用心しないとな。
「わかってる。あたしもマーメイドギルディの危険性はこの目で見てよくわかったわ」
　愛香の目は、ホワイトボードに映るマーメイドギルディの豊かな胸に注がれているように見えるが……。
「でもさぁ、そーじが女に腹パンするなんて、よっぽどムカついたのね。あれでかなり溜りゆう飲いんが下がったわ！」
　意地悪く口くち端はを吊つり上げ、俺の二の腕を肘ひじでつついてくる愛香。
「意識してやったわけじゃないぞ⁉」
　マーメイドギルディにトゥアールを悪く言われたのが許せなくて、無我夢中で拳こぶしを突き出しただけなんだが……テイルレッドは背が低いから、位置がそうなっちゃったんだよな。
　まあ俺も、相手があいつなら悪いとは思っていないけどな。
「ふぅむ……」
　斜め向かいに座るイースナが、難しそうな表情をしている。
「イースナ、何か気になることでもあるのか？」
「わらわはアルティメギルにいた頃ころ、マーメイドギルディと一度だけ会ったことがあるが……あんな奴やつではなかった。もっとおとなしい、無害な腐女子だったのじゃ。最初に総そう二じに話を聞いた時も、同一人物だとは信じられなかったほどじゃ……」

　ガイアギルディとの戦いで、マーメイドギルディというエレメリアンがどんな非道をしたか。俺は皆に伝えてはいたが……先のメデューサギルディとの戦いで直じかに目にしたことで、ようやく実感に変わったのだろう。
「それが今では、あんな野心家になってしまったのが不思議でな……まるで人変わりでもしてしまったかのようじゃ」
　イースナの記憶が確かなら、マーメイドギルディは何かきっかけがあって変わったということになる。一体どんなことがあれば、あそこまで歪ゆがんでしまうんだ──。

◇

　アルティメギル基地の大ホールでは、今日も会議が開かれていた。
　最強軍・神の一剣ゴー・デイア・ソードはこれまで自分勝手に出撃していたが、ようやくこの残存混成軍と足並みを合わせてくれる好漢、メデューサギルディが現れた。
　しかしそのメデューサギルディもツインテイルズとの激闘に果てた今、彼の勇猛な戦いを無駄にせぬよう、次に続かなければならないのだ。
　メインモニターには、先日のメデューサギルディとツインテイルズとの戦闘が映っている。
　テイルレッドの可か愛わいさにいつも通りほんわかしている戦士たちとは裏腹、スワンギルディだけは、厳しい面差しでモニターを見つめていた。
（……やはり、この映像も途中で切れているか……）
　自分が戦線離脱していた間の資料や映像もくまなく目を通したスワンギルディが怪しんだのは、最近の戦闘中継がこのように途中で切れてい

るものが多すぎることだ。
　中継を戦闘員アルテイロイドによる撮影に頼っている以上、戦闘員アルテイロイドが全滅すれば撮影は続行できない。
　他にも、不器用な漢おとこ気ぎでテイルブルーたちの泣き顔を撮影させまいとしたティラノギルディなど、戦闘者本人の意向で撮影を止めさせることもままある。
　だが、ある時期からそれらの理由がない不自然な撮影の中断が相次いでいるのだ。
　それは、一体のエレメリアンがこの基地に出入りするようになった時期と符合する。
　そのエレメリアンとは──
「みんなー、いいものができたわよー！」
　マーメイドギルディ。白衣型のパーツをはためかせ、早足でホールに入ってきた科学者を見て、スワンギルディは露骨に嫌そうな顔をした。
　多くの秘密を隠しているこのマーメイドギルディには、警戒を続けなければならない。部隊の暫ざん定てい隊長であるスワンギルディには、彼女の魔手から戦士たちを守る義務があるのだ。
「じゃーん！　ツインテイルズ『っぽい』武器～！」
　マーメイドギルディが手にしているのは、テイルレッドのブレイザーブレイド──の、柄つかの部分だけをさらに簡略化したような見た目のものだった。
　エレメリアンは自身の属性力エレメーラで生成した無骨な武器を使うことが常のため、こうしてテイルギアのようなメカニカルな装備を持つのは、かなり異質な光景だ。
「これを、こうする……と」
　マーメイドギルディが柄をぎゅっと握り込むと、紅あかい光が伸び、光波剣が形成された。

「おお、テイルレッドが必殺技を使う時に似ておる！」
　戦士の一体が感想を言う。
「ツインテイルズに対抗するためには、彼女たちと同じような武器を造ってみるのもアリだと思って。これはまだ試作品だけど、よかったら誰だれか使ってみない？」
「ほほお、近くで見るとまた、よくできている！　ツインテイルズが持っている武器と全く同じものに見えるなあ!!」
「……でしょ？」
　賞嘆の声に、マーメイドギルディは満足げにほくそ笑む。
「無用です！　人間が造ったものと同じ武装を手にするなど、我われらエレメリアンの誇りに反するというもの!!」
　スワンギルディはマーメイドギルディの「力を底上げしてやる」という戯たわ言ごとに踊らされて洗脳を受け、手て駒ごまとして使われてしまった苦い経験がある。そんな悪魔の科学者が発明品を配布することに危機感を覚えたのだろう、激しい剣幕で止めに入った。
「カタいこと言わないでよ、スワンギルディ君。テイルレッドちゃんとお揃そろいの武器って思えば、みんな抵抗なく使えるでしょ？」
「しかし、そんな見た目重視のハッタリ武器に、生命いのちを預けて戦うわけにはいかない!!」
「ざーんねん。威力もちゃーんと強いから、戦力アップにもなりま～す」
　この女には、口論では敵かなわない。それに、戦士たちの喜ぶツボも心得ている。
「ぬぐぐ……」
　悔くやしさに歯は噛がみするスワンギルディ。せめてもの抵抗にと、マーメイドギルディを精一杯睨にらみ付ける。
　他の戦士たちは、二体のそんなやりとりを温かな眼まな差ざしで見

守っていた。
「？　あの……皆様、何ゆえ孫を見る祖父母のような優しい目をされるのです？」
　スワンギルディがそれに気づき、不思議そうに尋ねる。
「ふふふ……我われらの誰だれに対しても遠えん慮りよがちなお前が、マーメイドギルディちゃんだけには妙に自然体で接すると思ってな」
「さては二人の間に何かあったのではないかー？　んー？」
　筋肉質のおっさんたちが、コイバナ好きな女学生のように悪戯いたずらっぽい流し目をしてくる。
　スワンギルディは、ぎょっとして弁明を試みた。
「自然体で接しているのではなく……」
「うふふー、バレちゃったー？　実は私とスワンギルディ君、ラブラブなのー♡」
　マーメイドギルディはスワンギルディの言葉を遮さえぎると、彼の腕を取り、恋人がするように深く絡めてきた。
「な、何を⁉」
　予期せぬ行動に狼狽ろうばいするスワンギルディ。
　戦士たちは大層どよめき、二人を祝福するように取り囲んだ。
「それは真か……実に目め出で度たい‼」
「そうか、お前にも彼女がなあ……」
　エレメリアンたちは感極まって肩を震ふるわせ、ハンカチを目め許もとに当てる者までいる。
「立派になったな……このホールでお前がエロゲミラ・レイターに耐えきれず気絶した日が、昨日のことのように思い出されるぞ……」
「スパロウギルディ殿まで⁉」
　生き真ま面じ目な老参謀までも一緒になって喜びだし、いよいよスワンギルディは焦あせり出す。

「皆様どうか聞いてください、これは違うのです！　マーメイドギルディ殿が勝手に言っているだけで!!」
「わっはっは、何ともテンプレな照れ隠しよ!!」
　我わがことのように喜ぶ戦士たちを見て、スワンギルディは苦悩する。
　彼らがこんなにも自分のことを思っていてくれることが嬉うれしく、そしてだからこそ、それを利用しようと企たくらむマーメイドギルディへの怒りも増した。
「結婚はいつするのだ！」
「子の予定は⁉」
　戦士たちのからかいは、絶え間なく浴びせられる。
「エレメリアン同士で、子など成せるはずがないでしょう⁉」
　弱り顔でそれを止めようとするスワンギルディだが、マーメイドギルディはますます悪ノリしていく。
「私は構わないわよ？」
　スワンギルディは、「冗談にしてはタチが悪い」とマーメイドギルディを睨にらみ付けたが──
「せっかく女性タイプのエレメリアンに生まれたんだもの──子供を産めたら、素敵だわ」
　彼女の寂しげな横顔に、目を奪われた。
「マーメイドギルディ、殿……」
「うふふ、もちろん普通の方法じゃ無理だもの、科学者として、そういう研究もアリと思うってだけ。子孫を残す実験に成功したら、それこそアルティメギルに革命を起こしたことになるわけだし」
　すぐにいつもの薄笑いに戻るマーメイドギルディ。
「フッフッフ、これは抱っこ紐ひもを買っておかねばならんかのう」
「では俺はベビーカーを用意しておくとするか」

「オムツが必要ならば、俺の私物を持っていくがよいぞ」
「貴様、何な故ぜオムツを持っている⁉」
　やんややんやと騒ぎ立てる戦士たち。これはもう、気の済むまで騒ぎ続けねば収まりそうにもない。

　スワンギルディには、マーメイドギルディのことがわからなくなってきた。
　エレメリアンは、初めから完全体として生まれる。
　赤子も大人もない、親も子もない、完かん璧ぺきで、そして孤独な生命体だ。
　子を成し、次代へと思いを繫つなげぬ悲しさなど、歴史の中にとうに置き去った生物だ。
　そんなエレメリアンの一体として、それが当たり前に生きてきたスワンギルディにとって、マーメイドギルディの一言はたまらなく痛烈なものだった。
　周りに調子を合わせただけの冗談だったのかもしれないが……スワンギルディが彼女に積もらせた怒りや憎しみを揺らがせるに十分なほど、切実な言葉だったのだ。
　子供を産めたら素敵だ、とは。

◇

　改修初日の真新しい部室で、俺たちはマーメイドギルディ対策の会議を続けていた。
「次にマーメイドギルディが現れたら、そーじが引き続き腹パン担当で、あたしは平らになるまで胸パンする担当で──」
　愛あい香かの意見がかなりデンジャラスな気がするが、それだけ警戒

心を強めているのだろう。
　みんなの意見が煮詰まってきた頃ころ、イースナは自分のスマホ──トゥアルフォンを見ながら溜ため息いきをついていた。
「どうしたイースナ。マーメイドギルディについてまだ気になることがあるのか？」
「ちーがーう！　唯ゆ乃のはどうしたのじゃ、最近とんと顔を見せんではないか！　今も部室が改修されたってメールで教えてやったのに返ってこんし！　ゆーのゆのゆのゆのー‼」
　長机の上に飛び乗って大の字に倒れ込むイースナ。そのまま、先日学園に爆ばく誕たんしたゆのゆのファンクラ部の連中のコールのような声を上げて駄々をこね始める。
　それで会議の間ずっと、トゥアルフォンをちらちら見てたのか。
「…………ああ。そういえば俺、この間連絡をもらったんだけどさ。唯乃のやつ、しばらく特訓してくるって言ってたぞ。連絡を絶って山ごもりでもしてるんじゃないか？」
「何じゃと、それは本当か⁉」
　俺は先日、精神世界のよう空間で唯乃と会った。
　そして唯乃が首領と再戦して負けてしまい、そのためしばらく休むと伝えられたのだ。
　とはいえそのことを正直に話しても、またいたずらにイースナを怖がらせるだけだ。こうして誤ご魔ま化かしておくのが無難だろう。
　そもそもあの精神世界での会話が、ただの俺の夢だったという可能性もあるしな。
「ま、あいつの性格なら仲間になる前にまず特訓するでしょうね。そーじとの真剣勝負で負けたんだから。……せっかく世間に印象よくデビューした矢先に、勿もつ体たいないけど」
　愛あい香かには、負けたら特訓という発想はしっくりくるようだ。

「唯乃さんはそれでいいと思います。チームに属することをよしとせず、けれども戦友のピンチには必ず駆けつける……それもまた、ヒーロー番組の終盤の追加戦士の王道ですわ!!」
　慧え理り那なも朗ほがらかに両手を合わせ、愛香の意見に賛成する。
　終盤……か。
　俺たちの戦いも、そうだといいな。
「せっかく後輩ができたと思ったのに……。水くさいではないか唯乃のやつ、特訓ならばわらわがつき合ってやるわ。その方が効率がいいのじゃ……」
　一応納得はしたようだが、それでもイースナは残念そうだ。
「……では、そろそろ今日の会議はお開きにしましょうか。帰る前に、部室の追加機能を少し説明しておきますね！」
　トゥアールがそう切り出したのはきっと、イースナを気遣ってくれたんだろう。
　慧理那も待ってました、という喜びを分かち合うように、イースナに微ほほ笑えみかけた。
「まず目玉の機能として、ナビゲーション機能を追加したんです。『ＯＰおつぱい、トゥアール』」
　突然何を言い出すのかと思えば、それが起動コマンドになっていたらしい。長机の上に、トゥアールそっくりのホログラフ映像が浮かび上がった。
　黒丸お目々に、逆三角の口。アニメチックにデフォルメされた、二頭身のトゥアールだ。
　机から離れて立ち会議を聞いていた桜さくら川がわ先生やメガ・ネも、興味深そうに寄ってくる。
『ご用件は何ですか？』
　トゥアールそっくりな声で、愛想よく聞いてくるホログラフ。

「いいでしょう～、電子妖精エレクトフエアリー〝とぅあるん〟です！　ＳＤチックに描くことで、謎なぞの光などを使わずとも地上波放送に対応した全裸にもできます！　しかも、名前のエレクトはエッチな意味にも捉えられる芸の細かさです‼」
「とぅあるん……？　……あんた正気？」
　愛あい香かは眉まゆを思いっきり顰ひそめ、浮かんでいるホログラフの名前にダメ出しをする。トゥアールは気にすることなく、説明を続けた。



「この部室の中で『ＯＰおつぱい、トゥアール』と言うと、こうしてとぅあるんが起動するんです。話しかけると、色々教えてくれて便利ですよ？」
「な、なあ……どうしてもそう言わないと駄目なのか？」
　俺は遠回しに「変えてくれ」と頼むも、
「私はおっぱいの方が自信があるんですが、『トゥアールのお尻シリ』でも起動しますよ！」
　次案もほぼ同じ難易度だった。
「皆さんのトゥアルフォンにも次のＯＳバージョンアップで実装されますので、ご期待ください。容量が九五〇〇ＧＢあるので、ダウンロードに一分くらいかかりますが」
　ソシャゲで新しいイベントが始まる度たびに通信容量節約したいって言ってるクラスメイトたちが聞いたらどんな顔するだろうな、この異次元のデータ量と転送速度……。
「このとぅあるんさんは、明日の天気や、目的地までの道順などを教えてくれますの？」
　電子の妖精を、何な故ぜか親近感溢あふれる笑顔で観察する慧え理り那な。
「あとは、ＣＩＡのデータベースとか、国連の議事録とかも気軽に閲覧できますよ。お気に入りの作家のＰＣをハッキングして、書きかけの原稿を見ることもできます」
　しれっと地球を支配してないか、この電子の妖精。
「よーし。ＯＰおつぱい、トゥアール。私の結婚式の日取りを教えてくれ」
　腕組みをして、嬉うれしそうにそう尋ねる桜さくら川がわ先生。
『…………ピー、ガが、ぴｐ』
　直後、とぅあるんにノイズが走り、映像が不鮮明になっていく。

　ついには、ＳＤキャラにあるまじきリアルな吐血をして、霧む散さんしてしまった。
「ああっ……とぅあるんがバグった⁉　優れたＡＩでも演算しきれない無理難題なんですよ、尊みことさんの婚期は‼」
「しょせんはデータだな……計算外のことには対応しきれん。結婚とは、数字では測れない神聖なものなのだ」
　桜川先生はツインテールにどこか哀愁を漂わせながら、そう断じた。
「うう……行き遅れがドヤ顔で科学を否定する……」
　床にへたり込むトゥアール。たった一人の女性の婚期の予測演算が、ＣＩＡや国連へのハッキング難度を遥はるかに超越するとは……。
「でも桜川先生、『ない』って即答せずにバグるまで悩むってことは、可能性があるってわけですから……」
　強がりながらも少し寂しそうにしているので、俺は桜川先生をフォローする。
「良いことを言ったぞ観み束つか。あのとぅあるんとやらも、さっきお前に渡した婚こん姻いん届とどけの可能性を計算に入れていたのだろうな」
　婚姻届が、いつの間にか俺の制服の内ポケットに差し入れられていた……。
「……何か、微妙ね」
　とぅあるんの消えた宙空をじっと見ながら、愛あい香かがぼそりと呟つぶやく。
「あれがリニューアルの目玉って……。今までのあんたなら、もう少しはっちゃけたもん作ってたでしょ？　チラシにはデカデカと〝大改装〟って謳うたってたのに、いざ行ってみたらちょびっと商品陳列が変わっただけな量販店みたい」
　愛香の指摘に、トゥアールがうっと息を呑のんで後あと退ずさる。

「最近、アンチアイカシステムもパッとしないじゃない。前はあたしも、不意を突かれて驚いたりしたのに」
「パッとしないんじゃなくて、何を出しても愛香さんに速攻で壊されてるだけですよ！　むしろ、作っては壊され作っては壊されを繰り返してるのに、それでもまだ挑み続ける私の不屈の闘志を讃たたえてくれませんか!?」
「うん、すごいわ。順番でいくと次は一五号でしょ？　早く出しなさいよ」
　愛あい香かのツインテールが、闘争を求めてうずうずしているように見える。
　地下基地の機能説明を受けた時も、愛香は自分に攻撃を仕掛ける防衛システムにだけ反応してたからなあ。とぅあるんのようなほのぼのとしたものでは、物足りないのかもしれない。
　だが、いつものように負けじと言い返すかと思っていたトゥアールが、見る見るうちに意気消沈していった。
「……私、スランプ……なんです……」
　およそこれまでのトゥアールからは想像もできない弱音に、俺たちは動揺する。
「発明をしようとしても、全然アイディアが浮かばなくて……。昨日も夜通し地下基地を改造してたんですが、ここと同じで防御能力の向上とかがせいぜいでした……」
「え……ちょ……ホ、ホントに？　あんたが!?」
　思わず立ち上がり、トゥアールに駆け寄る愛香。いつものからかい半分で焚たき付けたのだろうが、そこへこの切実な反応だ。慌あわてるのも無理はない。
「いい機会ですから、何か作ってほしいものとかありましたら、言ってください。インスピレーションが欲しいんです……」

どこかくたびれた表情で、トゥアールはそんなリクエストをしてきた。
「わたくし、一度でいいからアンチエリナシステムを作っていただきたいですわ！」
元気よく挙手する慧え理り那な。
うっきうきで希望するようなものかな、自分を攻撃するシステムって……。
「アンチエリナシステム……ＡＥＳか。無線ＬＡＮの暗号形式みたいじゃな」
「いけませんよ慧理那さん、そんな脆ぜい弱じやくな暗号形式、私なら暗算で突破できます……」
この世界では広く市民権を得ている暗号形式も、トゥアールにとってはセキュリティが心こころ許もとないのか……。
「仕方ない。枯れたトゥアールのために、皆でアイディアをたーくさん出そうではないか！」
神眼鏡ゴツドめがねのブリッジを指で押し上げ、頼もしげな笑みを浮かべるイースナ。
「ご、誤解を招くようなことを言うんじゃありません！　大丈夫ですからね総そう二じ様、トゥアールちゃんはいつでも肉欲ＭＡＸですから！　何なら今ここで、とぅあるんの隠し機能・全裸化を本体の私がやってみせます！　謎なぞの光無しで!!」
謎の光とやらが何かは知らないが、全裸化は困る。
それにしても、トゥアールがスランプ──か。
たった一度の失敗が大きく尾を引いてしまう……トゥアールが天才であるが故ゆえの悩みなのかもしれないな。

トゥアールのおっぱい

　　　　　　　　トゥアールのおっぱい
　　　　　　　　　　　　　　　　トゥアールのおっぱい

　カップに残っていたお茶を飲み干そうとした俺は、不意打ち気味に鳴り響くアラートに思わず咽むせた。
「あっ、総そう二じ様の！　リクエストで！　リバイバルしたエレメリアン出現アラートが！　皆さん、出撃してください!!」
　嬉き々きとしてノートＰＣを広げるトゥアール。
　……リ、リクエストしたわけじゃ……ずっと使ってたアラートが急に使われなくなったから、どうしたんだろうと思っただけで。
　まあいいか、この間抜けな自分の音声も久々だとありがたみを感じる。
　などとほっとしていると、ホログラムのＳＤキャラが唐突に長机の上に出現した。

『ご用件は何ですか？』
　　　　　　　　『ご用件は何ですか？』
　　　　　　　　　　　　　　　　『ご用件は何ですか？』

　バグって落ちたとぅあるんが、アラートの音声に反応して複数体起動したようだ。
「うーん、『トゥアール』と『おっぱい』が起動ワードだと、あまりに日常で使われすぎて不便ですね……」
　普通は日常的にセットで使われる言葉じゃないはずなんだがな……。
「ええと、属性力エレメーラの大きさ的に……出現したのは一般兵士ですね」
　トゥアールは、ノートＰＣに映し出されたデータを皆に伝える。

「そいじゃ、わらわはパスじゃ。最近ちと仕事がハードでな……今日は先に帰って休む」
「わかった。無理するなよ、イースナ」
　出撃を辞退したイースナと別れ、俺たちは転送ロッカーから地下基地へと向かった。

◇

　エレメリアンが出現したのは、南国のリゾートビーチだ。
　今は冬真っ盛りの日本の海岸と違い、温かなここは観光客でごった返している。
「モケーケ」
「モッケッケー」
　腰こし蓑みのをつけた戦闘員アルテイロイドが踊り回ってるのが見えた。あいつらもこの陽気にあてられたのか。
　駆けつけた俺に手を振りながら逃げていく、グラマラスな水着のお姉さんたち。
　彼女たちを追いかけていたエレメリアンが、俺たちの存在に気づいて振り返った。
「現れたなツインテイルズ！　俺は臍属性ネイベルのフロッグギルディだ！」
　ふっくら丸いカエルのような見た目のエレメリアンだ。
　しゃがれ声で名乗ったかと思えば、怖おじることなく俺たちへと歩み寄ってくる。
「臍属性ネイベル……ヘソか……。そろそろ部位系属性も全身コンプリートしそうな勢いね」
『モザイクが必要な部位のエレメリアンは、まだ一体も出てきていませ

んが』
「そんなの出なくていいっての!!」
　トゥアールの通信を聞くや、全身を震ふるわせるブルー。
　注意が逸それた隙すきに、フロッグギルディは素早く跳躍。ブルーの眼前に急迫し、しゃがみ込んでお腹なかをまじまじと見つめた。
「ふん、なかなかのおヘソだ。おヘソ丸出しで戦う尊とうとさだけは認めてやろう」
「うわっ！　み、見ないでよ気持ち悪いわね!!」
　慌あわててヘソを手で隠すブルー。
　ブルーのテイルギアは、露出部分が多くて……ヘソも見えているんだよな。
「なぜ隠す！　貴様がヘソを丸出しにしているのは、見てもらうためだろう!!」
「だとしても、あんたにじゃないわよ!!」
「往生際が悪いぞ、テイルブルー！　貴様は丸出しなのだ！　この丸出し女めが!!」
　ブルーはこめかみに青筋を浮かべ、顔がん層そう筋きんをひくつかせたが──
「ひっ……こいつ、何かぬめぬめしてる……！」
　フロッグギルディのぬめった体表に嫌悪感を示し、後あと退ずさる。
　中腰のままぴょーんと飛び跳ね、今度は俺の間近に着地するフロッグギルディ。
「アンダースーツから透けて見えるテイルレッドのおヘソ、いい……。頬ほお擦ずりしてよいか？」
「だーっ、やめろ！」
「ヘソはその者の人生を表すという……腕白で無邪気でそして可か憐れんな、よいおヘソだ……。写メっと」

「うぉい！　お前、ふざけんな！」
　一瞬の早はや業わざで、俺のヘソをスマホで撮影するフロッグギルディ。
　こいつ、手慣れてやがる……！
　以前戦った腋わきが好きな奴やつもそうだったけど、この手のエレメリアンは身体からだをやたら見てくるから、ブルーが尻しり込みするんだよなあ。
　俺はフォースリヴォンを叩たたき、ブレイザーブレイドを握る。
「わたくしのおへそもスーツから透けています！　レッドとお揃そろいですわ!!」
　周囲の戦闘員アルテイロイドを倒し終わったイエローが、わざわざお腹なかをアピールして走り寄ってきた。
「そ、それにこうやって胸アーマーだけ脱衣パージすれば……」
　胸アーマーの脱衣パージに合わせて、腹部のアンダースーツが粒子化して消える。
「はあ、はあ」
　出てきたヘソを見ろと言わんばかりに、イエローは俺ににじり寄って来た。
「わかった、わかったから！」
「ん、おお」
　イエローの言葉で何かを思い出したように、拳こぶしで手を打つフロッグギルディ。
「テイルレッドとお揃そろいか、まさにそれだ。今日の目的を忘れるところであった」
「俺とお揃い……!?」
　フロッグギルディはお腹の膨ふくらみに手を突っ込み、中から何かを取りだした。

……柄つか……？　剣の柄か──って、あれは！
　俺の驚きよう愕がくと同時に、フロッグギルディの握る柄から紅あかい光の刃やいばが飛び出した。
　ブレイザーブレイドとそっくりな、灼しやく熱ねつの刃が。
「ふははー！　いいだろー！　テイルレッドとお揃いだ!!」
　俺は、思わず手にしたブレイザーブレイドと見比べる。こちらはまだ実体剣のみだが、奴やつの持っているのは完全解放ブレイクレリーズしたブレイザーブレイドと同じ……炎の光波剣だ。
「レッドのブレイザーブレイドそっくりですわ……!?」
　イエローが目を見張るのも無理はなかった。
　ただ同じ炎の剣、というわけではない。微妙に見た目は違うが、コンセプトというか……統一感というか、根本が似ているのだ。ぱっと見の質感も、テイルギアそっくりに感じる。
　同じ人間がデザインしたものに見える……と言うのが早いか。もちろん、そんなはずはないのだが。
『……あ、あ……!?』
　通信越しに、トゥアールが動揺しているのがわかる。
「さあ！　同じ剣を手にした者同士、尋常に勝負といこう、テイルレッド!!」
　フロッグギルディは得意げに剣を素振りし、慣れない手つきで中段に構えたが──
「……おや？」
　ふと見下ろすと、その身体からだは青いオーラピラーで拘束バインドされている。
「あたしのは槍やりよ」
「ぐああああああああああああああああああああああああああああひどすぎる横槍!!」

焦じれたブルーがエグゼキュートウェイブを叩たたき込み、フロッグギルディはあっさりと爆散してしまった。
ブルーの自己主張が、決闘に割って入る理由に全くなっていないのが恐ろしい。
ぬめっているなら、触れずに倒せばいいということか……。
見ているだけで終わってしまったイエローが、せめて一仕事と属性玉エレメーラオーブを回収する。
俺は、フロッグギルディが倒された場所に剣が転がったままになっていることに気づいた。
爆炎も消えた砂の上で、赤い光の刃やいばは未いまだに妖あやしく光っている。
「変だな……」
エレメリアンが手にしている武器は、自身の属性力エレメーラで生成したものだという。
倒したエレメリアンが爆散した後、武器も一緒に消滅するのはそのためだろう。
だがこのブレイザーブレイドもどきは、倒した後もこうして形を保っている。
「……フロッグギルディが生成したものじゃないってことか……？」
疑問に思い、俺が手を伸ばすと……その謎なぞの剣の柄つかが、断続的に放電を始めた。
咄とつ嗟さに手を引っ込めた瞬間、剣が木っ端微み塵じんに爆発してしまった。
まるで俺が取ろうと試みたことがスイッチになったかのように、剣が爆発──いや、自爆したのだ。
「レッド、早く帰らないとー。またギャラリーが集まってくるわよ？」
「ああ……」

ブルーの催促にも、生返事になってしまう。
俺はその爆発の仕方に、奇妙な既視感をおぼえていた。

◇

その日の夜。
自室でベッドに入ってから、何時間経っただろうか。目を瞑つむっても、意識が冴さえたままだ。
寝よう寝ようと意気込むと逆に寝られないことはたまにあるが、今夜は色々なことが頭を巡っている。
エレメリアンは今まで手を替え品を替え、様々な作戦を立ててこの世界に侵攻してきた。
今日のフロッグギルディが俺の武器に似た剣を使ったのも、単に自己満足とか趣味とかだけではないはずなんだ。
大して強いわけでもなかったし、そこまで気にすることでもないかもしれないが……。
あいつらが妙なものを造ったかと思えば、その一方でトゥアールは発明のスランプだ。何か、気になる重なり方をしているんだよな。
そういえば、イースナがトゥアールのためにアイディアを持ち寄ろうと言っていたっけ。
どうせ眠れないんだ。この際すっぱりと起きて、発明アイディアを考えようか。
そう決心し、俺はベッドから起き上がる。
「うわっ⁉」
部屋の真ん中にうっすらと人影が見え、思わず声を上げた。
愛あい香かか……それともトゥアールか？　でも、少し小柄なような。

　真夜中だから、慧え理り那なやイースナではないと思うが……。
「□□□□□□！」
　光線となってこめかみを貫くかのような、鮮烈なツインテールの気配。
　おぼろげだった視界に、一人の女の子が像を結ぶ。
　俺は慌あわてて部屋の明かりを点つけた。

「──久しぶりだね、総そう二じ」

　そこに立っていたのは……陽よう月げつ学園高等部の女子制服姿の、ソーラだった。
「ソーラ⁉」
「元気してた？」
「そ、そりゃもちろん、元気ツインテールしてたけど……」
「そっか」
　ごく普通に世間話が始まり、俺は戸惑う。
　ソーラの声の幻聴が聞こえたのは、最近まで何度かあった。
　しかしこうして顔を合わせて話すのは、俺がティラノギルディとの戦いの中で真の究極のツインテールに覚かく醒せいした時以来だ。
　今俺が見ているのは、精神世界の延長なのか？　それとも、ソーラは実体を持ってここに現れたのか？　俺は、意を決して聞いてみた。
「な、なあ、ソーラ……今の君は、一体どういう存在なんだ？」
「ツインテールだよ？」
「なるほど」
　そう言われれば、納得するしかないのが俺だ。
　ベッドの前で立ち尽くす俺を余よ所そに、ソーラは勉強机の方へと歩いていった。

「わぁ～、これが総二の部屋かぁ」
　なんて完かん璧ぺきな歩法なんだ。歩みの美しさといえば、ツインテールの揺れと所作が調和した理事長を連想する。
　だがソーラからは、ずっと年上であるはずの理事長よりもさらに、ツインテールに積み重ねた年月を感じる。
　髪も人体の一部なのだ、言葉はおかしいかもしれないが……それでもあえて言うのなら、ソーラは、〝人じん髪ぱつ一体〟。
　所作の全てがツインテールを引き立て、ツインテールが所作を美しく魅せている。
　理想的な、ツインテールとの共存関係だ。
「前に来た時は、ゆっくり見ることができなかったから……ちょっと新鮮」
「普通の部屋だろ？」
　何がそんなに珍しいのか、大して広くもない部屋のあちこちへ視線を移ろわせていく。
　やがて本棚の前に行くと、ソーラは少し呆あきれた表情でこちらを振り返った。
「……えっちなゲームとか、いっぱい持ってるんだね」
「それはイースナが置いてってるだけで……」
　本棚には、何本かエロゲーが置いてある。
　見えない場所に仕舞うとイースナが次々に補充してキリがないので、仕方なく本棚に並べておいているのだ。
　嘘うそ偽いつわりなく告白しているというのに、ソーラは妙に物わかりがよさげな微ほほ笑えみを浮かべ、
「いいよ。男の子ってそういうものなんでしょ？　許してあげます」
　えっへん、と胸を張った。
　やっぱりこっちの明るい方が素すなのかな。ソーラと初めてこの部屋

で邂かい逅こうした時、彼女は無言で悲しげな表情をしていた。それが強く印象に残っているので、ギャップに戸惑う。
「ところで……今日はどうしてここに？」
「大切な話をしに来たの。実はこの状態、かなり無茶してるけど……こうでもしないと今の総そう二じとゆっくり話すのは難しいから」
　ソーラは本棚からエロゲーの箱を一個取ると、まじまじと見つめる。
〝ツ淫いんテール催眠～あの子に結ぶ強制発情リボン～〟という、果てしなく血迷ったタイトルのエロゲーだ。イースナも、俺が興味を示しそうなものを選んでくれているようなのだが……。
「何で今の俺とだと、無茶をしないと話せないんだ？」
「総二が究極のツインテールの力を使いこなしつつあるせいで、逆に私との繫つながりが薄らいでいるんだよ。……わかってたことだけどね……」
　寂しげに眼めを細めるソーラ。
　大切な話があるようだが、それならまずエロゲーの箱は手放して欲しい。
「そうなのか……。それで、大切な話って──」
　ソーラはいつかと同じ悲哀に濡ぬれた瞳ひとみで俺を見つめ、静かにツインテールを揺らした。

「──総二。あなたはもう、戦わないで」

第二章　秘密のツインテール。

〝あなたはもう、戦わないで──〟
　不穏な空気を感じてはいたが、それでもなおソーラの言葉は予想だにしないものだった。
　納得できず、俺は狼狽ろうばいを押し隠して聞き返した。
「アルティメットチェインに……真の究極のツインテールに覚かく醒せいする時、俺に思いを託してくれたのは外ほかでもない君じゃないか。どうして今さら、そんなことを……!?」
　何度も唇くちびるを引き結び躊躇ためらいながら、それでもソーラは重い口を開いた。
「……アルティメギル首領が……力を使ったの……。今あの子は、戦うことの喜びに満ち満ちている。きっとそう遠くない未来、総そう二じたちと戦うことになる……」
「なんで、力を使ったことが君にわかるんだ……？」
「それは……わかるから、だよ」
　答えになっていない答えだが、首領とやらが力を使ったと言われれば、俺もそれが何な故ぜなのかはわかる。
『いやぁ～、実は俺様、首領と戦やり合ったんだけどよ……また負けちまった!!』
　不死鳥の戦士が、首領と戦って敗北を喫したと俺に伝え聞かせたからだ。
　これで唯ゆ乃のとのあの邂かい逅こうは、夢じゃなかったと確定してよさそうだな……。
「このままじゃ総二は、大切なものを失うことになる。私はもう二度と、君が悲しむ顔を見たくないの」
　俺の大切なもの……聞き返すまでもなくそれは、ツインテールだろ

う。

　ソーラはアルティメギル首領と俺たちが戦い、敗北することを危き惧ぐしているのだ。

「だからといって、何もしないわけにはいかないよ。戦わなければ、どの道大切なものを失ってしまう。だったら俺は、戦う方を選ぶ。後悔だけはしたくないんだ」

　俺は、一度ツインテールを失った絶望を乗り越えて、何よりもまず自分自身のツインテールを守る大切さを深く心に刻み込んだ。

　自分のツインテールさえ守れなくて、他のツインテールを守れるはずがないからな。

「そう……。やっぱり君は戦いを続けるんだね、総二……」

　悲ひ愴そうな眼まな差ざしで俺に訴えかけてくるソーラ。

　シリアスな雰囲気を醸かもし出しているのはいいが、エロゲーの箱をまだ手に持ちっぱなしなのが気になって仕方がない。一旦置いてくれないかな……。

「……あなたが後悔しないように戦うというなら、私も後悔しないためにやれることをやるからね、総そう二じ……」

「！　ソーラ！」

　何の余韻も残さず、ソーラの姿は消えてしまっていた。

　彼女は、寝ぼけた俺の見た幻だったのだろうか。

「……いや、幻なんかじゃない……」

　皮肉にも、勉強机の上に移動しているエロゲーの箱が、ソーラがここに存在していたという確かな証明になってしまった。

　本棚に置かれていたものだ。勝手に浮いて、ここまで移動してくるはずがない。

　俺はエロゲーの箱を本棚に戻そうと、そっと手に取った。

「温かい……」

仄ほのかに残った人の温ぬくもりを感じる。

ソーラは何な故ぜ、アルティメギル首領を、「あの子」なんて親しげな呼び方をしたんだ。

君は一体、何者なんだ。会う度たびに、君というツインテールがわからなくなるよ。

勢いよく窓が開いて部屋に冷気が吹き込み、俺ははっと我われに返った。

「こらぁトゥアール！　昨日あれだけ言って聞かせたのに──」

窓からベッドに伝い、部屋の中に入ってくる愛あい香か。

「……あれ？」

トゥアールがいると思ってやって来たのだろう。愛香は首を傾かしげる。

隅から隅まで見渡してもいないからか、愛香は部屋の匂いを嗅ぎ始めた。

さらに屈かがみ込むと、現場検証をする鑑識官のような仕草で床を調べていく。

ソーラの髪の毛が落ちてはいないかとヒヤヒヤしたが、特に何も発見できなかったようだ。

しかし納得がいかないのか、愛香は立ち上がって俺ににじり寄った。

「………………今、ここに女がいなかった？」

「ハハ、俺ダケダヨ？」

俺は持ち得る演技力を爆発させ、渾こん身しんの反論を試みた。

国民的テーマパークのマスコットキャラのように声が裏返ってしまったこと以外は、及第点のはずだ。

「そーじ、それ……」

愛香がはっとしながらこちらを指差す。俺の手には、エロゲーの箱が。

……しまった、俺まで持ちっぱなしにしていた。
「あ、あ～……あは、は……」
　そして愛香は、何かに気づいたかのように急に挙動不審になる。
「……ご、ごめんねそーじ、タイミング悪かったかな？　違うの、妙な気配がすると思って来ただけだから……。そっか、そういう時って妙な気配になるんだ……」
「え、そういう時……って、どういう時だ？」
「口うるさく言うつもりはないけど、そういうのって、そういうのを必要な男の子がやればいいっていうか……そ、そーじにはそういうのは必要ないっていうか……」
　さっきから言葉がやたら抽象的だな。よくわからんが、愛あい香かに気を使われているみたいだ。
「あ、あたしは家に帰るけど、聞き耳立てたりしないから！　気にしなくていいから!!」
　愛香は再び窓を開けて自分の部屋の窓に飛び移り、帰っていった。
　ソーラのこと……話しても、夢だって思われるだろうなあ……。

◇

　皆の者。
　このテイルレッドのおヘソをお前たちが見る時、俺はもうこの世にいないだろう。
　だが、恐れず後に続いて欲しい。この可か愛わいさを勇気と代えて――。

　アルティメギル基地の大ホールに、フロッグギルディが出撃前に遺のこしたボイス・メッセージが流される。

　そしてメインモニターには、彼が写メしたテイルレッドのヘソが大写しとなっていた。
「フロッグギルディよ……貴様の遺志、確かに受け取った!!」
　仲間が、己の生きた証あかしと託してくれた盗撮画像だ。
　いかつい怪人たちの視線が一つに束なり、そのチャーミングなおヘソに突とつ貫かんする。
　しかしテイルレッドの可愛さを見ただけでは収まらぬ怒りが、ホールには渦うず巻いていた。
「フロッグギルディはテイルレッドとの一騎討ちを望んだというのに……真剣勝負という神聖なるものを、こうも容た易やすく踏みにじるか、テイルブルー!!」
「人間世界の警察機構は、腐りきっている！　何な故ぜテイルブルーを逮捕せず野放しにしているのだ!!」
　激情のままに机を叩たたき、治安維持組織の腐敗に一石を投じるエレメリアン。
　異形の怪人たちは口々に、テイルブルーの悪あく逆ぎやく非ひ道どうを謗そしり始めた。
「ぬおお、いかん、誤ってテイルブルーのヘソ画像が表示されてしまった!!」
「消せ消せーい!!」
　モニターが静止画像から戦闘の中継画像に切り替わってしまい、泡を食って戦闘員アルテイロイドに指示するエメレリアンたち。今日もアルティメギル基地は、テイルブルー一人にてんやわんやだ。
「フロッグギルディ殿の無念は、痛いほどわかります。私も同じ目に遭いましたから……」
　経験者のスワンギルディも、暗いトーンで語る。
　彼はかつてドラグギルディの仇かたき討ちとばかりにテイルレッドに

挑み、負けはしたものの互いに健闘を讃たたえ合った。
　だというのに、後からやって来たブルーにとどめを刺され（かけ）たのだ。苦い記憶だ。
「じゃあ、いっそのことテイルブルーに復ふく讐しゆうしちゃう？」
　早足でホールに入って来るや、そんな提案をしたのは、またしてもマーメイドギルディだ。ホールの中央に進み出て、戦闘員アルテイロイドに簡素なテーブルを用意させる。
「他の世界ならツインテールの戦士の評判を落とすような作戦は侵略に逆効果だけど、この世界はテイルレッド以外の評判なんてあってないようなものだもの。テイルブルーに、今までのお返しをしちゃいましょうよ」
　テーブルに並べられたのは、見た目が同じ四つの柄つか状のアイテムだ。マーメイドギルディはそれぞれを操作し、変形させていった。
　まず初めは、フロッグギルディが使ったものと同じ赤い光剣。
　二つ目は、柄からさらに長い棒じみた持ち手が飛び出し、先端がビーム状の三みつ叉またの槍やりとなった。これは明らかにテイルブルーのウェイブランスを意識したものだろう。
　次は、柄の中に収納されていたトリガーとグリップが現れ、拳銃型の武器に。
　そして最後は、槍と同じ要領で持ち手が伸びた後、先端が巨大なビームの鎌かまになった。
　ツインテイルズ四人の武器が、見事に再現されている。
「私が作ったこの『ツインテイルズっぽい武器』を手に、ツインテイルズのふりをして人間の属性力エレメーラを狙ねらうの。ついでに、おかしな行動をしたりしながらね。属性力エレメーラが奪える上に、ツインテイルズの評判も落とせて、一石二鳥！」
　戦士たちのどよめきの中、マーメイドギルディは作戦名を宣言した。

「名付けて『ツインテイルズ真ま似ねっこ大作戦』よ☆」
「むうう……いささかダサいが、女子みあるネーミング……」
　思わず唸うなる巨漢のエレメリアン。
「どう？　スワンギルディ君」
「問題ないと思います」
　そっけなく返答するスワンギルディ。もう、よほどのことでなければ反論はしない。
　マーメイドギルディ相手にムキになればなるほど、周りからひゅーひゅーと冷やかされるからだ。
　それに、この作戦は素直に一理あると思える。
　ツインテイルズが変なことをしていると誤解され、評判が落ちるには……真似っこのクオリティも相応に確保されることが大前提だが。
「よし！　テイルレッドは俺に任せよ！」
　早速、作戦に志願する者が現れたが……案の定、レッド役が取り合いになった。
「なにい、ずるいぞ！　だいたい貴様のその野太い声でテイルレッドになりきろうなど、どだい無理な話ではないか‼」
「ボイトレしまくれば、俺もいつかはテイルレッドのような可か愛わいい萌え声になるわ‼」
　転生しなければ無理なレベルの難題を、弛たゆまぬボイストレーニングのみで成しえようと意気込むエレメリアン。
「テイルレッドは希望者の倍率が高そうですね。先にブルー、イエロー、ブラックの役から決めましょう！」
「そうだな。では、レッド以外の役の希望者は挙手を」
　スワンギルディの提案を受け、横に立っていたスパロウギルディが促うながすも、誰だれ一人としてピクリとも動かない。だるまさんが転んだが始まったかと思うほどだ。

　答案用紙に名前さえ書けば受かる入学試験が、受験者ゼロというショッキングな結末に終わってしまった。
「テイルブルーは貴様に任せた」
「いや、お前だろう。身体からだの色が青いぞ！」
「俺はテイルブルーを知る前からこんな色だ、仕方がなかろう!!」
　そうして始まったのは……醜みにくい押しつけ合いだ。
「ですが身体が青いというのは、テイルブルーの物真ま似ねをする上で大きなアドバンテージになるのでは？　いかがです」
　スワンギルディがやんわりと薦めるが、
「い、嫌だ……テイルブルーを真似っこするには、機械のごとき殺さつ戮りくマシンとならねばならぬ！　心を殺さねばならぬ！　俺は、生きたい！　俺は……俺は……!!」
　推薦されたエレメリアンは、頭を抱かかえて蹲うずくまってしまった。
　いち女子高生の物真似をするだけの話で、生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされていた。
　怪人にここまで拒否されるテイルブルー。彼女が積み重ねてきた暴虐を物語っている。

「おーい、遊びに来たぞー。何やってんだー？」

　どんよりとした空気になってきたホールに、無邪気な声が響く。
　自称・元神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士アポロギルディが、スキップをしながら入って来た。
　フードを下ろした白ローブが、軽快に揺れている。厳いかめしい印象を与える神の一剣ゴー・デイア・ソードの正装ローブも、子供のような身長の彼女が着ていると、園児服のように可愛く見えるから不思議だ。

　アポロギルディは基地にやって来るのも気き紛まぐれなので、神しん出しゅつ鬼き没ぼつのマスコットキャラのような印象を戦士たちに持たれていた。
「アポロギルディ殿。実は……」
　スワンギルディは、マーメイドギルディの立案した作戦と、その過程で発生した問題を説明する。
「えー？　そんなんで悩んでんの？」
　それを聞いたアポロギルディは、つまらなそうに頭の後ろで手を組む。一瞬、意味ありげな視線をマーメイドギルディに送ったように見えた。
「もうインスピレーションで決めちゃおーぜ！　えーと、よし、お前!!」
「お、俺が……テイルブルーの真ま似ねを!?　無理無理、絶対無理!!」
　幼いエレメリアンに指をさされ、巨体のエレメリアンがみみっちく動揺する。
「えー、いけるって絶対。決ーまり！」
　アポロギルディが指名したのは、野生の勇ましさを凝縮したような風ふう貌ぼうのエレメリアン。
　その名もゴリラギルディだった。

◇

　ソーラと会話したその日の授業中、俺は駄目元で心の中でソーラに呼びかけてみた。
　だが、幻聴すら聞こえてくる気配はなかった。
　精神世界とか夢通信とかで何人とも会話したりしたけど、結局俺自身からは誰だれにもコンタクトを取ることができないんだよな……。

自分にも考えがある――という、ソーラの意味深な言こと伝づてだけが気になったまま時間が過ぎ、気づけば放課後だ。

愛あい香か、トゥアールとともにツインテール部部室に向かうと、珍しく俺たちより先に慧え理り那な、桜さくら川がわ先生、イースナがやって来ていた。

長机の上にとぅあるんが表示されている。みんなで色々話しかけていたのかな。

イースナはジャージ姿のくつろぎモードだが、メガ・ネの姿はない。

「イースナ。メガ・ネは来てないのか？」

「事務所で、お仕事して、くれてます……。スケジュール調整……」

俺は、サメのゆるキャラがデスクに向かう様を想像した。シュールな光景だ。

「ねえ会長、夏に海行った時、催眠ダンスみたいなの踊ってたよね？」

愛香は長机に着席するや、そんな話題を切り出した。今日、慧理那に会ったらすぐに聞こうと思っていたかのような唐突さだ。

「はい、神しん堂どう家秘伝の『ツインテールの舞』でしょうか？」

「あれって、あたしにもできないかな？」

出し抜けな質問に、慧理那は申し訳なさそうに応こたえる。

「お教えしたいのは山々なのですが……」

「神堂家の技は門外不出だ。お嬢様の友達のお前でも教えられないぞ、津つ辺べ」

言いづらそうな慧え理り那なに代わり、桜さくら川がわ先生が釘くぎを刺す。

「じゃあしょうがないね。あたしもおじいちゃんから一子相伝の技とか受け継いでるから、そういうことの大切さはわかるし」

愛あい香かのじいさんは幼い愛香が強くなりすぎるのを危き惧ぐして何も教えまいとしていたのに、勝手に技を吸収してったんだが……。

「そうだ、トゥアール。催眠術ができるようになる機械作ってくれない？　悪用しないから」
　悪用しないと念を押して悪用しなかった例ためしがこれまであったのかは疑問だが……愛香の催促が聞こえていないのか、トゥアールは頬ほお杖づえをついたまま返事をしなかった。
「ねえ、トゥアールってば」
「へえ？」
　愛香に肩を揺さぶられ、ようやく気づいたようだ。今日も授業中ずっと眠そうにしてたんだよな、トゥアール。
「催眠術ができる機械よ。昨日、発明品のアイディア募集してたじゃない」
「催眠術……？　そんなの愛香さんに体得されたら私の貞操が危険です、却下します」
「だから悪用しないって言ってるでしょ、使うのはあたしじゃないんだから！　……そーじが、催眠に興味あるみたいだから……」
　俺はようやく愛香の要望の出元に合が点てんがいった。昨夜ゆうべ、催眠のツインテールがどうとかってエロゲーを持ってるとこを見て、俺が催眠術に興味あると思ってたのか。
「トゥアール……めっちゃぼーっとして、どうしたのよ……熱でもあるの？」
　さすがに愛香は心配になってきたようだが、イースナはトゥアールが心ここにあらずな理由に見当がついているようだった。
「トゥアールさん、きっと……昨日のエレメリアンに、怒ってる。ツインテイルズの、武器に似せた粗悪品、使われたら……本家の質も、疑われちゃうし」
「え……ええ、そ、そうです。しかも、レッドたんの剣に似せた武器をあんな変態怪人が使うなんて……許せませんよ、全く」

　虚無の思考時間シークタイム＝ゼロの使い手であるトゥアールが、しどろもどろになる時は一つだけ。
　嘘うそをついている時だ。
　愛香が過去に飛ばされたことがあったけど……あの時もトゥアールは内心では愛香を心配しながらも、こんなふうに無理に笑顔を作って頑張っていたんだよな。
「そう！　そうですよイースナ！　あなた、そういうエロゲ技の専門家じゃないですか！」
　トゥアールは武器の話題を早々に切り上げ、イースナへと返す。
　催眠術はエロゲ技なんて分類をしていいのだろうか……。
「そ、総そう二じさん、催眠術……興味あるの……？　精神系の技なら、私、得意……」
　俺は「別に催眠には興味ない」──と返しかけて、思いとどまった。
　そうか、イースナなら少しだけ精神世界に干渉できるんだよな。
　俺自身が夢通信をできるようになれば、ロエルたちの負担が減るはずだ。
　ソーラにも、もっと気軽に会えるようになるかもな。
　しかし、そう言われてふと思ったのだが、イースナ自身は誰だれから精神干渉という難しい技術を学んだのだろう。やはり、エレメリアンの誰かだろうか。
「そうだな。そのうち教えてもらってもいいかな？」
　俺がとりあえずそう伝えると、イースナは嬉うれしそうに頷うなずいた。
「あっ……そーじ、あたしが練習台になってあげよっか？　何かあたし、すごく催眠術かかりやすそうな気がするし……」
　愛あい香かがもじもじしながら俺を見てきた。
「すっかり眠気も吹き飛びましたよ、淫いん乱らん蛮族の野望が垣間か

いま見みえて！」
　怪鳥のポーズで椅い子すから飛び上がり、愛香に詰め寄るトゥアール。白衣のポケットからメカニカルなメトロノームのような装置を取り出し、愛香の前で揺らし始める。
「いいでしょう、望み通りアンチアイカシステム一五号・アイカソウサスールの力を見せてあげます！　さあこの機械を見なさい、あなたは深い催眠に落ちていきます……そして常識が改変されてエロマンガの世界の住人となるのです」
「あんたがあたしにするんじゃなくて！　そーじがあたしに催眠をかけるって名目の機械が必要なんであって、効果はあろうがなかろうがどうでもいいのよ！」
「この人ほんっと自作自演大好きのあああああああああああああ!!」
　無情にもＡＡＳを砕いたパンチでそのままフライハイし、スチール棚をひしゃげさせるトゥアール。しかし、そうして自分自身が吹き飛んだおかげで眠気も一緒に吹き飛んだのか、目が冴さえたとばかりに「んー」と伸びをしてこちらへ戻ってきた。
　なんて体育会系な眠気覚ましなんだ、科学者なのに……。

「ところでもうすぐ、観み束つか君の誕生日ですわね！」
　壁に提げられたカレンダーを見て、慧え理り那なが嬉しそうに切り出した。
　そのカレンダーは一月だが、よく見ると下段に小さく描かれている次月分の二日にしっかりと丸がつけられていた。誰がつけたのかはわからないが、この分ではめくった二月にある二日は、言わずもがなだろう。
「まだ二週間近くも先の話だろ……⁉」
「二週間しか、よ！」

苦笑する俺の眼前に、Ｖサインで「二」を突きつける愛香。
自分の誕生日を待望されるのも気恥ずかしいもんだが、愛香と慧理那の誕生日にも、ツインテール部のメンバーで大々的に誕生会をやったんだ。
二人からすれば今度は俺を祝う番、ってとこだろう。
「おい観み束つか、誕生日に何か欲しいものはないか？　気にせず何でも言え、お前には世話になっているからな」
誕生日のことを言い出したのが慧え理り那ななこともあってか、桜さくら川がわ先生はそう聞いてきた。
「えっ……悪いですよ、そんな。祝ってもらえるだけで十分ですから」
「こら、子供が大人を気遣うんじゃない。それに私は趣味もないし……独身、だし……ひたすら貯金が増えるだけで、それなりにお金は余っているんだ。ハハハ」
いや、そんな哀しい瞳ひとみで虚空を見つめられて、気遣うなという方が無理なんですが……。
「最後にいい値段の買い物したのはいつだったかな。婚こん姻いん届とどけをたくさん印刷できるように、業務用のコピー機を買ったぐらいか。すごいんだぞ、ネットに繋つながるから自治体のＨＰからダウンロードした婚姻届をそのまま印刷できるんだぞ……」
「……尊みことさん……うう……」
桜川先生をからかおうとしてか、勢いよく身を乗り出したトゥアールだったが……固まったように動きを止め、やがて口くち許もとに手を寄せて嗚咽おえつを漏もらし始めた。
「あの、尊さん……よかったらその業務用コピー機、私がパワーアップしてあげましょうか？　使い終わったインクトナーをプラズマ圧縮して、毎分五〇〇〇発の破壊光弾を発射できる機能とかつけますよ⁉」
「よくわからんが、随分リサイクル効率がいいんだな」

　感心する桜川先生。期せずして、トゥアールの発明アイディアの一助となったようだ。
「わたくしも聞きたいですわ、観束君！　何でも好きなものを仰おつしやってくださいね！」
「じゃあ……そうだなあ。雑誌で紹介されてるのを見たんだけど、ツインテール抱き枕っていうのがあってさ……そういう感じのでどうかな」
　他のみんなの誕生日でプレゼントを贈り合っているわけだし、俺の時だけ何もいらないでは困るのもわかる。なので俺は、ツインテールグッズで例を挙げた。
「待ってよ、そーじはわざわざ枕なんて抱かなくったってツイ………………何でもない」
「なんでそこでヘタレますかねえ、愛あい香かさんは」
　愛香が何か不満げだな。自分の素晴らしきツインテールへの自負から、無機物をツインテールに見ることにまだ抵抗があるのかもしれないな。
「枕だってツインテールはツインテールだろ？　もちろん本物のツインテールが一番だけどさ、日常の色んなものがツインテールって、素敵なことじゃないか」
「ソウネ」
　何な故ぜか白目になっているが、愛香もわかってくれたようだ。
「まあ、ツインテールに関するものなら何でもいいよ」
　こう言っておけば、みんなも悩まなくて済むだろうし、そんなにお金を使わせることもないだろう。全員、かえって困ったという顔をしているように見えるが……。
「そういえば、トゥアールの誕生日っていつなんだ？」
　いい機会なので、俺はトゥアールに尋ねてみた。
「私の世界では、誕生日という習慣は随分と昔に廃止されているんで

す。みんな平等に、一年の始まりに一歳カウントを増やす。子供は自分が何月何日に生まれたのか知らされずに一生を終えるんです」
「ほう……そうなのか」
　桜さくら川がわ先生も興味深そうに頷うなずいている。
　習慣なんてのは、この地球の各国でも様々差異があるんだ。
　文化や風俗が似ているとは言っても、異世界と俺たちの世界を比べると、こうした決定的な違いを知ることもある。
「もっとも、それとは別に自分だけの記念日を勝手に決めて祝う人はたくさんいましたけどね。自分だけの特別な日は、やっぱり嬉うれしいものですから」
「じゃあトゥアールも、『この世界』での誕生日を決めたらどうかな？　故郷の決まりに則のつとったら、俺たちが誰だれも気づかないままトゥアールは元日に一六歳になってたことになるだろ？」
　今年の元日はすげー色々あったから、トゥアールも気が休まらなかっただろうしな。
　俺がそう提案すると、トゥアールは少し考え込み、
「そうですね……ではこの世界でいう年度末、三月三十一日に年齢を一つ足して、一六歳になろうと思いますが、どうですか？」
「ふーん。いいんじゃない？」
　愛あい香かも賛同する。その誕生日だと、俺と愛香とトゥアールの同い年三人の中で、愛香が一番お姉さんになるからかな。
「あなたも三月三十一日にしたらどうですか、イースナ。次は一三歳でしょう？」
　トゥアールが提案する。そうだよ、トゥアールと同郷のイースナも誕生日を決めないと。
　ぶっきらぼうな態度だけど、イースナをいつも気にかけているんだよな、トゥアールは。

「わ、私、二月二日が誕生日で、いいです……」
　だが、イースナはすでに自分で決めていたようだった。
「俺と同じ日に？　どうしてだ？」
　イースナは長机に乗って寝転び、ゴロゴロと転がると、向かいに座る俺の膝ひざの上にぽふっと収まってきた。
「総そう二じさんと、同じ誕生日がいいの。……これからもずっと、一緒に一つずつ、年をとっていこうね……総二さん」
「っ……イースナのくせに破壊力のある台詞せりふを……！　なんかいいですねえその台詞むぎゃ━━━っ!!」
　地じ団だん駄だを踏むトゥアール、そして愛あい香か、慧え理り那なの目が見開かれ、俺たちへと集中する。
　イースナはそれに気づいていないでか、ジェットコースターの安全バーのように、俺の両腕を自分の腰に巻かせてきた。そして、トゥアールに向かってほくそ笑む。
「か、仮の誕生日を、この世界の年度末にしようって、考え方がもう、若くない……。一日でも長く、年をとりたくないっていう……無意識の、抵抗……」
「知ったようなことを言うんじゃありません！　私は総そう二じ様や愛香さんと同い年なんですからね！　っていうか総二様と距離が近いんですよストーカーのくせに!!」
　トゥアールは俺の膝ひざに座っていたイースナを引き剥はがし、俺へとウインクを送ってきた。
「というわけで、やっぱり私も総二様と同じ誕生日にしますね！」
　俺と同じ誕生日の人間が量産されていく……。
「お、そろそろいい時間だな。それじゃあみんな、今日はこの辺で帰ろうか？」
　俺は壁の時計を見てそう促うながしたのだが、愛香が遠えん慮りよが

ちに俺を見てきた。
「……そーじ。悪いけど今日はこの後、一人で帰ってもらっていい？　あたしたちこれから、ちょっと……」
「女子会ですわ！」
　誇らしげに胸を張る慧理那。女子会……ってことは、何かお喋しやべりでもするのか。
　愛香たちもトゥアールの様子を気にしているようだし、そのことかもしれないな。
　俺も最近、トゥアールが何か隠しているように感じるのは事実だ。
　それが男の俺の前では話しにくいことだったら、愛香たちに任せるのが一番だろう。
「わかった。それじゃあ先に帰るよ」
「うむ。じゃあな観み束つか、また明日」
　手を振って俺を見送ろうとする桜さくら川がわ先生。
「尊みことさんもですよ厚かましい！　女子会です女子会！　十代オンリー!!」
「…………」
　何か言いたそうなイースナが気になるが、慧理那も桜川先生を諭さとす側に回った。
「ごめんなさい尊、今日は学生だけでする会ですの……」
　桜川先生も、さすがに慧理那にまでそう言われては食い下がろうとしなかった。
「……ではお嬢様、女子会が終わりましたらご連絡ください。私と一緒に帰ろう、観束……。お前を家に送ってから、またここに戻るとする……」
　えらい寂しそうだ。悪いからいいです、とは言えない雰囲気だった。
　俺と桜川先生は二人でツインテール部部室を出て、廊下を歩く。

　玄関の下駄箱に差しかかると、十名ほどの神しん堂どう家のメイドさんたちが合流してきた。
「なんでメイド長が総二きゅん……じゃなかった、観束君と二人っきりで帰ろうとしてるんですか？」
　慧え理り那なが一緒ではないからか、不思議そうに聞くボブカットのメイドさん。
「お嬢様が女子会がしたいと仰おつしやってな……私は交ぜてもらえなかった……」
「女子会ですか～！　じゃあメイド長はしょうがないですよ。私たちも一緒に帰ります」
「何な故ぜすぐ納得するんだ、私だって女子だぞ。そもそも国語辞典で〝女子〟と引くと──」
　桜さくら川がわ先生はメイドさんたちと軽く口論を繰り広げながら、俺と校舎を後にした。
　校門を出るや、メイドさんの一人が小走りで俺の前に回り込み、まじまじと見つめてきた。
「うーん、やっぱり観み束つか君、素朴だけど可か愛わいい顔立ちしてるよね……写真撮っていい？」
「え、あ、はい……」
　昨日カエルの怪人に盗撮されたばかりなので写真に良い印象はないのだが、だからといって断るわけにもいかない。大人の女性のリップサービスを受け取っておく。
「じゃ、いくよー！」
　メイドさんは俺に肩をくっつけ、スマホで自分と一緒に撮影した。
思ってたのと違う。
　しかし、メイドさんたちのスキンシップはそれだけでは終わらなかった。



「あぁ……この手がいずれお嬢様に……」
「この口で……」
「この腰を……！」
　慧理那の目がないせいか、メイドさんたちがからかうようにして俺に密着してくる。
　親しん戚せきの人が、大きくなったねー、と子供をペタペタ触るようなものか？
　つまり俺は今、大勢のメイドさんに囲まれて通学路を歩いているわけだが──
「なんだあれ……」
「予行演習か……将来に備えてるのか」
「畜生、観み束つかの奴やつ……理事長公認だからって……!!」
　心なしか、下校中の生徒たちの視線が俺へと一斉射撃されているように感じる。
　目線で桜さくら川がわ先生に助けを求めるが、桜川先生は感傷に浸ひたるように空を見上げていた。
「お嬢様が、友達と女子会か……。人は変わっていくものなんだなぁ……」
　桜川先生の方は、子供の巣立ちを見守る親の顔……だろうか。
「たった一年ですごい変わり様だよ。武術の達人が友達にできたし、お嬢様ご自身も強くなられた。私もいよいよ、護衛の仕事がお役御免になるのかな……」
「えー、でもメイド長もめっちゃ変わりましたよ！　ねー、観束君？」
　俺の頬ほおをつつきながら、メイドさんが聞いてくる。
「そうかもな。学生の頃ころは、授業が終わったら神しん堂どうの屋敷に直帰だったから……こうして男と並んで帰るなんて、一度もなかったからな……」

　桜川先生は、学生時代からずっと慧え理り那なのメイドとして働いてきたという。
　青春を捧げたなんて烏お滸こがましい意識はないと言っていたが、それでも自分の人生の大半を占めていた人の変わりゆく様を見て、センチメンタルになっているのかもしれない。
　人は……変わる。
　愛あい香かも、慧理那も、イースナも。悩みを聞いて、一緒に乗り越えた。
　トゥアールだけが……俺に弱さを見せてくれないんだよな……。
　……って、何勝手なこと考えてんだ俺は……。
　トゥアールの悩みは愛香たちに任せよう、って思った矢先にこれかよ。
　気がつくと、メイドさんたちが涙ぐみながら俺の背中を押してきていた。
　桜川先生に、俺の身体からだを密着させるように。
「うっ……うっ……メイド長ォ……アラサーでようやく下校イベントだなんて……」
「こんなメイド長だけど、お願い！　もらってあげて！　後腐れは考えなくていいから!!」
「どこか休憩できる場所に寄ってこ？　っていうか泊まってこ？　メイド長だけだと重いなら、私たちも手伝うから！　ね、総そう二じきゅん!!」
　メイドさんたちが迫真の表情で訴えてくる。さっき言いかけて観束君って言い直した呼び方が、もうどうでもよくなってるみたいなんだけど!?
「すいません、そんなくっつかれると困……他の生徒が見てますから!!」

両腕をそれぞれ抱き締めて拘束してくるメイドさんに、俺は困り果てる。
　この人たちは、何を手伝うというんだ……!?

　　　◇

　総そう二じが帰った後、トゥアールがリモコンを操作し、部室の長机が縮んだ。ちょうど四人座れるサイズだ。
　これもリニューアル部室の新機能。女子会のひそひそ話のために追加したのだろう。
　愛あい香かとトゥアール、慧え理り那なとイースナがそれぞれ隣同士に座る。
「ああ見えて甘え上じよう手ずな尊みことさんがスタンドプレーに走らないかが不安ですが……それはさておき皆さん、お正月明けの宣言は覚えていますね？」
　トゥアールはずいっと身を乗り出して言った。
　愛香、慧理那、イースナが、力強く頷うなずく。
　総二の誕生日を期限とし、少女たちは競い合いを始めたのだ。
　愛香は総二に告白する。トゥアールと慧理那とイースナは、総二とキスする、と。
「今日は、中間報告会……ちゅー、間、報告会……ふ、ふふふ……」
　期せずして駄だ洒じや落れになっていると気づいたからか、イースナが含み笑いを浮かべる。
「あたしは一昨日おととい、もうちょっとで告白コクれそうだったわよ……トゥアールが邪魔しなければ」
「いやあの流れで告白って、投げやりすぎて協定違反ですよ!?　『きちんと』っていうシンプルかつ絶対のルールを設けたのを忘れたんです

かっ!?」
　胸の谷間からイエローカードを取り出すトゥアール。愛香はスポーツマンシップにあるまじき蛮行で審判からカードを取り上げ、破り捨てた。
「だいたいそれを言うなら、私だって一昨日は総二様のベッドまで辿たどり着いたんですよ!?　もう少しでキスできたのを邪魔したのは、愛香さんじゃないですか!!」
「あんたのはキスじゃなくて夜よ這ばいっていうのよ！　出会った日からず――――――――――――っと身体からだにわからせてるのに、まだ学習しないの!?」
　こちらはカードを出す前に手足が出るタイプの危険な審判だった。
「会長はどう？　そーじとキス……できそうになったりしてない、よね……？」
　愛香は願望交じりに聞き質ただした。
「メイドたちに『こういう合図を送れば殿方はキスをしてくれる』とアドバイスを授かって、実践してみたのですが……観み束つか君は気づいてくれませんでした。やはり、言葉にしなければ駄目なのですわね……」
　しゅんとする慧理那。
　ちなみにそのアドバイスとは、『カレの見ている前でおもむろにリップを塗り、唇くちびるをちゅっ、と可か愛わいく突き出す』というガーリッシュな仕草だ。一事が万事、こんなアドバイスばかりなので、鈍い総二へは何の合図にもなろうはずがなかった。
「あなたはどうなんですイースナ、期日ありすぎとか余裕ぶっこいてましたけど」
「わ、私、甘え方、うまくなってきた、でしょ……？　この分なら、総そう二じさんの誕生日までには……」

「あなた最近ナチュラルに総二様の膝ひざの上に乗ったりしますからね……!!」
　歯は噛がみして悔くやしがるトゥアール。
　とはいえ、現状ではイースナも進展はしていない。中間報告会は、詮ない進しん捗ちよくを言い合うだけに終わってしまった。
「それでさあ。トゥアール」
　愛あい香かは、報告が一段落したのを見計らって切り出した。
「……あんた、また落ち込んでるでしょ？　何か悩んでるなら、抱かかえ込まないで話してよ」
　愛香にとっては、報告会よりこちらの方が本命だったのかもしれない。
「トゥアールさん、体調が優れないのでは……。少し、寝不足のようにお見受けしますが……」
「……メデューサギルディとの、戦いで……吹っ切れた、ように、見えたのに……」
　慧え理り那な、イースナの視線も向けられ、トゥアールは肩を竦すくめた。
「確かに私は最近、ちょっとうじうじし過ぎかもしれませんね。総二様にウザいって思われたらヤですし、ええ、しゃんとします！」
　空元気で拳こぶしを握るトゥアールに、愛香は強い語調で迫る。
「そーじはウザがるんじゃなくて心配してんのよ、あんたのこと！　でもあたしはそろそろそう思っちゃうかもしれないから……ちゃんと教えて!!」
　親愛故ゆえの厳しい言葉を噛みしめるように、トゥアールは目を伏せた。
「私だって人間なんですから、色々ままならない時はありますよ」
　愛香は、バツが悪そうに目を逸そらしたトゥアールを、なおも見つめ

続けた。

　自分たちの悩みは、一時的なものだ。

　トゥアールは……トゥアールだけは、いつも何かに悩んで、悲しんで、頑張ってきて……それがここにきて、限界を迎えているのではないか。

　愛香は、そう懸念しているのだ。

「でも、まあ……ホントのホントにどうしようもなくなったら……猫の次に、愛香さんの手でも借ります」

「約束よ。猫まで行く前に、無理矢理手を貸してやるんだから」

　愛香が不意に向かいを見ると、慧理那はにこにこ、イースナはニヤニヤしながら自分たちを見つめていた。

「え、慧理那……。やっぱり、あの二人の間には、私たちは、入れないね……」

「ええ、津つ辺べさんがいれば、トゥアールさんもきっと大丈夫ですわね！」

「そんな二人に、私が、してあげられる、のは……お布ふ団とん、敷いてあげる、ことぐらい……」

　何を想像したのか、自分の身体からだを掻かき抱いだくトゥアール。

「それ言ったら慧え理り那なさんとイースナだって十分お布ふ団とん寸前です！　私たちがうかうかしてたら、結いわ翼ばね唯ゆ乃のあたりに総そう二じ様かっ攫さらわれちゃいますよ‼」

　トゥアールの何気ない発言で、イースナは寂しそうに虚空を見つめた。

「せ、せっかく、唯乃とも……こういうわちゃわちゃ女子会、できると思ったのに……。早く、会いたいな……」

　黄昏たそがれるイースナの視線の先で、長机の上にナビゲートＡＩ「とぅあるん」が起動した。

「え、今誰だれかおっぱいとか言った？」
　誤爆を疑う愛あい香か。だがトゥアールは自身を模したＡＩを見るや、表情を引き締めた。
「出現アラートが鳴る時は、とぅあるんが起動するようにしてみたんですが……」
「──てことは……エレメリアン……⁉」
　机に手をつき、立ち上がる愛香。
　どうやら女子会は店じまいし、男子そうじと合流しなければならないようだ。

◇

　家に着く寸前にメイドさんたちにどこかに連れて行かれそうになっていた俺だが、そこへトゥアールから慌あわただしい連絡が入った。エレメリアン出現だ。
　メイドさんたちはうまく桜さくら川がわ先生に誤ご魔ま化かしてもらい、俺は一人帰宅して地下基地へ。
　部室から転送してきた愛香たち、そしてイースナの所属事務所からやって来たメガ・ネと合流。急ぎ変身し、基地のゲートから出撃する。
　俺とイエローは髪紐属性リボンを発動したブルーに掴つかまり、ブラックは戦闘機形態メガネウインガーのメガ・ネに騎乗し、現場の大型ショッピングモールに急行。野外駐車場に着地した。
「モッケッケー」
「モケナク三〇〇〇Ｐ」
　エントランス前で何な故ぜか提携クレジットカードの加入案内をしている戦闘員アルテイロイドを倒しながら、建物内に突入する。今なら加入特典で三〇〇〇Ｐもらえるらしいが、だいたい今だけじゃないから

な。
　しかし夕方のショッピングモールは、人の数が半端じゃないな。
『エレメリアンは２Ｆのフードコートのあたりにいます、避難誘導しながら現場に向かってください!!』
「了解ですわ！　属性玉エレメーラオーブ──腋属性アームピット！」
　イエローが属性玉変換機構エレメリーションで発動した光のトンネルが、無軌道に走り回る客たちをスムーズに出口へと誘導する。途中、親御さんに手を引かれながら逃げる子供が手を振ってきたので、俺も笑顔で振り返した。
『こちらに詳細な映像が来ましたが……ちょっとエレメリアンの様子がおかしいですね。現場で確認してください』
　トゥアールの困惑交じりの通信を聞きながら、俺たちは階段を使わず吹き抜けのエントランスから一気に２Ｆに飛び上がった。
　目的地のフードコートも、エレメリアンもすぐに目視できたが──
「あ、ゴリラじゃ！」
「ゴリラやねえ」
　エレメリアンを見つけるや、嬉うれしそうに指差す一二歳の女の子とそのおかん。
　ブラックとメガ・ネのファーストインプレッションどおり、エレメリアンはゴリラそのものの顔をしていた。脚が短く、逆に上半身が異様にマッシブで、両腕も丸太のように太い。
『出番ですよ、ブルー！』
「頼みましたわ、ブルー！」
「後は任せるのじゃ、ブルー!!」
　基地のトゥアール、そしてイエロー、ブラックが立て続けにブルーにエールを送る。
「なんで満場一致であたしに戦わせようとしてんのよおおおおおおおお

おおおお!!」
　ゴリラといえばブルー、という不名誉な役目を任せられ、当人は憤ふん慨がいしている。
「待て、確かに様子がおかしい……あいつ、ツインテールにしてるぞ!?」
　大きく振り上げた両腕に隠れていて気づくのが遅れたが、ゴリラのような風ふう貌ぼうのエレメリアンの頭部からは、青いツインテールがたなびいていた。
　トゥアールが様子がおかしいと言っていたのは、このことか。
「ロロリーんとこの異世界といい、ゴリラがツインテールにするの流行はやってんの!?」
　自分と同じ青いツインテールなのが気になるのだろう、ブルーの語調に怒気が交じる。
　流行るのなら是非流行って欲しいとは思うが……あのエレメリアンは違うようだ。
「……あれはウィッグだ。しかも……愛が感じられないぜ」
　俺はウィッグでツインテールにするのは全然アリだと思うし、それでツインテールへの理解が深まってくれればいいことだと思っている。
　だが、あのゴリラっぽいエレメリアンからはどうも仕方なくツインテールにしているという雰囲気を感じる。
　体毛を自らツインテールに結んでいた異世界のゴリラたちとは、雲泥の差だ。
　属性力エレメーラを狙ねらっているというより、近くにいる人間を片っ端ぱしから威い嚇かくしているだけに見えるし、行動がいちいち怪しいぞ。
「がおー！　テイルブルーだぞー！　がおー!!」
『なるほど、あのエレメリアンはテイルブルーのふりをしているようで

すね！』
　トゥアールが鋭い語調で言い切る。子供とのごっこ遊びで悪役を引き受けたお父さんでさえもっとクオリティ高いだろうという、陳腐極まりない演技だが……。
『まずいですね……見た目がテイルブルーそっくりすぎて人々が混乱しています』
「目が濁ってるみたいだから、帰ったらあんたの目玉取り外して洗ってあげるわね」
　離れた場所で本家が世にも恐ろしい恫どう喝かつをしていることには気づかず、偽テイルブルーのエレメリアンは威い嚇かくを繰り返す。
「テイルブルーは悪い奴やつだぞー！　おいそこの貴様、スマホを貸せ!!」
　そして離れて撮影をしている一般人の男性に近づき、スマホを取り上げてしまった。
　撮影されて怒ったのか？　早く助けないと──と思ったが、どうも違うようだ。
　エレメリアンは、取り上げたスマホをそのごつい手で操作していく。
「ふふふ、やはりお前も今流行のソシャゲ『いつでもテイルレッドたん』はインストールしているな！　俺がガチャを引いてくれるわ、ありがたく思え!!」
「やめろー！　その石はもうすぐ実装されると噂のバレンタインテイルレッドたんのために貯めてるんだーっ!!」
　バレンタインテイルレッドって何だよ……。
「ははははは、こつこつ石を貯めるなどつまらぬぞ、もっと刹せつ那な的に生きぬか！　どうれ、運営が酒に酔って実装したと言われるテイルブルーピックアップガチャの方へ全ての石を突っ込んでくれるわ!!」
「誰だれかー！　助けてくれ────────────っ!!」

「ぐわーははははははははは、俺はゴリラギルディ……じゃなかった、テイルブルーだ！　このテイルブルーの勇姿をどんどん語り継ぐがいい!!」
　うっかり名乗りやがった、あいつ……。
『うむうむ、やっぱゴリラですね、ゴリラじゃなかったらどうしようと思いましたよ！』
　私はゴリラと因縁深い。ゴリラには一家言ある。
　そんな自負が、トゥアールの通信から伝わってくる。
「……あいつ、あたしの物真ま似ねしてるってわけ……へえ、あれで……」
　ツインテールを逆立たせ、死刑執行人が指を鳴らし始める。
　だが、それより先に攻撃を仕掛けた者がいた。
　風切り音を唸うならせて、雷の弾丸が飛んでいく。
「あ痛いたっ！　む、ツインテイルズ！」
　イエローの撃ったヴォルティックブラスターが後頭部に直撃し、ゴリラギルディは悲鳴を上げる。その拍子に取り落としたスマホをキャッチする男性。
「ありがとうテイルイエロー！　君のガチャは引かないけど!!」
　男性はお礼になっていないお礼を言って逃げていく。そんな声援も届かないほど、イエローは怒り顔でゴリラギルディを睨にらみ付けていた。
　キッと唇くちびるを引き結ぶと、ヴォルティックブラスターを連射し始めた。
「痛いたたっ！　無言で射撃はやめてくれ！　せめて何か喋しやべってくれ!!」
　頭に胸にと銃撃を受け、ゴリラギルディは待ったのポーズをした。
　明らかにイエローは威力を抑えて撃っている。警告……いや、抗議の

つもりだろうか。
「正座おすわり」
　イエローは、強い口調とともにゴリラギルディの目の前の床を指差した。
「む？」
　ゴリラギルディは頭を擦さすりながら、不思議そうに床とイエローを交互に見比べる。
「正座おすわり、ですわ」
　脅すように銃口を向けられ、ゴリラギルディは言われるがままリノリウムの床に正座した。
「くっ……テイルイエローといえば、我われらエレメリアンがドン引きするほど磨き抜かれたドＭ……そのドＭにおすわりを命じられるとは、屈辱の極み!!」
　確かに、イエローらしくない行動だ。
（ドＭ癖ぐせが発動しない限りは）独自の美学を持って戦い、（ドＭ癖が発動しない限りは）礼節を重んじるイエローが、何な故ぜこんな荒っぽいことを……？
「あなた、ツインテイルズの真ま似ねをしていますのね？　つまり〝偽ツインテイルズ〟ですのね？　世間を混乱に陥おとしいれようと企たくらんだのですわね？」
「そうだ！　見ればわかるだろう!!」
　正座おすわりしたまま反論するゴリラギルディ。わからないから確認しているんだと思うが……。
「……再現度クオリテイが低いですわ！」
　銃を下ろすと、代わりに指を突きつけるイエロー。
　ゴリラギルディは無言で、自分のツインテールのウィッグを手の平で掬すくい上げた。

　再現度クオリテイを指摘され、これ？　と言っているように見える。
「それ！　を、含めて！　全然！　偽ツインテイルズに見えないですわ！」
　イエローが珍しくめっちゃお怒りなので、俺とブルーとブラック、メガ・ネは成り行きをおとなしく見守ることにした。
「偽者の出現といえば！　ヒーローの宿命！　そして、花形イベントの一つですわ！　守ってきた人々に疑いの目を向けられ、やがて石を投げられ！　それでも正義を信じて戦い抜く！　ついにはヒーローが逆転し、世間の信用を取り戻す……そんな涙無くして語れないシナリオが王道なのですわ!!」
「ぬううっ……あれこれ筋書きの要望を押しつけおって、しち面倒くさい！　まるでこじらせた特撮トクオタのようだ!!」
　たまにプロファイリングが的確だよな、アルティメギルの奴やつらって……。
「押しつけではありません！　それがヒーローになるということなのですわ!!」
「では貴様は、俺が寸分違たがわずテイルブルーと同じ行動を取れば満足なのか!?」
　ゴリラギルディは、義ぎ憤ふんに燃えるようにその大きな拳こぶしを握り締めた。
「人間を殴なぐって空を舞わせ、人間が絶命するまで踏みつけ、命乞いする人間を一いつ顧こだにせず虐殺すれば満足なのか！　それが……貴様の望む花形はなかあっ!!」
　血を吐くような訴えに、ブルー以外の全員が黙り込んだ。
　あらためて本家の行動を聞くと……ごめんなさいという気持ちになる。
「俺は……同僚に言われ続けてきたのだ……『お前、雰囲気がテイルブ

ルーに似てるな』と！　アルティメギルにおいて『テイルブルーっぽい』と評されるのがどれだけ不名誉なことか、貴様たちにわかるか!!」
　あまりにも悲痛な表情でそう訴えるゴリラギルディ。
「そこにきて今回は、『ツインテイルズ真ま似ねっこ大作戦』に際して『絶対テイルブルーでいける』と嬉うれしくない太たい鼓こ判ばんをもらってしまった！　もう観念するしかなかろう！　テイルブルーっぽい？　あー上等だ！　俺にこそ、偽ツインテイルズの役は相応ふさわしい!!」
　言い分はわかった。辛つらい思いをしているのも理解した。
　しかし、だからといってツインテールをぞんざいに扱うのは看過できない。
　俺はゴリラギルディに詰め寄った。
「ツインテイルズの名を騙かたるに相応しいと思うなら、せめてツインテールにはベストを尽くせ！　疎おろそかにするな！　お前、ウィッグが取れかけてるじゃねえか!!」
「ウィッグが取れかけているのはそこのドＭが言いがかりをつけて撃っ──」
「いいから本物ブルーをよく見てみろ、愛に溢あふれた素晴らしいツインテールだろうが!!」
　ゴリラギルディは俺の熱意に絆ほだされてブルーのツインテールを凝視すると、
「…………ごめんなさい」
　素直に謝ってきた。わかってくれればいいんだ。
「えへへ……」
　さっきまであれほど怒り心頭だったブルーが、嬉しそうにくねくねしていた。
『いけません、ブルーがへにゃって使い物にならなくなりました！

レッド、ゴリラが敵だというのに対ゴリラ兵器ゴリラを甘やかしてどうするのです！　あのままゴリラを怒らせてゴリラと戦わせれば手っ取り早かったんですよ!!』
　学名ゴリラゴリラゴリラみたいに、ゴリラという単語が通信で乱舞している。
「ようし……頃ころ合いか……テイルブルー！　俺と一対一で勝負しろーっ!!」
　予想外の宣言とともに手の平で胸を叩たたき、ドラミングを響かせるゴリラギルディ。
　ブルーがくねくねしているから、今なら倒せると踏んだのか!?
「真似っこするにあたって、テイルブルーの行動は研究済みだ！　要するに貴様は、天あま邪の鬼じやくなのだ！　誰だれかが一騎討ちを望めば横から邪魔したくなる性質タチよ！　つまり逆に貴様との一騎討ちを望めば、興味を失うというわけだ!!」
　浅あっさい研究結果を口にするゴリラギルディに、俺たちは結末を予期する。
「さあテイルブルー、一対一だぞ！　他のツインテイルズは手出しをするな！　いいな、絶対に手出しをするなよ!?」
「オッケー、いい度胸してんじゃん！　戦やろ戦やろ!!」
「えっ」
　ブルーは先ほどまでのふにゃふにゃぶりはどこへやら、うっきうきでその挑戦を受じゆ諾だくした。ゴリラギルディは間の抜けた声を出す。
「あんたゴリラだし、武器使わないで殴なぐり合う？　それでもいいよ？」
　手の平に拳こぶしを打ちつけ、快音を響かせる女子高生。
　ゴリラギルディ、ブルーは天あま邪の鬼じやくじゃないんだよ。その逆で、戦いに関してはめちゃくちゃストレートなんだよ……。

「え、え……」
　ゴリラギルディは「何で助けてくれないの？」とばかりに、捨て犬……いや捨てゴリラのように弱々しい瞳ひとみで俺に無言の訴えをしてくる。俺は目を伏せ、手遅れです、と首を振った。
「でええい、こうなったらーっ！」
　ゴリラギルディはやけくそ気味に吠ほえ、フロッグギルディと同じ柄つか状のものを取り出した。
　それは素手で戦やろう、という提案へのせめてもの反発か、あるいは起死回生の切り札か。
　柄から持ち手が物干し竿のように長々と伸長し、先端部から噴出した光の刃やいばが凝縮して、三みつ叉またの槍やりの穂先となった。
『今度は……ウェイブランスの模倣品コピー……』
　さっきまでゴリラの敵を見てはしゃいでいたトゥアールの声が、通信越しにみるみるトーンダウンしていくのがわかる。
「ぬおおおおおおおおおおおおお！」
　ゴリラギルディが槍を振り回したので、ブルーは慌あわててフォースリヴォンを叩たたいた。手にしたウェイブランスを咄とつ嗟さに横薙なぎし、二つの槍が激突する。
　轟ごう音おんと火花が、周囲に飛び散っていった。
「――この武器……！」
　ブルーの表情が一気に引き締まる。
　一般兵クラスのエレメリアンが自分で生成した武器が相手なら、武器もろとも一撃で砕いて勝つなんてことも少なくなかった。
　しかしゴリラギルディの持つ槍は、ウェイブランスと互角に張り合っている。
「おお、いけるぞ！　さすがはマーメイドギルディちゃん、すごい硬度だ!!」

マーメイドギルディ……やっぱりあいつの仕し業わざか！
　俺たちは援護しようと武器を構えるが、ブルーはこちらへ振り返って軽く首を振った。
　同じ槍やりを使う自分が戦うことで、敵の武装の力を見極めようというのだろう。
「でやあああああああああああっ!!」
　ゴリラギルディは槍を一撃、二撃と力任せに撃ち込み、ブルーを後退させる。
　しかし十撃目ともなれば、槍を使い戦ってきた年季がものを言う。ブルーはゴリラギルディの槍の穂先に自分のランスの三みつ叉またの穂先を噛かませ、絡め取るように弾はじき飛ばした。
　弧を描いてテナントのショーウインドウに飛んでいく敵の槍を、メガ・ネが先回りしてキャッチする。
「……あんた、属性は？」
　ブルーは温和な語調で、ゴリラギルディに問いかけた。
「粗野属性ブリツシユ……がさつな者にときめく、ワイルドな属性だ……!!」
「いじけて物真ま似ねするより、その属性を誇って普通に挑んでくればよかったんじゃない」
　残心するように背を向けるブルー。
　ゴリラギルディはすでにエグゼキュートウェイブで胴体を貫かれ、全身から放電していた。
「……返す言葉もない……。フフフ、ならばこれだけは言わせろ、がさつと乱暴は違うのだぞ？　テイルブルーよ、お前は俺の好みとは似ても似つかぬ──!!」
　否定の言葉とは裏腹に、その声こわ音ねは喜びに弾んでいた。
　ゴリラとは、見かけによらず心優しい動物だという。

　ゴリラギルディの最期もそんなゴリラと同じく、凪なぎのように穏やかな爆発だった。
「みんな。さっきあのゴリラはんが使ってた槍キャッチしたんやけど……床に置いてたのに急に爆発してもうたんや。多分、ゴリラはんが倒されたからやと思うんやけど」
　戸惑いながら説明するメガ・ネ。
「やっぱりか……」
　俺は、フロッグギルディとの戦いでもそうだったことを思い出した。
　もっとも、こいつらの武器をマーメイドギルディが造っていると判明した以上、自爆機能が仕込まれている理由も想像がつく。絶対に痕跡を残したくないらしいな、あいつは。

◇

　俺たちは今日も、基地に帰投してすぐに話し合いを始めた。
　戦闘は楽勝だったが、今後のことを考えると悠ゆう長ちようにはしていられない。
「フロッグギルディ、ゴリラギルディ……。立て続けにツインテイルズの武器を使ってきた以上、これで最後ということはありませんわよね……」
「ああ。それに、さらっと『ツインテイルズ真似っこ大作戦』とか口にしてたな。今のあいつらはツインテイルズの模倣を作戦行動にしてるってわけか」
　俺は慧え理り那なの疑念に同意し、ゴリラギルディの言葉を思い返した。
　作戦名こそ間抜けだが、どうにもキナ臭い感じがしてきたぞ。
「あの武器の強さは、本物だったわよ。……多分あれは……」

「……テイルギアと同じ技術で造られたもの、じゃろうな」
　言いあぐねている愛あい香かに代わり、イースナが不機嫌な声で結論づけた。
「けど、テイルギアの技術はトゥアールはんのやろ？　なんでエレメリアンが使えるん？」
　メガ・ネの言葉に、トゥアールがビクリと肩を震ふるわせた。気にしてるみたいだな……。
「多分、唯ゆ乃のでしょ。あいつが持ってるテイルギアはトゥアールの技術の逆輸入だって言ってたし、それをマーメイドギルディに使われたのよ」
　心当たりがあったので、俺は愛香の意見に異論を挟む。
「いや、唯乃もそれだけは死守したみたいだぞ。変身した唯乃を見た時、マーメイドギルディが『その装そう甲こうも研究すればよかった』ってはっきり言ってたからな」
　自分が幽閉した唯乃に意趣返しをされたマーメイドギルディは、テイルギアＴＹＰＥ-Ｐの底力が計算外だったことを認め、悔くやしがっていた。
　マーメイドギルディがテイルギアに興味を持つきっかけが唯乃だったというのは、間違いないだろうけどな。
「ま、いちいち『どうして』探しをしたってキリがないさ。あいつらはテイルギアを真ま似ねた。俺たちはそれをブッ倒す。それでいいじゃないか」
「……そう言っていただけると、頼もしいです」
　俺の単純な言葉が救いになってくれたのだろうか、トゥアールはやっと笑顔を見せた。
「ともあれ、あやつらはツインテイルズのものに似せた武器を象徴にして〝偽ツインテイルズ〟の活動を続けるようじゃ。しばらくは用心せね

ばならぬぞ、みんな」
　イースナがそう締めて、今日の会議は一段落した。
　アルティメギルに武器を真似されて、トゥアールは落ち込んでいるようだった。だから強引に話題を打ち切ったのだが……本当は俺も、腑ふに落ちない点があった。
　マーメイドギルディが事前にテイルギアＴＹＰＥ-Ｐについて研究できていれば、ガイアギルディを旗印にした最終決戦において、唯乃の逆襲を許すことはなかった。あの時点で知らなかったと悔しがっていたのは、演技ではないはずだ。
　では、それ以降テイルギアとの接点が一切無いはずのマーメイドギルディが、一体どうやってその技術を入手した？　そこがどうしても気がかりだ。
　ツインテールがざわめく。何か、とんでもなく恐ろしいことが始まるような気がする。
　あまりいいことではないが、俺の胸騒ぎならぬツインテール騒ぎは……だいたい当たってしまうんだ。

◇

　基地のエレメリアン居住区の最奥──専用の研究室で、マーメイドギルディはツインテイルズとの戦闘データを解析していた。
「オッケーオッケー♪　オリジナルの武器とガチでやり合ってくれるなんて……貴重なデータありがとね、ゴリラギルディ君♪」
　作業机には収まらず、床にまで試作の発明品が転がっている。その中には明らかに、テイルギアの一部を模したような見た目の手てつ甲こうやスラスターなどが散見された。
　壁のモニターに、コンソール端末にと視線を移しながら、気分よく作

業を続けるマーメイドギルディ。

「久しいな、マーメイドギルディ」

　その声で軽快に叩たたかれていたキーボードが止まり、部屋に静寂が訪れる。
「…………そう。アポロギルディちゃんが来た以上、あなたたちもやって来るって考えておくべきだったわね」
　椅い子すを回転させ、声のした背後を振り返るマーメイドギルディ。
　彼女の視線の先──研究室の中には、いつの間にか予期せぬ侵入者が立っていた。例によって、全身を覆おおい隠す白いローブをまとっている。
「暇ひまを持て余しているのだよ。何ど処こかの誰だれかのおかげでね」
　精せい悍かんな声だ。居い丈たけ高だかな語調なのに、不思議と嫌悪感を懐いだかせない。
「確かに、揃そろいも揃って嫌味を言いに来るところを見ると、相当暇みたいね。君も、アポロギルディちゃんも」
　目ま深ぶかにかぶったフードの奥で、戦士の双そう眸ぼうが紺こん碧ぺき色の光を灯ともした。
　その光は、マーメイドギルディの全身を走査するように断続的に点滅する。
「───変態値、六万……。衰えたな、マーメイドギルディ」
　白ローブの戦士は、興きよう醒ざめしたように嘆息した。
「昔の君は、寡か黙もくながらも刃やいばのようにギラついた変質者だった……。それが今では随分とおとなしく……つまらなくなったものだよ」

「ホンット嫌味。そういう君は、やらしい値踏み癖は直ってないみたいね？」
「品定めもするとも。君には、時間は十分にあった──戦力も万全にあった。それでも事ここに至るまで、首領様の至上命令である『究極のツインテールの奪取』を成し遂げることができずにいるのだからね」
「成し遂げる、って何よ。私にはそんな責任ありませんけどー？」
　マーメイドギルディは悪びれもせず、豊満な胸を押し上げるように腕を組んだ。
「なるほど……その調子ではここの残存混成軍の戦士は、誰だれ一人として君の〝本当の顔〟を知らないのだろうな」
　小さく振り返り、背後で堅く閉ざされた扉に目を向ける戦士。ここから遥はるか離れた大ホールでは、今も戦士たちが楽しく会議をしているのだろう。
　この研究室はそんな喧けん騒そうから隔離された、寂しい別世界に感じられる。
「それはさておき……なかなか愉快な作戦を見せてもらったよ」
「一枚噛かませろって顔してるわね」
「君の研究に力添えしてあげようというのだ、昔のよしみでね」
　白いローブの戦士から、地獄の底から溢あふれ出たかのような闇やみ色の闘気が立ち昇る。
「力添え、ねえ……？」
「彼女たちツインテイルズは、もっとハイクオリティな贋がん作さくを所望だ。応こたえてやるのが、神の慈悲というものだよ」
　破滅的なまでに凶悪な負のオーラを前にしながら、マーメイドギルディは張り合いを得たように余裕の微笑を浮かべた。
「あなたはその慈悲とやらで、真作を滅ぼすつもりでしょう？　擬人化属性パーソニフイの冥めい王おう──ハデスギルディ」

属性玉
－設定資料－
04

10 唇属性（リップ）

持ち主 パピヨンギルディ

攻撃の命中率を大幅に上昇させる。遠距離攻撃に限らず、斬撃などもあと僅かで命中する場合などで軌道に補正がかかる。また、その副次効果として複数の攻撃（銃撃など）を一点に集中して命中させることも可能。もっとも、ある程度の攻撃補助機能はテイルギアそのものにも備わっているため、この属性玉（エレメーラオーブ）が真価を発揮するのは属性玉の多重使用時である。

11 文学属性（ブック）

持ち主 オウルギルディ

発動者の眼前にサングラス大のスクリーンを展開し、スクリーンを通して見た相手の弱点や特性を分析する。どれだけ精密に分析できるかは、相手の属性力（エレメーラ）の強大さに反比例する。自分たちや怪人のデータをまとめるのが大好きな慧理那＝イエローにとっては絶好の能力。なおブルーもたまに使っているが、彼女の場合、戦闘本能に任せて戦う方が効率がいい。

12 三つ編み属性（トライブライド）

持ち主 ケルベロスギルディ

三種の力を一つに"編む"特性を持つため、レッド、ブルー、イエローの武装を融合させ、強力な合体武器フュージョニックバスターを完成させる。この三つ編み属性のように髪型の属性力（エレメーラ）はテイルギアが拒否反応を示すため、本来であれば扱いが非常に難しい。が、逆にレッドは髪型の属性だけは誰よりも使いこなせるため、三つ編み属性はテイルレッド専用となっている。

第三章　新たなる太陽。

　アルティメギルの珍作戦、「ツインテイルズ真ま似ねっこ大作戦」とやらは、ゴリラギルディとの戦いの後も毎日続いた。
　ツインテールのウィッグをつけたり、俺たちの顔をプリントしたお面をかぶったりと、ピントのずれたツインテイルズの物真似をしたエレメリアンたちが次々に現れ、人々の属性力エレメーラを奪おうとするのだ。
　剣、槍やりに続いて、イエローのヴォルテイックブラスターのような拳銃、ブラックのダークネスグレイブのような鎌かまも。その四種類の武器をローテーションで装備しているようだ。
　ツインテイルズの評判を落とすこともできていないし、アルティメギルはいつまでこんなことを続けるつもりなんだか……。

「はぁ～、おっぱい凝っちゃいました。誰だれか揉もんでくれませんかね～」
　夕食の後、俺がリビングでＴＶでも観ようかと思っていると、キッチンで食器を片付けているトゥアールが不意にそんなことを口にした。
　凝ったのが肩なら揉んでもあげられるけど、そういう女の子特有の身体からだの不調みたいなものは、男の俺がどうにかできるものじゃないからなあ。
「きっと総そうちゃん、『肩なら揉んであげられるけど』とか思ってるわね。駄目よトゥアールちゃん、こういう時は先に肩を揉ませて、徐々に手を下げさせていくの。最初に男の子の警戒心を解くのは、基本中の基本よ」
「ううっ、すみませんお義か母あ様……。私、全っ然恋愛経験値が貯まらないんです……蛮族のせいで毎日ラスボスと戦ってるぐらい戦闘経験

値は貯まるんですけど……」
　キッチンの奥で母さんとトゥアールが何かひそひそと語らっている。
　俺が適当なチャンネルに合わせて番組を観始めると、例によってツインテイルズの映像が映し出された。大衆向けの科学サイエンスバラエティー番組のようだ。
「ツインテイルズの強さの秘密に迫る！」と題し、著名な学者たちをスタジオに集めて討論している。
　強さの秘密か。「ツインテールだから」の一言で終わるんだけどな……。
　番組スタジオのモニターに、棒立ちのテイルブルーのイラストが映し出された。
　そのテイルブルーは全身の左半分が透過され、解かい剖ぼう図のようになったのだが……身体の下に描かれていたのは、臓器ではなく機械だった。
『テイルブルーが実はロボットだと仮定すれば、これまでの不可解な行動の謎なぞが解けます。おそらく彼女は試作機で制御が難しく、よく暴れてしまうのです』
『なるほど、その経験を活いかして造られたのがテイルシルバーなのですね』
　あ、これ愛あい香かと一緒に観たらいけない番組だ。
　テイルブルーは怖いもの見たさな人々の好奇心を駆り立てるのか、定期的にこういう秘密究明特番みたいなのが作られるんだよなあ。
「これは中々の面白映像ですね！　追いかけ録画しておきましょう！　特にあのテイルブルー断面図は煽あおり画像に使えそうです!!」
　背もたれを飛び越え、軽やかにソファーに座るトゥアール。そしてメカメカしいテイルブルー解かい剖ぼう図をあらためて注視し、胸のところに搭載された〝反物質エンジン〟に注目した。

「着眼点はいいですけど、反物質エンジン程度じゃテイルブルーの出力は再現できませんね～。せいぜい変身前の愛香さんが関の山です」
　自在に宇宙を旅できると夢想されている未知の技術が、いち女子高生を再現するだけで限界になってしまうとは……。
　俺はトゥアールと一緒にしばらく番組を観ていたが、飛び出すのはとんちんかんな議論ばかり。思わず苦笑してしまった。
「やっぱこの世界の科学力じゃ、ツインテイルズの強さの源が心の力だとは行き着かないか」
「でも、決して荒こう唐とう無む稽けいな発想ともいえませんよ。テイルブルーがロボットだって」
　意外な言葉に虚を突かれる。俺が見ると、トゥアールは寂しげな瞳ひとみで微ほほ笑えみ返してくる。
「だって──今ここにいる私が、ロボットじゃないなんて保証はないじゃないですか」
「えらく唐突だな……トゥアールは人間だろ？」
「懐疑主義哲学議論の基礎ですよ。世界は数分前に始まったのかもしれない。今、目に見えている光景は、培養液に漬けられた脳に送られている電気信号かもしれない……」
　寂しい哲学だ。それを考え始めると、止まらないよな……。
「結局人間は……どれだけ科学が進んでも、他者と触れ合うことでしか自分の存在を証明することはできないんです」
　トゥアールは、濡ぬれた瞳で俺を見上げてきた。
「……確かめてください、総そう二じ様。私が、ロボットじゃないって──」
「ットゥアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアルッ!!」
　そして、全身濡れた人がリビングに突入してきた。

「うわ、何だよ愛香、その格好!!」
　愛香はバスタオル一枚で、身体からだ中びしょびしょだった。
　この一月に風ふ呂ろ上がりバスタオル一丁で夜道ダッシュして隣の家まで来たのか……。
「ご、ごめんねそーじ……お風呂に入ってる時に嫌な予感がして……着替えてる暇ひまなかったのよ！」
　着替える間もなく駆けつけながらも、ツインテールは結んでいる。さすがだ愛あい香か。
「未み春はるおばさんもごめんなさい、床を濡ぬらしちゃって……この後トゥアールの血と一緒に拭いてきれいにしますから!!」
「いいのよ愛香ちゃん、どんどん色々濡らしちゃって」
　今、さらっと殺害予告が聞こえた気が……。
　しかし愛香が詰め寄っても、トゥアールは少し元気がないままだ。
　愛香は俺とトゥアールの間に割って入るように、ソファーにどっかと腰を下ろした。
「人が黙っていれば何バスタオル一丁で隣に座ってくるんですかこの原始人は!?」
「ねえトゥアール、最近そーじの家にいる時間長くない!?」
　愛香、その格好であんまり脚を上げない方がいいって……。
「……地下の自分の部屋に行っても……どうせ、眠れないですから」
　体感湿度が一気に上がったソファーで、トゥアールは素直にそう吐と露ろした。
「色々考えちゃって……。あまり、一人でいたくないっていうか……寂しいっていうか……。すみません総そう二じ様、迷惑でしたよね」
「そんなの気にするなよ！　好きなだけここで過ごせばいいじゃないか!!」
「そうよトゥアールちゃん。今日もこの後、〝神しん魔ま超ちよう越え

つ神しん剣けん〟のデザインで話し合う予定でしょ？」
　母さんもトゥアールのスランプ打破に一役買って出てくれているようだ。
　なんで神も魔も超越してまた神に戻ってるんだよって思いは変わらないけどな。
　トゥアールがしおらしいせいで毒気を抜かれたのか、愛香は身体からだから湯気を立ち上らせながら嘆息した。
「ったく……わかったわよ、今夜はあたしが一緒に寝てあげるから。それでいいでしょ？」
「余計な姐あね御ご肌はだを発揮しないでもらえますか⁉　誰だれかと一緒に寝たいんじゃなくて総二様と寝たいんです私は‼」
「寂しいって聞いて、ほっとけるわけないでしょ‼」
　愛香はトゥアールの首根っこを引っ掴つかみ、勢いよく立ち上がった。
「おばさん、お風ふ呂ろ借りますね。入り直さないと湯冷めしちゃう」
「いやああああああああああああああ助けてください総二様、素手で服を紙のように引き千ち切ぎるエロマンガ物理法則を腕力のみで成しえる蛮族がああああああああああ‼」
「総ちゃんも一緒に入ってあげて。トゥアールちゃんが寂しいって言ってるんだから」
　母さんがまた変なことを言う……と俺が思った瞬間。
「──色々考えちゃって……あまり、一人でお風呂に入りたくないっていうか……」
　愛香に抵抗していたトゥアールがピタリと動きを止め、先ほどの自分の発言を一部差し替えた再放送を放映する。そして何な故ぜか、自分から服を脱ぎ始めた。
「さあ総そう二じ様、一緒にお風ふ呂ろ、一緒にベッドのコンボで私を

──」
「不眠症に一番効く特効薬は──これよっ!!」
「ぴじょんてーる!!」
　鳩尾みぞおちに重い一撃をもらい、うめき声を上げて崩れ落ちるトゥアール。
　気絶したまま、愛あい香かに風呂場へと連れて行かれるのだった。
　……寂しい。
　まるでついうっかり零こぼしてしまったかのようなか細さだったが、やっとトゥアールの本音が聞けたような気がする。

◇

　そんなある日、アルティメギルが別の動きを見せた。
　放課後、部活の時間も終わり、今日は大丈夫かなと気を抜きかけた矢先の出現アラートだ。
　俺、ブルー、イエロー、ブラック、メガ・ネのフルメンバーで現場に急行する。
『現れたエレメリアンは全身から高温を発していて非常に危険です。現場ではすでに警察が避難誘導を行っています。皆さん、急いでください！』
「ああ、かなりヤバいみたいだな！」
　オフィス街の中にある植林で囲まれた休憩スペースに、そのエレメリアンはいた。
　離れた道路では、まだ逃げている人たちが見える。
「現れたなツインテイルズ。冬の街を歩いたところで、我わが褐色肌属性サンターンスキンを満たすことは難しい……お前たちが来るのを待っていたぞ！　俺の名はイフリートギルディだ、覚えておけ!!」

　身体からだが揺らめく炎のように棘とげ張っているエレメリアンだ。
　三日月状に大きく裂さけた口からは、二つの牙きばが伸びている。
　太く盛り上がった全身の筋肉が灼しやく熱ねつを携たずさえるその様は、まさに火の魔神イフリート。
　両肩からは肩当てのように炎が噴き出ており、あれでは人間は近づかれただけでもひとたまりもない。
　こんなただ立ってるだけで危険な奴やつが、退社どきのオフィス街に現れるとは……。
　ブルー、イエロー、ブラック、メガ・ネは即座に臨戦態勢に入る。
「お前はツインテールにしていないのか……作戦はどうした？」
　俺もブレイザーブレイドを構えながら、疑問を投げかけた。
「いらぬ！　何が『ツインテイルズ真ま似ねっこ大作戦』だ、誇りを失った雑魚ざこどもが！　そんな猪ちよ口こオざいな真似などせずとも、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士は存分に成果を挙げられるわ!!」
　神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士が残存軍と連携が取れていないのは、今も変わらずか。
　残存軍が「ツインテイルズ真ま似ねっこ大作戦」で勢いづいているのが気に入らず、勝手に出撃してきたってところか。
「面白い、小物続きで眼鏡めがねがなまっていたところじゃ。わらわが相手になってくれるぞ」
　ブラックはダークネスグレイブで空くうを薙なぎ、不敵に言い放った。
「俺はお前が組織にいた頃ころから不満だったのだぞ、テイルブラック」
「わらわはお前なんか知らんぞ！　さてはストーカーじゃな!?」
　宣戦布告に不満げな応答を受け、ブーメラン気味な罵ば声せいを浴び

せるブラック。
「黒の装いを身にまとうのならば、小麦肌に銀髪！　このタッグは外せん！　それを貴様は、白肌はともかく黒の鎧よろいに黒髪だと⁉　黒という無彩色は、同じ黒と合わせると喧けん嘩かしてしまうのがわからんのか‼」
「黒衣装と茶肌の方が喧嘩するわ、バーカバーカ‼」
　ブラックも負けじと反論するが、イフリートギルディの悪たれ口も止まらない。
「黒、茶、銀と上に行くにしたがってグラデーションになるのが美しいのではないか！　イラストを基本から勉強し直すがよい‼」
「あの、黒から茶を経て銀ですと、グラデーションになっていないのですが」
　美術も優等生な生徒会長が、エセ知識を披露する怪人にしっかりと駄目出しする。
　親友の援護射撃も入って勢いづき、ブラックは神眼鏡ゴツドめがねに手を添えて属性力エレメーラを高めた。
「そんなに日焼けした肌が見たければ、好きなだけ見せてくれるぞ！　セラフィックインフィニット‼」
　ブラックの神眼鏡ゴツドめがねから、∞型の光輪が放たれた。その光が凝縮して何人ものおっさんが具現化し、イフリートギルディを取り囲む。
　筋きん骨こつ隆りゆう々りゆう・ビキニパンツ・こんがり日焼け・全身オイルでテッカテカという破滅の四重奏カルテツトを奏かなで、おっさんたちがイフリートギルディへとにじり寄っていく。
　だがイフリートギルディはその死の幻覚をつまらなげにーいち瞥べつすると、
「失うせよ、おっさん‼」

　全身から蒸気のように勢いよく炎を噴出した。
　数々のエレメリアンを恐怖させてきた幻覚技が、脆もろくも霧む散さんしてゆく。
「わらわの幻覚が効かぬ!?」
　驚きよう愕がくするブラックへと己が力を誇示するように、イフリートギルディは胸を拳こぶしで叩たたいた。
「笑止！　小麦肌を見ようとして、必ずしも健康的な乙おと女めだけを選り好みできると思うか！　そういう時はだいたい周囲に筋肉質の男も蠢うごめいておるから、そのうち見慣れたわ!!」
「ぬう……マッチョなおっさんに耐性があるとは！　こやつ、できる!!」
　ブラック……お前の強者基準って……。
「雑魚ざこどもに用はない。俺は首領様の命めいを……究極のツインテールの奪取を完かん遂すいしに罷まかり越したのだからな!!」
　ブラックから視線を切ると、イフリートギルディは俺に向き直る。
「テイルレッドよ。お前のやんちゃぶりは音に聞いていたが……なるほど徹底的に可か愛わいい」
　俺の頭から爪つま先さきまで、丹念に舐ねぶり見てくるイフリートギルディ。徹底的に気持ち悪い。
「だが、惜しいな……その腕白さ、その幼さに最も似合うものが足りていない━━元気なこんがり日焼け肌がな!!」
「俺、あんま日焼けしない体質なんだよ」
　思わずマジレスしてしまった。
　愛あい香かも俺も、外で遊びまくってもあまり日焼けしない子供時代だったな……。
「体質と諦あきらめてよいのか。究極のツインテールならば、あらゆるツインテールの探求者のはず。貴様は見たくはないか、小麦肌に映える

ツインテールを!!」

「□□□□□□!!」

　こいつ、痛いところを突いてきやがる。

　なるほど、日焼け肌にツインテールか。確かに見たい。



「駄目よレッド！　日焼けのし過ぎは女の子の肌には大敵なんだから！　スキンケアさぼって好き放題日焼けしたら、将来大変なことになるわよ⁉」
　ブルーは勧誘を追い払うように手を広げ、俺をかばい出た。
「囀さえずるなＢＢＡめが！　貴様らお肌の曲がり角モンスターどもと違って、こんな幼子がスキンケアを強要されるなど、逆に不自然！　二次性徴を迎えるまでに一度や二度こんがり焼ける方が、むしろ肌に免疫ができて、すくすく育つのがわからぬか‼」
「女子高生に向かってＢＢＡですって⁉　消し炭になるまでこんがり焼くわよ⁉」
　水の使い手が物騒な脅し文句をぶつける。
「というわけで……」
　イフリートギルディは指パッチンで戦闘員アルテイロイドに指示し、日焼けサロンに置いてあるような大型の日焼けマシーンを運ばせてきた。
「モッケキタ」
「おう、ご苦労」
　最近戦闘員アルテイロイドが普通に喋しやべってるように聞こえるんだが、俺、疲れてるんだろうか。
「そ、そのう……。むふふ、不ぶ躾しつけな願いで悪いのだが」
　不気味にしなを作り、俺を横目でチラッチラ見てくるイフリートギルディ。
「何だよ」
「いや、日焼け跡も萌えるのだが、やはり俺は全身くまなく小麦色が大好きでな。というわけでテイルレッドよ、ここは一つ全裸になってこのマシーンに──」
　寒気を感じた俺だが、その瞬間背後にさらなる怖おぞ気けをおぼえ、

後ろを振り向いた。
　あら。ブルーもイエローもブラックも、最強変身チエインエヴオルブが完了していらっしゃる。
　三人は大股でイフリートギルディに押し迫っていく。
「あんたたちって本当……本ッ当、あれだわ」
　まずはブルーがイフリートギルディを容よう赦しゃ無く蹴けり転がし、ストンピングを開始。
「こんな血迷った結論に至るまでに、暑苦しい御託を並べおって!!」
　優しいおかんと合体したブラックも、非情の踏みつけに参戦する。
「ぬああああああああああお助けえええええええええええ!!」
　仕舞いには、ドＭのイエローまで凛り々りしい真顔でストンピングに参加していた。
「神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士って、このパターンが多いよな……」
『欲望に忠実すぎて皆さんの怒りを買うのがお決まりですからねぇ……。駄目ですよ総そう二じ様、レッドちゃんの姿で脱ぐのでしたら、基地で私の前で脱いでくださいね』
　基地のトゥアールも呆あきれ気味だ。どこでも脱がないから安心してくれ。
　しかし、小突いた程度ではビクともしないのも、強戦士たる神の一剣ゴー・デイア・ソードの常じよう套とう。
「ぐぬっ……！　なんっ……のおおおおおおおおお!!」
　イフリートギルディはストンピング地獄を力尽くで脱出。手の平に練り上げた複数の火球を、俺たちに向かって投げつけてきた。
　散開して回避するが、直撃した地面の石畳が熔とけてしまっていた。
　こいつは炎を使ってくるんだ、俺が先頭切って戦わないと。
　ブルーたちに遅れて俺も最強変身チエインエヴオルブすべく、左腕に

属性力エレメーラを集中する。
「ツインテイルオン！　……って、あれ!?」
　俺は左腕をまじまじと見つめた。
「ツインテイルブレスが……出ない……」
　俺の脳裏を、悲しげな表情のソーラが過よぎる。まさか──
「また不発？　レッドのツインテイルブレスって、本当にその力が必要だって相手にしか発動しないようになってんじゃないの？」
　ブルーがフォローしてくれるが、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士相手なら力は必要なはずなんだ。
「ここはわたくしたちだけで大丈夫ですわ。その代わりレッドは、敵の攻撃があらぬ方へ弾はじかれたりしたら、街を守ってくださいませ！」
「わかった、頼んだぞみんな!!」
　イエローの合図でブルー、ブラックが飛ひ翔しようし、攻撃を仕掛ける。
　ブラックは高速飛翔で撹かく乱らんしつつ攻撃、範囲を絞ったイエローの銃撃、ブルーのヒットアンドウェイで、敵の火炎発射を封殺しつつ追いつめていく。
　神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士との対戦経験を積み重ねたこともあり、危なげなく戦局を進めることができていた。
　ついに、イフリートギルディは地面に膝ひざをついた。石畳から焼ける音が響く。
「ま、負けるか……。今や少数精鋭の神の一剣ゴー・デイア・ソードも壊滅寸前だというのに……!!」
　変態だが、イフリートギルディもかなりの根性だ。
　こいつも、自分の部隊に誇りを持って戦いにやって来たんだな……。
　しかしその誇りは、最悪の方向へと暴走してしまう。
「こうなれば──俺も、己が生命いのちをこんがり日焼けさせるしかある

まい!!」
　イフリートギルディは天に掲げるように、黒い属性玉エレメーラオーブを取り出した。
〈……！　あれは、ブラキオギルディはんが使った……〉
　ブラックの胸装そう甲こう──メガ・ネが、悲壮な声をこぼした。
「うむ……不退転の強化装置……〝首領の吐息ゴツド・ブレス〟!!」
『自身の肉体に撃ち込むことで、限界まで潜在能力を解放する……強制的に最終闘体を引き出す悪魔のアイテムです!!』
　そしてブラック、基地のトゥアールが、驚嘆の声を上げる。
「ぬうううううううううああああああああああああああ!!」
　躊躇ためらいなくそれを自分の胸に差し込むイフリートギルディ。
　上半身が大きく膨ふくれ、下半身が炎そのものとなって浮遊する。より精霊じみた風ふう貌ぼうとなって強化を果たしたイフリートギルディだが、その代償はあまりにも大きかった。
「ウウウオオオ、オ、オ……ペプチド……コラーゲン……!!」
　蒸気のように噴き上がった炎が、周囲に無差別に乱射されていく。歩道の植林が炎上し、アスファルトが融解する。
　首領の吐息ゴツド・ブレスとやらが、悪魔の強化装置と言われる所以。力と引き替えに理性が消し飛び、破壊の化身となってしまうのだ。
「ヤケ、ロ……コンガリ、ヤケ、ロ……！　ビタミンＥ……ヒアルロンンンンン!!」
「やめろ────────────────っ！」
　俺がどれだけ叫んでも、イフリートギルディは一いつ顧こだにしない。奴やつが運ばせてきた日焼けマシーンを火だるまにしても、気にも留とめない。
　完全に我われを失っている！　世界そのものを小麦肌に焼くつもりか!?

　俺たちは、イフリートギルディに攻撃するより先に、周囲に放たれる無軌道な攻撃の対処に追われる。避難が完了してるとはいえ、このままじゃ街が火の海にされてしまう！

　これが、リミッターを外した神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士……始末に負えない!!

　背後の小さな気配に、俺ははっとして振り返る。

　避難中に飼い主とはぐれたのか、子犬が心細げな鳴き声を上げながら歩道に出てきた。

　その子犬目掛け、容よう赦しゃ無く炎が飛ひ翔しようする。

「わんちゃんっ……！」

　ブラックは子犬の前に飛び出すと、ダークネスグレイブメビウスで炎を斬きり裂さいた。

　手近なビルの入り口を示し、中へ入るよう促うながしている間に……ブラックの頭上に、イフリートギルディの放った巨大な炎が降り注いでいた。

「逃げろ、ブラック！」

　俺が叫ぶも、すでに炎はブラックを捉えている。

〈ブラックちゃ──〉

「しまっ……」

　メガ・ネとブラックの声が、炎に呑のまれていく。

　俺たちの助けも、自身の回避も、あと一歩遅い……悔恨に支配された時の狭はざ間まで。

　上空から炎の矢が飛来し──ブラックの眼前でイフリートギルディの炎を貫いた。

　俺たちは、虚を突かれたように動きを止める。

「おおっ、この炎……！　テイルフェニックスが来てくれたのじゃ‼」
　計ったように完かん璧ぺきなタイミングでの援軍、ブラックでなくともそう思っただろう。
「イエローの言った通りじゃな、わらわたちのピンチには駆けつけ……」
　歓喜とともに空を振り仰いだブラックの顔が、困惑に固まる。
　天に佇たたずんでいたのは、テイルフェニックスではなかった。
　白いローブをまとったエレメリアン……神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士か⁉
　その場の全員が注視する中、戦士は音も無く降下。俺たちとイフリートギルディとの間に割り込むように着地する。
「駄目だろー、理由も無しにただの破壊活動なんて。そんなことしたらさ、エレメリアンはおしまいだぞーっ？」
　目ま深ぶかにかぶったフードの奥から聞こえたのは、驚くほど幼い声だった。
　妙なことに、神の一剣ゴー・デイア・ソードの正装らしき白ローブには必ず染め抜かれていた剣のエンブレムが、その戦士の背にはなかった。
　しかも、こうして間近で見て気づいたが……やけに小柄だ。
「ア、アアア……シロイ……ヤケテナイ……‼」
　イフリートギルディが、右手にマグマを噴出させた。火砕流が冷え固まるかのようにして巨大なドス黒い剣が形成され、その剣を握り締めて白ローブへと近づいていく。
「僕のこと忘れちゃったかー。馬ば鹿かだなお前、あんな奴やつの発明なんか使うから……」
　自分の数倍はある巨漢の刃じん圏けんに捉えられて尚、白ローブは一歩も動こうとしない。

　ついにイフリートギルディは、白ローブの脳天めがけ剣を振り下ろした。
「危ないっ!!」
　攻撃されているのもまたエレメリアンだということも忘れ、俺は咄とっ嗟さに呼びかけていた。
　バキン、という鈍い音が響きわたった後、白ローブの立つ地面のアスファルトがクレーター状に陥没していった。
「□□□□!?」
　攻撃を仕掛けたイフリートギルディの方が、違和感に後あと退ずさる。思わず自分の剣を確認し、血走った目を見開いた。
　白ローブの頭部は傷一つつかず、逆に振り下ろされた大剣の方がズタズタに刃こぼれしてしまっていた。まるで、岩の塊かたまりに斧おのを叩たたきつけたかのように。
　かぶっていたフードだけが威力に耐えきれず破れ散り、隠れていた素顔が顕あらわとなる。
「何だって!?」
　俺は目を疑った。
　女……少女……幼女──。俺は、目まぐるしく見た目の印象年齢を下方修正していく。
　子供だ。その戦士は、明らかに子供だった。
「小さな女の子のエレメリアンですわ！」
　予想外の容姿に、イエローも驚きの声を上げる。
　今まで数え切れないぐらい多くのエレメリアンと戦ってきたけれど、こんな子供ぐらいの背丈の奴なんて一体もいなかった。
　例外として、体長をコントロールできるユグドラシルギルディくらいか……。
「うっわ、あいつが好きそうな見た目……」

多分トゥアールのことだろう、ブルーが緊張感に耐えかねるように冗談めかす。
『いくら小ちっちゃかろうと、私はエレメリアンにときめくほど節操無しじゃありません』
それに通信で答えるトゥアールは、真剣に否定していた。
多少態度が軟化したといっても、やっぱりトゥアールのエレメリアンへのスタンスは徹底してるな……。
見た目の幼さが目を引くが、それ以外も異質だった。
ティアラのように華々しく装飾された頭部からは、元気な短髪の女の子の印象を受ける。

「やっほー、ツインテイルズ！　僕はアポロギルディだぞ！　よろしくなー!!」

とうとうイフリートギルディに背を向け、俺たちに手を振ってくるお子様エレメリアン。
「ヒ……ヤ……ケ……!!」
理性を失っても、相手に無視されることに侮辱を感じたのだろう。
イフリートギルディは大きく裂さけた口に炎を集束させ、火炎放射器のように勢いよく撃ち放った。背中から炎に呑のみ込まれるアポロギルディ。
炎の中で、シルエットが崩れ落ちていく。
だが、やはり焼け落ちたのは白いローブだけだった。炎が霧む散さんし、健在な姿を見せる。
「無傷……なのか、あの猛烈な炎を受けて……⁉」
俺の独白を耳ざとく聞き取り、アポロギルディなるエレメリアンはあっけらかんと応こたえた。

「そりゃそーだろ！　──太陽は、マッチの火で火傷やけどなんてしねーって」
　無邪気な口調の只ただ中なかに交じる、氷の感情。
　ついに、アポロギルディの全身が顕あらわとなる。
　高貴なドレスのような装そう甲こうを彩いろどる、灼しやく熱ねつのライン。
　翼のように揺れる、炎の外套。
　皇女さながらの華々しさを身にまといながら、放つ威圧感はまさに、太陽神──。
　俺も、ブルーも、イエローも、ブラックも……基地のトゥアールも、言葉を失う。
　その初う心ぶなまでに無む垢くな風格に、全員が目を奪われていた。
「ヌオオオオオオオオオオオオオ、メラニ──────────ン!!」
「次は、ちゃんと自分の力で戦えよ」
　アポロギルディは、憐あわれむようにイフリートギルディを一いち瞥べつする。その雄大な胸板へと、デコピンをするように指を軽く打ちつけた。
　瞬間……イフリートギルディは、全身から激しく炎を噴き上げ始めた。
「何だ、パワーアップさせてやったのか!?」
『違います！　イフリートギルディが、発火してます……体内から……!!』
　俺の警戒は、トゥアールの分析によってより恐ろしい結論へと導かれた。
　燃えているっていうのか……あいつ自身が!?
「僕に燃やせないものはないからな。空も、大地も、星さえも……もちろん、無法者もな」

炎の使い手が、為なす術すべなく火だるまになっている──。
「じゃなー」
火の玉と化したイフリートギルディへ、アポロギルディは強烈無比の回し蹴げりを見舞った。
「グゥアアアアアアアアアアアアアア……!!」
爆発が吹き飛び、地面を走っていく。
恒久的に爆発を続けながら地面を抉えぐり、イフリートギルディは遥はるか離れた高層ビルに突っ込んでいった。
ビルは瞬またたく間に炎に呑のまれ、正確に発破をしたように倒壊。自重で押し潰つぶれ、残った瓦が礫れきさえも炎で焼け熔とけていった。
「何だ、あの強さは……!?」
高層ビルがキック一発の余波で一棟丸々消え去る様を、俺たちはどこか絵空事のように見ていた。
ただでさえとんでもない強さの神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士……それが、〝首領の吐息ゴッド・ブレス〟で暴走強化されていたんだぞ!?　それを、こうもあっさりと倒してのけるなんて……。
アポロギルディは軽やかに振り返り、挑発的な視線を俺たちに向けてきた。
「粛正、したのか……仲間を」
「元部下の不始末は、責任取んないとな～」
俺が問いかけると、アポロギルディは事もなげに笑い捨てる。
「……へ～。テイルレッドは、首領様に似てんだなぁ。戦ってみたくなっちゃったよ」
叩たたきつけられる無邪気な戦意に戸惑いながら、俺はブレイザーブレイドを構えた。
残り香のように周囲を燻くすぶる炎に包まれた戦場で、視線をぶつけ

合う俺とアポロギルディ。

「――やめたまえ、アポロギルディ」

　緊迫した空気を切り裂さいたのは、さらなる闖ちん入にゅう者の声だった。
「今はまだ、私たちが戦う時ではない」
「今度は誰だれ!?」
　ブルーが振り返った背後にいたのは、白ローブをまとった長ちよう躯くのエレメリアンだった。
　ゆったりとしたローブでも十分に隠せないほど肩や背中がでこぼこに盛り上がっており、その下に包まれた凶まが々まがしい肉体を嫌でも連想させる。
「あははー、別に本気じゃないって。わざわざ迎えに来るなよなー」
「無論、君の仕事は信頼しているさ。ただ、私も好奇心を抑えられなくてね」
　アポロギルディと入れ替わるように、白ローブの戦士が俺たちの前へと歩み出た。
「初めまして……ツインテイルズ諸君。私は冥めい府ふの神、ハデスギルディ。このアポロギルディとは古い仲でね……」
　焼け熔とけたオフィス街を見わたすハデスギルディ。消えずに残る、周囲の爪つめ痕を。
「いや、イフリートギルディが失礼をした。彼も優秀な変態だったのだがね……こんなことになって残念だ」
　非礼を詫わびるように惜しむことなくローブを脱ぎ捨て、ハデスギルディは素顔を晒さらす。
　やはり、俺の想像は間違っていなかった。

なんという荘そう厳ごんな肉体だ。地獄をそのまま一個の身体からだに象かたどったように、その姿は死で彩いろどられていた。
髑どく髏ろのような貌かおは、眼がん窩かに凄すごみを湛たたえている。生命いのちを縛りつけるかのように、各所に巻かれた鎖。黒で覆おおわれた肉体はところどころが血の池のように赤く染め抜かれ、茨いばらの道のように棘とげ張っている。背中に垂れ下がるのは、針の山で構成されたような鋭いマントだった。
かつて戦ったケルベロスギルディが冥府の門番ならば、このハデスギルディはその冥府を統すべる王。冥めい王おうだ。
こいつも別格だ……俺のツインテールがビリビリ震ふるえてやがる。
「君たちの強さは見せてもらったが……一つ助言をさせて欲しい。自分を抑圧すべきではないとね。そうすれば君たちは、もっと強くなれる」
「このような場所で戦いを挑んできておいて、力を加減するなと仰おつしやるんですの⁉」
人口密集地や建物に囲まれた場所では、その強大な火力に細心の注意を払って戦わなければいけないイエローだ。敵のそんな言い分、煽あおっているようにしか聞こえないだろう。
「うむ、それはこちらの落ち度だが……私が言っているのは別の、単純なことなのだよ。──もっと変態になりたまえ」
こんな状況だというのに、俺たちは全員、呆ぼう然ぜんとしてしまった。
「わー始まったー」
アポロギルディは他人のふりをするかのように、ハデスギルディから離れていく。
「変態とは、〝心〟が〝変〟わるを〝能あた〟うと書く。わかるかな少女たちよ、変態とは悪ではない。心の成長、進化の現れ──喜び誇ることなのだよ」

ハデスギルディは神よろしく、芝居がかった仕草で諸もろ手てを広げた。
「君たちはせっかく選ばれた変態だというのに……つまらない遠えん慮りよを感じるのだよ。人の仔らよ、変態を恐れるな。変態たれ」
「なんって厚かましい変態なの……話聞いてるだけで頭痛がしてきた」
冥めい王おうの選挙演説じみた熱弁を前に、ブルーが指でこめかみを押さえる。
「変態……変態とは、悪かね？　私は君に変態と言われ、むしろ嬉うれしいがね……」
「いかん！　こやつイエロー的なあれじゃ!!」
「イエロー的なあれって何ですの!?」
一刻も早くこの場を収めたいと焦あせる俺に、トゥアールが通信をしてきた。
『皆さん、気持ち悪いのは承知ですが、少しだけ会話を長引かせてください……こちらでできるだけそいつらのデータを収集します!!』
俺は小声で応答した。確かに、こいつらは得体が知れないからな……。
俺たちがどんどん引いていっているのを余よ所そに、ハデスギルディは紺こん碧ぺき色の双そう眸ぼうを発光させた。そして、イエローへ視線を送るや、その目が点滅を始める。
「テイルイエロー、変態値九万五千……。ふむ、評判どおりの変態だ」
「えええっ!?　突然何ですの!?」
アブソリュートチェインの重じゆう装そう甲こうを揺らし、イエローが後あと退ずさる。
「私はこの目で視た者の変態の度合いを数値化する能力を持つ。神の特権だよ」
自分の瞳ひとみを指し示し、不敵に種明かしをするハデスギルディ。

　こんなクッソいらねえ能力、そうそうないぞ……。
「テイルブラックは九万四千か……もう少し成長していると思っていたが……まあ君もそれなりに幼い、まだまだこれからかな？」
「えー、わらわの方がちょびっと下なんじゃな……」
「スペックの数値化はわたくしも好きなのですが、その対象が嬉しくありませんわ……」
　イエローとブラックは、何とも微妙な表情で互いを見やった。
　くだらなそうにそっぽを向いているブルーも、サーチの餌え食じきとなってしまう。
「ほう……変態値一〇万……。その若さでなかなかのものだね、テイルブルー」
　ブルーの数値を読みあげ、満足げに顎あごを撫なでるハデスギルディ。
「嘘うそ⁉　なんであたしの方が高いのよ、絶対イエローとかブラックの方が上でしょ⁉」
「心配するな、変態値とは単純な戦闘力の指標ではない。戦闘力に限れば、レッド以外の君たち三人はほぼ互角と見ている。テイルブルー、君が他の仲間よりもやや変態なだけだよ」
「余計困るのよそれだとおおおおおおおおおおおおお‼」
「それが変態値の妙味なのだ。自分は大丈夫、自分は常識人だと言い張っている者ほど、実は変態なのだよ」
「なるほどのう」
「なるほどですわ」
　イエローとブラックは同時にブルーへと振り返り、同時に頷うなずいた。
「何納得してんのよ⁉」
　こ、こんなことで仲間の絆きずなが揺らいでいく……まさか、これが

冥めい王おうの狙ねらいか!?
「そしてテイルシルバー……君は──何だ、変態値一〇〇〇か。平均的な常識人よりもさらに下回っているぞ。よほど道徳的な毎日を送っていると見える」
　おまけと言わんばかりに、ブラックに合体しているメガ・ネの数値まで別個に分析してみせた。マジでどういう仕組みなんだ……。
〈ごめんなあブラックちゃん。ウチ、めっちゃ低いわ……〉
「気にするなメガ・ネ、お前とわらわを合わせるとイエローと同じじゃぞ」
　でも、安心したよ。常識人ほど実は変態なんて言うから、メガ・ネもその括くくりに当てはまったらどうしようかと思った。やっぱり常識人は常識人なんだな。
　…………あれ、じゃあ愛香ブルーって……。
「さて、残るはテイルレッドか。もっとも、君のようなただ可か愛わいいだけの幼女の変態値など計っても、たかが知れているだろうがね──」
　ハデスギルディは俺にも走査サーチの目を向けてきた。
　俺も一〇〇〇とかそのぐらいだろ、どうでもいいよ……。
「何ッ……？」
　常に優雅な態度を崩さなかったハデスギルディが、俺を見て初めて焦あせりを滲にじませた。
「変態値…………に、二〇〇万──!?　テイルブルーの二〇倍だと!?」

　────────俺だけ桁けたが違った。
「……テイルブルーの、二〇倍だと……!?」
　噛かみしめるように繰り返すハデスギルディ。
「何で二回言うのよ!!」
　一応言い返すブルーだが、爛らん々らんとした目で俺を見てくる。

「その幼さで……妙だな。私の測定に間違いはないはずなのだが……」
　ハデスギルディは、ミスした計算を解き直すように俺を凝視する。
「うむ。やはり変態だ……テイルレッド、君は一体……⁉」
「言葉を選べよ‼」
　しかし、結果は変わらなかったようだ。頬ほおの汗を拳こぶしで拭ぬぐうハデスギルディ。
「お前の言う変態ってのが何を指すのか、いまいちあやふやだけど……ツインテールを大好きな数値って意味ならまあ、心当たりもあるな」
　俺はそう解釈することにしたのだが、ハデスギルディはきっぱりと否定した。
「いやそういうのではなくて……変態なのだ」
「そういうことにしとけよおおおおおおおおおおおおおおおお‼」
　そして何でさっきからブルーはすっげー嬉うれしそうに俺を見てくるんだ、変態値だぞ⁉
「お前ら、ツインテール属性を一番に狙ねらってるんだろ！　だったら変態値なんてよくわかんないのじゃなくて、ツインテールの凄すごさを数値化したらどうだ‼」
「それは神であるこの私にもできぬ……。そんなことが可能なのは、神をも超えし全知全能の存在、首領様のみなのだよ」
　ハデスギルディは残像すら残さずに姿をかき消し、俺の眼前に瞬動する。身を固くする俺の肩をそっと抱くと、エスコートをするかのように囁ささやいてきた。
「興味が湧いたよ。その小さな身体からだのどこに、それだけの変態性を秘めているのか……ふうふう、テイルレッド……ちょっと神と二人でどこかに行こう」
「気持っち悪いわボケエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ‼」

笑顔が夜や叉しやの形相に豹ひよう変へんし、ブルーが円弧を描いた蹴しゆう撃げきを放つ。
「んんんんんんんん神の股こ間かんをサッカーボールキックだと⁉」
通常形態よりも先鋭化されたエターナルチェインの装そう甲こうが、ハデスギルディの股間を背後から直撃した。ハデスギルディはほとんどダメージは受けていないようだが精神的にくるものがあったようで、股間を押さえて呻うめいている。
俺はハデスギルディの仕草につられて、思わず自分の股間を押さえてしまった。
あ、いや、ちゃんとは触ってないぞ、ほんとだぞ。
「あははー、変なのー！　何で共感して痛そーにしてんの～？」
そんな俺を指差して、アポロギルディがけたけたと笑う。
「──まるで、ち○ちんついてる男みたいな反応じゃん」
その幼い声に、切りつけるような凍度が交じる。
「そ、想像しちゃっただけだっ！　女だって股を蹴けられたら痛いだろっ！　第一お前らエレメリアンが人間と同じように痛がる方が、よっぽど変じゃないか‼」
「そっかー、それもそーだな‼」
アポロギルディの無邪気な笑顔の奥にある何かを感じ、俺の背せ筋すじを冷たいものが流れた。
こいつ……ハデスギルディが変態演説をしてる間、やけに大人しいとは思ったが……俺を注意深く観察してたのか……⁉
「アポロギルディよ……神がちん○んとか言うのは慎つつしみたまえ」
キリッとした表情で股間を押さえるハデスギルディ。
「リズムが楽しくないかー？　ちんち○」
ほっ……ハデスギルディに咎とがめられて、アポロギルディの追及が有う耶や無む耶やになったか。

○んちんとかって単語ではしゃぐのも、人間の子供のそれだ。
お姫様であるロエルでさえそうだったしな。
アポロギルディはやっぱり子供だ。裏があるってのは、俺の考え過ぎか……？
「ふむ……頃ころ合いかな。では、今日はこの辺でお暇いとまするとしよう」
ハデスギルディたちの背後に、極彩色のゲートが出現する。
「お前ら、もっと強くなれよー！　そんじゃーまたなー！　ばいばーい!!」
「また変態アデユー」
明日の遊ぶ約束をして別れる子供のように、大きく手を振って去って行くアポロギルディ。
そしてシンプルに気持ち悪い挨あい拶さつを残していくハデスギルディ。
あまりの強さ、あまりの無邪気さ、そしてあまりの変態さ。
突とつ如じよ現れた新たなエレメリアンたちに、誰だれも理解が追いつかない。
ブルーですら何も言い返せずに、呆ぼう然ぜんと奴やつらが去っていくのを見送った。

◇

基地に帰投した俺たちだが、全員ひどい疲労感に襲おそわれていた。理由はもちろん──
「っはー……気持ち悪い……。ひたすら気持ち悪いわ、今回のエレメリアン……。キモいじゃなくて気持ち悪い……」
コンソールルームのテーブルに顔を突っ伏す愛あい香か。

「とりあえず、修復支援機を飛ばしましたので、復旧はほどなく終わると思いますが……」
　トゥアールがメインモニターに表示したのは、戦場となったオフィス街の状況だ。
「高層ビルが崩れたのよ、あれだけはどうしようもないでしょ？」
「最後にアポロギルディが倒壊させたビルは、元々解体予定のものだったようです。なので今回の戦闘の被害のほとんどは、イフリートギルディがもたらしたものになります」
　愛香の懸念が払ふつ拭しよくされる形となったが、それを言うトゥアールの表情は複雑だ。
「あのアポロギルディって奴……無意味な破壊すんなって説教してたくせに、自分は壊していいビル使ってデモンストレーションかましたってこと？」
「……いえ、むしろあのビルを盾にして他への被害を最小限に留とどめたというべきでしょう。アポロギルディは……自分の強さを十二分に自覚しているのです」
　確かに。暴走して強力な属性力エレメーラが制御不能になっていたあのイフリートギルディを、俺たちがそのまま倒して爆発させていたら……周辺の建物は甚大な被害を受けていただろう。
　アポロギルディが、一つの建物の中へと狙ねらって爆圧を閉じこめたとすれば……しかもそれが、壊していい建物だとわかってそうしたとすれば。
　あんな子供っぽい仕草の割りには、相当切れる奴だな。
「イフリートギルディのことを、元部下と言っていましたわね……。組織の理念に反した行動を取った者は、もう部下ではないということなのでしょう……」
「神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士にそう言うってことは──あのち

びっ子エレメリアンが、神の一剣ゴー・デイア・ソードの隊長なのね。何かイメージと違った」
　意外そうにする愛あい香か。正直、俺も同意見だ。
　そういえばあいつら、自分たちの役職を名乗りはしなかったな。属性力エレメーラもだ。
「わらわたちが言えた義理ではなかろう。こちらの隊長リーダーも、あれに負けず劣らずのちびっ子ではないか」
「それもそーね」
　愛香が両手の上に顎あごを乗せて、にまにま嬉うれしそうに俺を見てくる。
「どうした愛香、戦闘中から何かやたら俺見て笑ってないか？」
「そーじも何だかんだで、ちゃんと男の子なんだなって思って……。二〇〇万だし」
「そーゆーとこじゃぞ貧乳、そーゆーとこが一〇万力りきの変態なんじゃぞ」
　眼鏡めがねのずれを指で直しながら、イースナが愛香に釘くぎを刺す。
　変態値、なあ……。したり顔で俺たちの変態値とか口にしてたけど、そういうあいつはどうなんだって話だよ。五〇〇万ぐらいあるんじゃないのか？
「確かにアポロギルディはとんでもない強さだったけど、これでようやく神の一剣ゴー・デイア・ソードという最強部隊の天井が見えたな」
「そーそー。ツインテイルズの真ま似ねっこも終了だろうし、後は全力でぶつかり合ってケリをつければいいってわけでしょ」
　強敵と対たい峙じしたというのに、俺たちには安あん堵どの空気があった。
　アポロギルディは確かに強いが……その分、卑劣な搦からめ手てを

使って戦うタイプには思えない。もう一方のハデスギルディは、隊長のアポロギルディ以上の強さということはないだろう。
　あいつらが侵攻してきたら、真っ向から迎え撃つ。それで、長かった神の一剣ゴー・デイア・ソードとの戦いも終わりだ。俄が然ぜん、やる気が湧いてきたぜ。
　しかし、その実感が出てくると当然、その次に待つ存在が気になるわけで──。
「なあ、メガ・ネ。嫌なことを思い出させるかもしれないけど……アルティメギルの首領って、どんな奴やつだった？」
　首領と対峙したことのあるメガ・ネに、俺は質問した。
　ソーラに「いずれ戦うことになる」と言われたのもあるしな。
「えらい急やな……ウチもイースナちゃんも、直接は数えるほどしか会ったことないけど……面白いとこはあるけど、やたら偉ぶってはる人くらいにしか思わへんかったなぁ」
「何な故ぜそんなことを聞くのじゃ？　総そう二じ」
　メガ・ネの言葉を引き継ぐように、俺に尋ねてくるイースナ。
「俺、前々からよくエレメリアンに『首領みたいだ』とか『首領と同じ次元にいる』とか言われてさ……今日のアポロギルディもそうだったんだ。さすがに気になってさ」
「観み束つか君の人を惹ひきつける魅力が、エレメリアンが首領に感じているカリスマと重なるということなのではないでしょうか……？」
　俺にそれがあるかはともかく──慧え理り那なの言うとおり、リーダーシップを指している可能性は十分にある。ただ、以前戦ったグリフォギルディにせよ、首領により近しい神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士が特に言ってくるので、そういう象徴的なものだけじゃない気がするんだよな。
「案外首領も、そーじみたいに好きなものにのめり込みすぎる変人なん

でしょ。そんな雰囲気とかが似た者同士ってことなんじゃない？」
「そうじゃな。首領は幹部にも素顔を見せぬし、似てると言うなら雰囲気しかあるまい」
　まあ、そういうオチだとは思うけどな。
　アルティメギル首領か……。どんな恐ろしい見た目の怪物なんだろうな。

◇

　至上の神秘に護まもられた異空間、アルティメギル首領の間──。
　テイルフェニックスとの戦いにおいて崩壊したこの場所は、完かん壁ぺきに元の荘そう厳ごんな姿を取り戻していた。宇宙の星々にも似た輝きを、薄うす闇やみの中に輝かせて。
　玉座を包む聖布ヴエールも復活し、首領は再びシルエットでしか視認できなくなっている。
　あらゆるエレメリアンの憧あこがれであり、選ばれた幹部たちしか立ち入ることの許されないこの聖域に、マーメイドギルディは今日も呼び出しを受けていた。
「首領様、私は秘書じゃありません。人手が足りなくなったのなら、門番でも首領補佐でも補充すればいいじゃないですか」
　マーメイドギルディは首領の間に入るや否や、不ふ遜そんな愚ぐ痴ちをこぼす。
　そんな彼女が見たのは、玉座の横に屹きつ立りつする白い石碑だった。大きさは子供の背丈ほどで、山型食パンのように上部がなだらかな曲線を描いている。
　気になり、つい聞いてしまうマーメイドギルディ。
「…………あの、何ですかそれ」

「見てわからぬか？　墓標だ。気け高だかき不死鳥のな」
　墓標は、何となくわかる。マーメイドギルディが怪け訝げんに目を細め尋ねたのは、その白い石碑の上に浮かんでいる、コーヒーミルやドリッパーのような器具のことだ。
「余を愉たのしませた殊しゆ勲くん者の墓標だ、手て篤あつく彩いろどってやらねばなるまい」
　幾重にもぶれ不気味な首領の声に、どこか恭きよう敬けいが感じられる。
「あ奴やつは、珈琲コーヒーに見識深い口ぶりであった。ならば、墓標には美酒よりも珈琲を手た向むけるが相応ふさわしいと思ってな」
「は、あ……？」
　戸惑うマーメイドギルディの視線の先で、突とつ如じよとして何粒もの珈琲豆が出現した。
　珈琲コーヒー豆は墓標の上で静止し、丹念に焙ばい煎せんされたコク深い香りを漂わせる。
　その豆は先ほどから浮かんでいたハンドル式の手動コーヒーミルの中に収納されると、豪快な圧あつ砕さい音を響かせた。
　挽ひき漏もれのない見事な中挽きに仕上がった豆は、柔らかな味に仕上がると通に好まれる布ネルフィルターへ投入される。そこへ細口のケトルが出現し、慎重に傾けられていく。
　挽いた豆に僅わずかに湯を含ませしっかりと蒸らした後は、小さく円を描くようにして丁寧に湯が注がれていった。
　そうしてドリップされた珈琲は、たち、たち、と静かな音を立てて一滴ずつ墓標に降り注ぐのだ。
　好敵手には手て間ま暇ひま惜しまず、本物の技と味を手た向むける。
　そこには、アルティメギル首領の度量の大きさが垣間かいま見みえた。

「エレメリアンが珈琲だなんて……」
　マーメイドギルディはそんなロマンに心動かされることなく、げんなりしていた。
　墓標をよく見ると、とってつけたように洒しや落れた筆記体で名前が刻まれており、それがまたイラっとさせる。
　もっともマーメイドギルディは、そこに刻まれた名が組織に縁深きフェニックスギルディではなく、Ｘである理由を知しる由よしも無いだろう。
　墓石には、その名を刻む──。首領は真剣勝負の果てに、誓いを果たしたのだ。
「余が認めた者ほど、早々と世界から消えてなくなる……寂しきものよ」
　墓標へ垂れ落ちる琥こ珀はく色の珠たまを見ながら、首領は自分に酔ったような声こわ音ねで呟つぶやく。
　これは長くなる、と肩を落とすマーメイドギルディの前で、首領はさらに陶酔を深くしていった。
「──雨が、降ってきたな……」
「室内ですけど」
「余が墓標に手向けた美酒を、流し落とそうというのか……」
「珈琲ですよね？」
「不死鳥の猛たけき炎が消えたのも、こんな雨空の下であった……」
「晴れてたでしょう……」
　首領はくっくっと笑いを浮かべる。
「妙な口ぶりをする。不死鳥が消えし時この場所がどうなっていたか、誰だれも知るはずはないのだがな？」
「ッ……!!」
　流れ作業のようにツッコミを入れていたマーメイドギルディが、不意

に息を呑のんだ。
　いつもどおりの中二じみた戯ざれ言ごとでカマをかけられるなど、誰が予想できよう。
　平静を装いきれず腕や足を微震させるマーメイドギルディへ、首領は不気味なほど穏やかに語りかける。
「どうしたマーメイドギルディよ、余はむしろ賞賛しておるのだぞ？　あの戦いは何なん人ぴとの邪魔も入らぬよう、念入りに結界を張ったのだ。覗のぞき見をするのにもまた、相応の力が要いるのだからな」
　その言葉を額面どおりに受け取ることなどできない。
　反逆や暗躍も見過ごす寛大なアルティメギル首領が唯一怒りを覚えるのは、自身の楽しみを邪魔立てされることだ。
　好奇心で戦いを覗いたことが、逆げき鱗りんに触れた可能性がある。
「だが余は、素顔を見せるのは勇者のみと決めておる。ヴァルキリアギルディが生命いのちをかけ曝あばこうとした余の面めん貌ぼう、ただ見せたとあっては天の戦いくさ女め神がみも臍ほぞを噛かもう」
　ヴァルキリアギルディは曝こうとしたのではなく、ただ愛する者の顔を見たいと願っただけなのだが……首領もそこまでは推察できないようだ。
「私に、首領様の戦闘たわむれの相手になれと仰おつしやるんですか？　自慢じゃないですけど私、戦闘力ゲキ弱ですよ」
　本気で警戒し、後あと退ずさるマーメイドギルディを見て、首領は聖布ヴエールの奥で深く嘆息した。
「そう身構えるな。何度も呼びつけるのも、余が目をかけている表れ。どうだマーメイドギルディよ……余の話し相手も飽きた頃ころ合いであろう。ここで一つ──お前も殊しゆ勲くん者になってみようとは思わぬか？」
「別に私、そういうの興味ありませ──」

　マーメイドギルディは、言葉半ばに硬直する。
　ぞっとするほど凍いてついた風が、彼女の頬ほおを撫なでていった。

「――お前には、時間が無いのであろう？」

　澄んだ少女の声が、マーメイドギルディの背後から聞こえた。
　はっとして前を見ると、聖布ヴエールが大きくはためき、その奥の無人の玉座が露あらわになっている。
「ならば、悠ゆう長ちようなことはしていられまい」
　いる。
　自分の背後に、首領が。
　正体を露わにした、アルティメギルの巨きよ魁かいが。
　しかし、襲おそい来る威圧感がマーメイドギルディを硬直させる。破滅恐れぬ好奇心をもってしても、振り返ることはできなかった。
　マーメイドギルディの頬に、背後から伸びた白魚のごとき細指が触れる。
「あっ……」
　彼女は思わず、初めて異性に触れられる生き娘むすめのような怯おびえた声を漏もらした。
「……フッ……」
　背後の微笑が、マーメイドギルディの身体からだを摺すり抜けてゆく。
「っ……は、は、はあ、はあ……」
　急に圧迫感から解放され、息を荒らげるマーメイドギルディ。
　再び前を向くと、聖布ヴエールの奥に首領の像がうっすら陰って見えていた。
「……っ……失礼、します」

　乾ききった声を絞り出し、マーメイドギルディは踵きびすを返す。
　首領は自分と次元の違う強大な存在。それを、まざまざと思い知らされた。
「欲望のままに権謀術数を巡らせ、終ついには最強部隊を己が手中に収めたその手腕……今こそ最大に発揮してみせるがよい」
　遠ざかってゆく足音へ、首領はこれまでになく大きな期待の言葉を送った。

「神の一剣ゴー・デイア・ソード、現隊長──マーメイドギルディよ」

キャラクター名鑑 039

ソーラ（女神）



DATA

- 性別：女
- 年齢：数百億歳？
- 誕生日：宇宙が誕生する少し前
- 身長：146㎝
- 体重：40㎏
- B83・W54・H78

宇宙創生の古から全てを見守る女神。ツインテールの概念を創り、ツインテールの戦士たちの悲劇を見続けてきた彼女が最後に辿り着いたのは、ツインテール好きの少年・観束総二だった。ずっと一人だったため当然男女交際の経験はなく、奥手で貞操観念に厳しい。自分が総二に裸を見せるのは恥ずかしいが、総二が他の女の子の裸を見るのは許せない。女神も普通の恋する女の子なのだ。

第四章　ツインテール・ヒストリー。

　アポロギルディたち神の一剣ゴー・デイア・ソードの幹部が現れたあの戦いから、さらに数日が経たった。
　結局俺たちの予想は外れ、ツインテイルズ真ま似ねっこ大作戦は続行されている。
　その日の昼休み──俺、愛あい香か、トゥアールの三人は、ツインテール部部室で昼食をとっていた。しかし、皆テレビに映るニュース番組に気をとられて食があまり進んでいない。
『最近様々な場所でツインテイルズを見る、という報告が相次いでいます。ですが、テイルレッドが壁に落書きをする、道にごみを捨てるなどしていることから、悪質な偽者であるとして、警視庁は注意を呼びかけ──』
　アナウンサーが「ツインテイルズを見る」……つまり、見た目だけはそう見える、と言っているのが気になった。
「どういうことだ……エレメリアンの奴やつら、物真似に限界を感じて俺たちの精巧なホログラフかなんかでも映してやがるのか？」
　俺たちが戦ってきた偽ツインテイルズは、単におかしな格好をしているエレメリアンに過ぎない。一般人がツインテイルズと見間違えるぐらいだとすれば、そいつらとは別に立体映像を投影でもしなければとても無理だ。
　何せ奴らは、武器以外の物真似クオリティが壊滅的だ。毎日毎日しぶとく続けているのに、進歩する気配がひとっ欠片かけらもないからな。
　一方で、目撃証言が増えているのに、その姿が全く撮影されていないのも不自然だ。
「何にせよ、ここらで本格的に潰つぶしておかないとまずいわよ。今のところ被害は落書き程度で済んでるけど、世間の反応を見て徐々にエス

カレートしていくかも」
「そうですね。レッドたんの姿でエッチなことでもしだしたら、取り返しがつかないことになります」
　トゥアールの発言に突っ込まないということは、愛香もその可能性を想定してるんだろうか……。
『──エレメリアン、出現しました。分析結果……ハデスギルディです』
　とぅあるんが起動し、のほほんとした声で恐ろしいことを言ってくる。
　ハデスギルディ……明らかに神の一剣ゴー・デイア・ソードの幹部格であるあいつが単独でやってくる以上、俺たちとの決戦を望んでいるのだろう。部室内に緊張が走る。
「とても昼休み中には終わらないだろうな……。桜さくら川がわ先生に根回しをお願いするか」
　授業中にエレメリアンが出現し、俺と愛香、トゥアール、学年は別だが慧え理り那なが一斉にいなくなる時は、この学園の教師である桜さくら川がわ先生に誤ご魔ま化かしてもらっている。
　トゥアールは生徒会室にいる慧え理り那なと桜川先生、そして歌の仕事でスタジオにいるというイースナとメガ・ネにも連絡。俺たちは、転送ロッカーから地下基地へと急いだ。

◇

　ハデスギルディがいたのは、物静かな川かわ縁べりの高架下だった。
　俺とブルー、イエロー、ブラック、メガ・ネは、揃そろって着地し、周囲を確認する。
　……まるで人ひと気けはない。静寂そのものだ。
　俺は、決戦への覚悟で身を引き締めた。

一歩踏み出す度たびに足元で鳴り響く砂利音が、否が応おうでも緊張感を高めていく。

「待ちたまえ。今日は君たちと戦うつもりはない」

ハデスギルディは、近づく俺たちに手を突き出して制止してくる。機先を制するように、予想外の言葉を投げかけてきた。

「戦うつもりはないだと⁉　それじゃあ、お前の目的は何だ‼」

「もちろん、『ツインテイルズ真ま似ねっこ大作戦』の一環だよ。私は凝り性でね、一般兵たちの物真似クオリティを底上げしたいのだ。そのために、もっと生の君たちと語らいたくてね」

この落ち着いた声で真面目に変な作戦名を言われるのも、違和感があるな。

だがそうなると……さっきニュースで言ってた精巧な偽者ってのが、こいつの差し金である可能性が高くなってきたぞ。こいつが俺たちの前に現れた時期と、そっくりな偽者が目撃されるようになった時期も一致するしな。

『周囲に他のエレメリアンの姿はありません。これから援軍が現れるのか、それとも本当にハデスギルディ一体で、おしゃべりしたくて来ただけなのか……』

基地で分析しているトゥアールも戸惑っているようだ。

「そういえば君たちには、まだ私の属性が何かを話してはいなかったね……私の属性の一つは、擬人化属性パーソニフイ。君たちもよく知るものだと思う」

ハデスギルディは、あっさりと自分の属性を明かした。

だけど今こいつ、属性の一つって……？　いや、複数属性を持つ敵はもう珍しくはないが、そんな奴やつらでも自分の核となる属性だけを誇るのが普通なんだが……。

「どんなとんでもない変態属性が来るかと思ったら……擬人化属性パー

ソニフイ？　よくわかんないけど、大したことない感じでよかった……」
　安あん堵どの溜ため息いきをつくブルー。腋わきとかヘソみたいな部位系属性の方が嫌なんだろうな。
　しかしむきになって反論することもなく、ハデスギルディは物腰柔らかに言い含めた。
「そのとおり、大したことはない……普通だよ。だが、だからこそ素晴らしいのではないか。王道とは王の道。そして擬人化とは……冥めい王おうの道なのだよ」
　一理ある。一般的で広く知られた属性こそ、極めるには一ひと方かたならぬ努力が必要なはずだ。
「君は実感していないだけだ。人は同じ人を愛し、歴史を育はぐくむ……。だがあらゆる異世界でどんな科学、どんな文明が発展しても、やがて人が辿たどり着くものは同じだ。それこそが──」
「擬人化だと仰おつしやるんですの……？」
　怪け訝げんに答えるイエローに、ハデスギルディは満足げに頷うなずく。
「この世界の人間も、とうに擬人化の魅力に取り憑つかれているだろう。植物に動物、乗り物、架空の生物……兵器に至るまで、あらゆる物を擬人化し、愛めでている」
『確かに……ゲームやアニメ、漫画などに限らず、さほどエンタメに興味のない層の日常にまで広く擬人化は浸透しています。それが擬人化だと自覚することもなく、です』
　トゥアールが通信で解説してくる。
「様々なものをヒトに見立てる空想は、もの知らぬ赤子の創造力を豊かにし、寂しい年寄りを慰なぐさめる……。ゆりかごから墓場まで生命いのちを見守る、素晴らしい属性だとは思わないかね？」

そう言われれば、幼い子供が読む絵本などは果物や動物が人格を持って人間と楽しく遊び、語らう。それも立派な擬人化だ。
擬人化は、子供の養育に一役買っている。
俺たちに馴な染じみ深いサメのゆるキャラのメガネドンも、擬人化の一種と言えるだろう。
「擬人化属性パーソニフイこそが、心の終着点……人類が辿り着くべき最終属性なのだ」
声高らかに属性への愛を語るハデスギルディ。
ブルーはげんなりし、イエローは困惑しているが……気になるのは、ブラックの様子がおかしいことだ。
先ほどからハデスギルディを見て、何かを考え込んでいるようなのだ。
「擬人化の力──その一端をお見せしよう」
ハデスギルディはどこからともなくりんごを取り出し、手の平の上に載せた。
瑞みずゞみずしく赤らむ、ごく普通のりんごだ。
ハデスギルディはそのりんごを、唐突に空へ放り投げる。そのまま万有引力の理ことわりに則のつとって落下してきたりんごが突とつ如じょ、宙に縫ぬい付けられたかのように静止した。
俺たちは一瞬目を見張ったが……それだけだ。
こんな手品紛まがいのことが、神の一剣ゴー・デイア・ソードの幹部であろうハデスギルディの真価なのか？
「これが、どうしたっていうんだ」
聞くのもアホらしいが、俺は皆の戸惑いを代表して質問した。
「君たちには見えぬか、りんちゃんが」
ハデスギルディは寂しげに目を伏せる。
「りんちゃんだと⁉」

「そう、りんちゃん――本名は伊い甲こう賀が凛りん。私立永えい応おう茂も瑠る学園に通う一四歳中学二年生。身長一四五㎝、体重四四㎏。スリーサイズは上から七八、五二、七九。すぐにほっぺが赤くなることから、友達からは〝りんごちゃん〟というあだ名をつけられている。からかわれるのは好きではないが、果物のりんごは大好き。学校では美術部に所属しており、成績も平々凡々、ちょっぴり家庭科が苦手な普通の女学生で通っているが、その正体は戦国時代から密かに受け継がれてきた忍の一族の末まつ裔えい。現代でも要人の暗殺などを請け負っているが、彼女は穏やかに暮らし、いつかお嫁さんになることを夢見ていた。鎖くさり帷かた子びらよりも可か愛わいいブラジャーが欲しいとお母さんにねだるが、くのいちにブラジャーは不要だと返されて喧けん嘩か中。一向に忍者修行をしようとしない娘に業ごうを煮やした父親は、任務を遂行しなければ学校をやめさせるとまで言い出す。暗殺でなければいいと渋々了承したりんちゃんに言い渡された初めての任務は、スマートフォン国内最大手メーカーでありながらその実、裏で兵器開発を営む大企業の会長の息子を色香で籠ろう絡らくし、情報を引き出すというものだった。その息子とはりんちゃんのクラスメイトの徳とく川がわ光こう太た郎ろう君。他の女子には人気があるが、りんちゃんはことあるごとに意地悪をしてくる彼を毛嫌いしていた。しかし任務だから仕方なく毎日彼を目で追っていくうちに、りんちゃんは胸に痛みを覚えるようになっていた。どうして胸が痛むんだろう、刺客に攻撃されちゃったのかな。こんなことならお母さんに鎖帷子をもらえばよかった。自分に嘘うそをつきながら日々は過ぎ、彼女はついに意を決して光太郎君の下駄箱に愛をこめたクナイを入れるのだった――」

　風のように爽さわやかな笑顔でそう締めるハデスギルディ。

　俺たちの心には、得も言われぬ暴風が吹き荒れていた。

「い、色々言いたいことはあるけど……まず、何でりんごが宙に浮いて

るんだよ……!?」
「深みのある妄想は物理法則をも支配する……私の強大な妄想によって限りなく現実に近い一個の生命いのち、一個の人格が完成し、りんごを核とした人間が擬似的に形成されたのだ。君たちにりんちゃんが見えていないだけで、りんごの浮いているここは心臓の位置──」
　恐る恐る質問した俺にハデスギルディは矢や継つぎ早ばやに言葉を繰り出し、
「ハート、さ」
　締めにイラっとするウインクをしてくる。お前説明になってねーだろそれ。
「私は君たちのツインテールが一揺れする間に、これだけのプロフィールを完成させた。これこそが……擬人化だよ」
「………………これ、久々にマジでヤバい奴やつが来たんじゃないのか」
　俺は、敵の変態性を見誤っていた迂う闊かつさを、今さらながらに痛感する。
　かつて戦ったフォクスギルディみたいな妄想家が取り返しがつかないところまで来ると、こんな奴になるんだな。
「架空の人名どころか、学校名まで瞬時に考えついているのが恐ろしいですわね……」
　イエローも動揺を隠せないでいるが、ブルーは別方向への怒りで眉まゆを顰ひそめていた。
「あたし、いちいち義務みたいに女のスリーサイズをキャラプロフィールに組み込む創作者は全員血祭りに上げたいのよね」
　多くのクリエイターが日本から消えてしまう……。
　そういえば、まだブラックが押し黙ったままだな。こういう変態には、いつもブルーと一緒になって激しく言い返してるのに。

「その妄想……もしや、あなたは……」
　俺が振り向くと、ブラックはハデスギルディを凝視してわなわなと震ふるえていた。
「あなた……いや──お前は！　我わが師、デスギルディ……⁉」
　ついにブラックは、確信したように言い放つ。
　どうやら、組織にいた頃ころ面識のあったエレメリアンのようだ。
「フッ……やっと気づいたようだね。私の姿がかなり変わったせいもあるが、君はあの頃、エレメリアンたちと全く目を合わせようとしなかった……よほど怖かったのだろう。君は技の覚えが早く、私は期待していたのだが──まさか、アルティメギルを出しゆつ奔ぽんしてしまうとは」
「くっ……お前こそ、あの頃はそれほど饒じよう舌ぜつではなかったであろう……！」
「君にダークグラスパーの名を授けたのも、この私だったね……」
「いや、それブラックちゃんが普通に考えたもんやで」
　ハデスギルディの改かい竄ざんを見み逃のがさず、鋭く訂正するおかん。
　黙っていれば、妄想で記憶を捏ねつ造ぞうする油断のできなさだ。
　しかし、こんな穏やかな空気でブラックの宿因が明らかになろうとは。
　そう言われればブラックの幻覚技は、どことなく擬人化に通じるものがあるな……。
「テイルレッドよ、私に師事したブラックを見たまえ。今やどこに出しても恥ずかしくない、立派な変態だ。擬人化は変態を育はぐくみ、世界を豊かにする。変態はいいだろう……？」
　なんて自負心に満ち溢あふれた眼めだ。これだけ迷いなき形相で、変態へと誘いざなってくるとは……。
「妄想とは、〝女〟が〝亡〟くとも〝想〟えると書く……。人がいない

状態で一つの愛が完成する、貴とうとき在あり方だ。擬人化こそが、生物が手にした原点にして頂点の妄想なのだ‼」
　だがいくら高尚に語ろうと、こいつが求めているのは──変態だ。常識人ではない。
「さあ、さすがにそろそろ君たちにも見えてきたはずだ」
　ハデスギルディが指し示したりんごに再び視線を移し、俺たちは驚きよう愕がくした。
「何ッ……りんちゃんが本当に見える⁉」
「ほっぺが赤いですわ！」
「クナイ持ってるのじゃ！」
「ブラジャー買ってもらえないところだけは同情するわ」
　奴やつの語ったとおりの人物像で、俺たちにもりんちゃんがはっきりと見えたのだ。
「けどこの子、ツインテールじゃないのか。くのいちならツインテールの方がよくないか？」
　俺は理り路ろ整せい然ぜんと奴やつのキャラ付けに反論する。語ったプロフィールの中に髪型がなかったのは、大きな減点対象と言えるだろう。
「うん、飲み込みが早いぞテイルレッド。その調子で私の教えを吸収したまえ」
　やべえ、こいつ隙すきを見せると勝手に我わが師になろうとしてくるぞ。
「これが擬人化の力……。ってことは、最近世間を騒がせている見た目がそっくりな俺たちの偽者は……お前の差し金か‼」
　俺の確信を受け、ハデスギルディは満足げに首しゅ肯こうする。
「私は人間の前に姿を見せていない……。しかし、どこからともなく響く〝私の朗読〟を聞いた人間たちが、まことしやかにテイルレッドの姿

を思い描いたのかもしれないね……」
　言ってしまえば、声を聞いた人間全てにブラックのセラフィックインフィニットを適用できるということじゃないか。応用範囲が莫大すぎるぞ……！
「テイルシルバー。君もどうかな、一つ、美少女になってみないかね？　せっかく可か愛わいらしい声をしているのに、無骨な見た目なのは勿もつ体たいない──」
　ぎくりとしてたじろぐメガ・ネ。
　こいつの信念に理解を示しかけていた俺だが、それが今はっきりと拒絶に変わった。
「やめろ！　メガ・ネは心のある女の子だ！　そこに妄想を上書きするなんて、貴様の勝手なエゴでしかない!!」
　俺はメガ・ネの前にかばい出て、神の傲ごう慢まんを断罪する。
　俺だって道ゆく人を心の中でツインテールにしてみたりするが、それはあくまで自分の脳内だけ、個人で完結させねばならない。こいつのように人に押しつけ始めたら、アウトなんだ。
「レ、レッドちゃん……ありがとな」
　安あん堵どするメガ・ネを見届けたブラックは、ハデスギルディへと決別するように叫んだ。
「さすがじゃレッド……。ハデスギルディよ、学ぶがいい。貴様は確かに妄想力はすごい……だが、あまりにも独り善がりよ！　テイルレッドのこういう行動が、モテる秘訣じゃ!!」
「ふふ、君が私に講義をする時がやって来るとはね……嬉うれしいよ」
　嫌味ではなく、愛弟子の成長を心から祝福するような微ほほ笑えみだ。
「あー、テイルレッドちゃんだー！」
　橋の上から、声が届く。数人の小学生ぐらいの女の子たちがこちらを

覗のぞいてきていた。
　人が集まってきたことで、ハデスギルディは撤退を決意したようだ。背後に極彩色の転送ゲートを出現させる。
「君たち四人の妄想力の程は、この目でしかと見せてもらった。これで完成を見るだろう……次に会う日を楽しみにしているよ、また変態アデユー」
　そうしてハデスギルディは、有無を言わさず転送ゲートの中に消えていった。
　激しい戦闘に備えていたが、本当にただ会話するだけで終わっちまったな……。
『変態講義に聴き入ってないで構わず倒せばよかったじゃないですか、ブルー』
「さすがにあたしも警戒するわよ、あんな穏やかな変態!!」
　ブルーも奴やつの雰囲気に呑のまれていたらしい。
「擬人化属性パーソニフイを持つ戦士が、わたくしたちのデータを収集……」
「ああ。嫌な予感がするな……」
　俺はイエローの懸念に同意する。
　そうこうしているうちに、橋の上で見ていた女の子たちがこちらまで下りてきていた。
「ねえねえ、テイルレッドちゃんの誕生日が二月二日って本当？」
　女の子の一人に、ピンポイントでそんな質問をされる。
「えっ、何で知ってるんだ!?」
「こらっ……」
　驚きのあまり素直に答えた俺を、ブルーが窘たしなめるように肘ひじで小突いてきた。
「きゃー、やっぱり本当なんだー！」

「みんなでお祝いするねー!!」
　それだけ聞いて満足したのか、女の子たちは嬉うれしそうに手を振りながら帰っていった。
「……あたしもエレメリアンの挑発に乗ってうっかり個人情報を口走ったりする時あるけどさ、さすがに誕生日はまずいわよ……」
　自分も口を滑らせた経験がある負い目からか、ブルーの注意も語調が優しい。
「でも噂自体はとっくに流れてて、あの子たちはただそれを確認しただけみたいだったぞ？　俺、そんなこと一度も言った覚え…………ないとはいえないけど……」
　ギャラリーにもみくちゃにされて質問攻めにあったことなんて、数え切れないぐらいあるから……うっかり口にした時があったのかもしれない。それがいつかは全く思い出せないが。
「俺たちのデータを収集してんのは、何もアルティメギルだけじゃないってことか……」
　俺はハデスギルディとの対たい峙じで疲れた身体からだに、さらに悩みを上乗せするのだった。

◇

　ひどい変態にあてられた疲労で、その夜は気絶するように寝入ったはずなのだが……気がつけば俺は、宇宙空間を彷徨さまよっていた。
　ロエルたちの夢通信や精神世界は宇宙に似た薄暗い場所なことが多いが、ここはまさに宇宙空間そのものだ。
　その証拠に、周囲に星々が、眼下には地球が見えている。
「総そう二じ……」
　光が人の形を取り、ソーラとなる。彼女は哀しげな目で、こちらを見

てきた。
　よく見ると、二人とも裸だ。淡く光って輪郭がぼやけているとはいえ……これは困る。
　よく見ないようにしておこう……。
「──言ったよね、総そう二じ。戦い続けるなら……私にも考えがあるって」
「もちろん、忘れちゃいないさ」
　しかし、タイミングが悪いことに、ソーラが忠告をしてきた頃ころからちょうど奴やつらの真ま似ねっこ作戦が始まったんだ。とても俺だけ休んでいられるような状況じゃない。
「それじゃあこの前、ツインテイルブレスが発動しなかったのは……」
「うん、私。でも、総二が本気で力を求める時は、もう私でも抑え込めないけどね……」
　あれはソーラなりの忠告だったってことか……。
「それで、今は？　今度は俺を、ここに監禁でもするのか？」
　俺の力を封じられることは、仲間の危険に繋つながる。焦しよう燥そうから、少し語気を強めてしまった。
「違うよ。総二に、本当のツインテールの歴史を知ってもらいたいの。そうすれば総二は、戦い続けることの虚むなしさを知るはずだから」
　ツインテールの歴史……？　望むところだぜ。
　大学に進んだら、何を差しおいても専行したいと思っていたんだ。
「ソーラ。もう、思わせぶりなことだけ言っていなくなるのはやめてくれ。ここで、全部話してくれないか。その上で、俺は全てを受け容いれる。約束するよ」
　ソーラは全てを諦あきらめ……いや、全てを覚悟したように俺を見つめ、静かに語り始めた。
「総二の考えたとおり。私は、ツインテールの女神だよ」

「やっぱりそうか……」
「普通、こんなこと言っても信じるはずないのに……私が打ち明ける前からそう予想してるなんて、ホント総二はツインテールだよね」
「よく言われるよ」
　正月に神しん堂どう神社で見たツインテールの壁画が決定打となったが……その前から想像はしていた。ツインテールの女神は存在しているのだろう、と。
「──最初に女神わたしは、宇宙てんと地球ちを創造つくった……」
　創世記そのままに語られる、厳おごそかな神話。
　しかしソーラの口くち許もとが誇らしげに微笑を湛たたえていたのは、そこまでだった。
「そして二日目に……ツインテールを結んだの」
　最も誇るべきツインテールの章で、声こわ音ねが一気にトーンダウンしてしまう。
　気になった俺は、次を急せかしてしまった。
「三日目に、何をしたんだ？」
「……それで終わりだよ」
「何ッ!?」
「女神わたしは、気が遠くなるぐらい長い時間を、一人で過ごしていた。ある日、どうしようもなく一人が寂しくなって……髪の毛を二つに結んだの」
　ソーラは自分のツインテールを手で掬すくい、哀しげに見つめた。
「きっと、一つが嫌で……二つを求めたんだ」
　もちろんソーラにとっての一日二日とは、俺たちでいう一つの時代の区切りのような途方も無い時間だろう。
　彼女が「二日目」に至るまでに、どれほどの孤独に耐えてきたか。そして、耐えられなくなったのか。

　超越存在ではなく、心ある一人の女の子であるからこその行動だったのだ。
「女神わたしはね、何もしていない。ただ宇宙を作り、ツインテールという髪型を創った。それだけなの。……そしてそれが、過あやまちだったのかもしれない」
「そんな……宇宙を作っただけで、ツインテールを創っただけで、すごいことじゃないか!!」
「確かにツインテールは可か愛わいい。でもね……ツインテールは、ただの髪型なの」
　これまでもソーラが俺に強く言い含めてきたことだ。
　ツインテールが、髪型であることを忘れてはならないと。
「髪型の、はずだったのに……私の行動は全て、世界にも影響してしまう。宇宙そのものがツインテールの特性を得たことで、女神わたしでさえ予期せぬ進化が始まってしまった」
　しかし彼女の思いとは裏腹に、ツインテールは独自の道を歩んでしまったようだ。
「最初、世界は一つだけだったの。けどその一つの世界が、まるでツインテールを結ぶように二つに分かれてしまった。その二つも、それぞれ一つが二つに。二つに、みんな二つに……。世界はツインテールの特性で、無限並列パラレルの枝分かれを始めた。異世界の生まれた瞬間よ」
「宇宙が……ツインテールになったってことか……」
　俺のいる世界も、トゥアールの故郷も。ロエルの異世界も……全てはツインテールの名の下に結ばれた、元は同じ世界なんだ。
「後は、総そう二じに語ったとおり。属性力エレメーラが生まれて、エレメリアンが生まれて……。ツインテールはただの髪型だって、産みの親がそう言ってるのに……。世の中って得てしてそういうふうにできてるのかな。私の手を離れて、ツインテールは最大の争いの種になってし

まった」
　そうしてソーラは、悲痛な語らいを続けた。自分が見てきた、数え切れない悲劇を。
　エレメリアンとの戦いの果てに己の無力を痛感し、ツインテールを愛したことさえ後悔し敗北していった、無数のツインテールの戦士たちの悲しみを──。
「わかったでしょ？　私がツインテールを結ばなければ、こんなことにはならなかった……。総二はこれ以上、ツインテールなんかのために戦う必要はないの!!」
　ついに、瞳ひとみに涙を湛たたえてそう結ぶソーラ。
　ツインテールの女神がツインテールを愛するなと諭さとすことが、どれほどの苦しみか。
　俺はその戒いましめを受け入れまいと大きく頭かぶりを振り、ソーラを見据すえた。
「ツインテールを結んだだけなら、なおさら君が気に病むことなんてない。エレメリアンがいなくったって、動物は他の植物や動物を……生命いのちを食べて生きてきた。ツインテールっていう存在がほとんど世界に認知されていなくても、人間は争いを繰り返して歴史を紡つむいできた」
　ソーラの語る神話という名の歴史と比べると、俺の知る歴史なんて取るに足らないちっぽけな時間の積み重ねかもしれない。
「誰だれが悪いわけじゃない。ましてや君とツインテールは何も悪くない。世界はただ、生きるために戦い続けてきたんだから」
　それでも怖おじることなく言いたい。人の歩んできた歴史に、ソーラの責任はないのだと。
「だったら俺は、始まりなんてどうでもいい。誰かの責任なんてどうでもいい。今、エレメリアンっていう怪物が人間の心を奪おうとこの世界

を侵攻してきて、俺たちには戦う力がある。それだけで十分だ」
「……そっか。そうだよね、総そう二じは……守るために戦っているんだもんね……」
「言うことを聞かなくてごめん。でも、ツインテールの歴史を知ることができてよかったよ。ありがとう、ソーラ」
「ずるいよ、総二は……。誰にでも優しいんだもん。私、わがままを言って総二を困らせただけなのに……」
　ソーラは涙ぐみながら、声を震ふるわせた。
　彼女がそのツインテールに載せてきた重責の、ほんの僅わずかでも俺がともに背負えたら。心からそう思う。
「最後に一つ、教えてくれ。テイルレッドは……やっぱり、君が幼い頃ころの姿なのか？」
「そう、大切なことがまだだったね……」
　やはり俺にとってもっとも気になることの一つは、果たして俺とソーラはどのような繋つながりなのかということだ。
　ソーラは俺のことを見守ってくれていると話していたが、何な故ぜ、一介のツインテール好きに過ぎない俺に……普通の人間の俺に、女神が興味を持ったのか。見守るようになったのか。
　それを知りたい。
「私はエレメリアンと同じ。この姿で生まれて、成長することなく、この姿のまま役目を終えた。だから私に幼い姿なんてないの」
「じゃあ俺は、君の遠い子孫か何かなのか？」
「言ったでしょ、私は一人きりだったんだよ？　赤ちゃんなんて、産めなかったもん……」
　俺はかける言葉を持たなかった。
　そして裏を返せば……同じように、次代に思いを繋げないという孤独を感じているエレメリアンも、いるということなんだろうか……。

「総そう二じがソーラになった時は私の身体からだだったけど……テイルレッドは、あくまで〝君が理想とするツインテールを体現する姿〟。だから、何も気にする必要はないんだよ」

　トゥアールは自分の趣味だと言っていたが、テイルレッドのあの姿はやはり俺のツインテールの意思そのものがもっとも強く影響しているのか。

「君は君だよ、総二。つまらない宿命に縛られてるわけでも、血塗られた運命に囚われているわけでもない。ただツインテールが好きなだけの、普通の男の子なの。……だからこそ私は、君を見守りたいって願ったんだよ」

「つまり、俺が物珍しかったって、それだけで……？」

「ふふ……総二。君はね、自分で思っている以上に、おもしろツインテールさんなんだよ。女神さまが、思わずまじまじと見ちゃうぐらいに」

　俺は思わず苦笑する。よしてくれよ……ソーラ。

　俺なんて、どこにでもいるただのツインテール好きさ。

「俺のツインテールは……〝普通〟だ。そうだろ？」

「何それ、さすがにそんなのツインテールの真理にならないよ？」

　俺とソーラの身体を包む輝きが、光量を増していく。

「話せてよかったよ、総二。私と君の繫つながりが消えてしまう前に、いつかまた逢あおうね……」

　名な残ごり惜おしむ言葉を返す間もなく、俺たちは光の中へと消えていった。

◇

　そうして精神世界でソーラと別れた後、俺は自室で目を覚ました。

　俺の力が強くなったせいで、ソーラは無理をして逢いに来ていると言ってたからかな……。いつかは、二人でああして話すことができなくなる日が来るのだろうか。
　仄ほのかな寂しさを覚えつつベッドから上体を起こし、嘆息する。
　何気なく横を向くと、ツインテールと目が逢った。あ、こんにちは。
　──よく見るとそれは、俺と同じように上体を起こした、ソーラだった。

「もう逢あってるじゃねえかあああああああああああああああああああ!!」
「きゃ──────裸────────────っ!!」

　ソーラとばいばいしてから数秒で、自室で再会してしまった。
　それはいいが、俺もソーラも、裸でベッドの上にいるのだからパニックにもなる。
　しかも俺は、電気を点つけっぱなしで寝たらしい。互いの姿が丸見えだ。
「いつかまたって言ってただろ、何ですぐ、現実世界に実体化してるんだよ!?」
「わかんない、私も何が何だか……！」
　ソーラは掛け布ふ団とんを掻かき抱いだき、俺もその布団の端はしだけを摘つまんで下半身だけ隠させてもらった。
　そうだよな、裸を見られたら女の子は恥ずかしいんだよな。
　事あるごとにこうして実感しないと、そんな常識を忘れてしまいそうだけれど。



「そもそもいつも学生服着てるくせに、どうして今日は裸だったんだ⁉」
「歴史を語るから、その方が様になると思ったんだもん！　ピカーって光らせて目立たないようにしてたでしょ⁉」
　どういう理屈で俺まで強制全裸なんだよ⁉
「お前もたいがい中二病だな……かっこつけで裸になるなよ！」
「何が中二病よ！　総そう二じ、女の子の裸に慣れてる感じする！　そうだよね、女の子の裸たーくさん見たもんね、温泉で！　総二の浮気者っ‼」
「だから何だよ浮気者って⁉」
　朝六時──俺は目覚まし時計の時間を見て、言い知れぬ不安に襲おそわれた。
「わかった、とにかく服を着てくれ。こういう時限りなく一〇〇に近い九九％の確率でこの部屋に現れる子が──」
　バン、と勢いよく開け放たれるドアの音に、俺の言葉は遮さえぎられた。
「何なのよ毎晩、そーじの部屋から不穏な気配しかしないからつい来ちゃうんだけど⁉」
　俺たちを見るやいなや、愛あい香かは瞳ひとみから光を失ってしまった。
　一〇〇％パーでいいよな、もう……。
「説明してちょうだい、そーじ。あと五秒以内に納得いく答えを聞かなきゃ……多分あたし、地球を破壊しちゃうと思う」
　女神から宇宙の始まりを聞いた直後に、地球滅亡の危機を迎えるとは……。
「わ、私は、総そう二じのツインテールだよ‼」
　俺が母なる地球に別れを告げようとしていると、ソーラが咄とつ嗟さ

にそんなことを口走った。
「えーとね、擬人化属性パーソニフイのエレメリアンの影響で、一時的に実体化しちゃったの!!」
　え、そうなの？　と俺が視線を送ると──ソーラはウインクで「合わせて」と返してきた。
　……アドリブかよ、すげえ。
　俺の心にいるツインテールはもう少し……いやかなり、いぶし銀な感じなんだけどな。
　ベッドの上に裸の男女がいて、男が女に「早く服を着ろ」と急せかし、それを目撃したもう一人の女に向かって必死に言い訳をしている。
　何だろう今の状況、あらためて俯ふ瞰かんするだけで気絶しそうになるんだが。
「そーじの、ツインテール……？」
　握り締めた地球破壊拳を下ろし、愛あい香かはまじまじとソーラを見つめる。
「ホントだ、よく見るとソーラじゃない」
「いや、よく見なくてもソーラだろ⁉」
「うん、ソーラだよ!!」
「はー、びっくりした……。そりゃりんごが人間に見えるんだもん、そーじのツインテールが人間として実体化しても不思議はないわよね……」
　さすがにツインテイルズとして一年近く戦ってきただけのことはあり、愛香もエレメリアン絡みの怪異だと言われればあっさりと受け容いれられるようだ。
「事情はわかったから、何か服を着て。そーじのツインテールだろうと女の子の姿をしてる以上、裸は駄目だからね」
　愛香はクローゼットを開け、下段にある収納ボックスからシャツを出

そうとする。
　すると今度はトゥアールが、煙が立つほどの速度で部屋の中にカッ飛んできた。
「ソーラちゃんがいるじゃないですか!?　しかも裸で!?　しかも総二様も裸で!?」
　そして今の俺とソーラの姿を見るや、目を輝かせる。
「ああ、これは私のスランプを見かねた神様の贈り物ですね！　存分に英気を養わせてもらいますよ！」
「か、神様なら、貧乳さんに、ち○こ、蹴けられてました、けど……」
「うわっ、イースナ!?」
　収納ボックスを物色していた愛香が、クローゼットの奥から出てきたイースナに驚く。
「両方いただきトゥア――――――――ル!!」
　その隙すきにトゥアールは、先日倒したカエルのようにがに股でぴょーんと飛び跳ねた。そのまま俺とソーラに向かって迫ってくる。
　愛あい香かはノールックで斬ざん撃げきのように鋭い回し蹴げりを放ち、それを迎撃。
　がに股の体勢のまま、トゥアールは部屋の壁にめり込んだ。
「ひいっ！　人が！　壁に！　埋まってるよお!!」
「ああ、いつものことだぞ」
　俺を信じられないというふうに見てくるソーラ。
　遥はるか昔に見慣れてしまったんだが、やっぱ女神から見ても変か、この光景……。
「おはようございますわん……ええっ、何な故ぜソーラさんが!?」
　口調こそ普通だがすでに首輪を装着した慧え理り那なが、部屋に入るやソーラを見て驚く。
　いや、やっぱり口調も若干変だった気がする。

「もーっ！　総そう二じの部屋って、女の子がいっぱい集まって来るよーう！　どうしてーっ!?」
「俺もずっとそう問い続けてきたんだよ……だけど誰だれも答えを教えてくれなかった……!!」
　今日も、騒がしい始まりを迎えることとなった。
　しかし擬人化属性パーソニフイの影響じゃないなら、ソーラは何故実体化したままなんだ……？

◇

　大ホールを目指して廊下を歩いていたスワンギルディは、憎きマーメイドギルディの声が聞こえてきたことで貌かおを固くした。
　しかし、曲がり角を曲がろうとしたところで彼女が誰かと会話をしているのだと気づき、つい壁に身を寄せて隠れてしまう。
　こっそりと様子を窺うかがう。マーメイドギルディは廊下の奥で、白いローブをまとったエレメリアンと話をしているようだった。まるで、恋人が肩を寄せ合うかのような距離感だ。
（妙に仲なか睦むつまじく見えるが──相手は神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士だろうか？）
　気配を殺し、二体の会話に耳をそばだてるスワンギルディ。
「承知した。では、私の能力で四体の〝素体〟を作り上げる。後は、君の好きにするといい」
「協力してくれて助かるわ。この基地のコたちじゃ、あれは使いこなせそうにないから」
　会話の内容は不明瞭だが、残存混成軍のエレメリアンたちを実験台に何かをしようとしていた気配は感じ取れた。やはり、「ツインテイルズ真ま似ねっこ大作戦」は止めるべきだった。

　固く拳こぶしを握り締めるスワンギルディは、続く言葉に唖あ然ぜんとさせられた。
「君はもう、長くは生きられないのだろう。しっかりと戦果を挙げることだ」
「はいはい、ここらで、どーんとやっちゃいますよっと」
（長く……生きられない……マーメイドギルディが!?）
　不意に、マーメイドギルディが芝居ったらしく体をくねらせ始めた。
「あん……ハデスギルディ君、近づきすぎよ。ダーリンが勘違いしちゃうでしょ？」
　マーメイドギルディに挑発するような視線を向けられ、スワンギルディはとっくに気づかれていたのだと悟る。何事もなかったように進み出て、姿を晒さらした。
「私は貴女あなたのことなど何とも思っていません。それより本当なのですか……長くないとは」
「本当よ。嬉うれしい？」
　死ぬという事実を何の感慨も無く肯定され、スワンギルディは言葉を失う。唖あ然ぜんとして立ち尽くす彼に、フードを下ろしたハデスギルディが近づいていった。
「変態値、八万三千……。生き真ま面じ目に見えるその実、よく変態修行を重ねてきたようだね」
「あなたは……」
　急に何ですか、とは言えない。白ローブの戦士は、一応皆格上の戦士なのだ。
「私はハデスギルディ。彼女とは旧知の仲だが、今は単なる協力者だよ」
　まるで昔は何かあったような言い方だが、ハデスギルディはスワンギルディの小さな動揺など包み込むかのように、穏やかな声で続けた。

「ドラグギルディは素晴らしい戦士だった。戦いくさ女め神がみが、神の一剣ゴー・デイア・ソードへと何度誘っても袖そでにされたと嘆いていたな。それだけの戦士の忘れ形見であるという君が頂点まで上がってきてくれれば、私も嬉しいよ。元、神の一剣ゴー・デイア・ソードの私で悪いがね……」
　どうやらこのハデスギルディも、アポロギルディと同じく元神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士のようだ。
　ハデスギルディは、ＵＳＢメモリ大の何かをスワンギルディに手渡した。
　水晶のように輝くそれは、アルティメギルで使われている記憶装置の一つだ。
「神の一剣ゴー・デイア・ソードのみに伝わる──五大修練最後の一つ。その概要が入っている」
「！」
　スワンギルディは息を呑のんだ。フェニックスギルディですら全てを知らず、一つだけ空白となっていた五大修練に、このような形で出会うとは……。
「私はメロゲイマ・アニトゥラー程度なら悠ゆう々ゆうと極きわめたが、これはその私でも少し癖くせがあると思う、難しいものだよ」
「あ、あの自分で書いた創作物を他者に読み上げられる恐ろしい修練を……!?」
「余裕ができたら中を見てみたまえ。生なま半なかかな覚悟で挑戦すれば、骸むくろとなるがね」
「ハデスギルディ殿……」
　ハデスギルディは優しく頷うなずくと、その場を去って行った。
　威圧感があるのに、父性にも似た雄大さも感じる。今までの軍団長たちとは、また違う魅力を持った戦士だ。

「そっかあ。スワンギルディ君、最終闘体になるために鍛たん錬れんしているんだったわね？　ねえねえ、どんな姿になるのを想像しているの？」
　マーメイドギルディにからかうように頬ほおを指で突かれ、むっとするスワンギルディ。
「フェニックスギルディ殿が、私の背に翼が見えると仰おつしやいました。私もそんな姿を夢見ています。あの方にいつかまた会うその日に、晴れ姿を見せるのが今の目標です」
「………………そう。見せられるといいわね」
　妙に含みのある笑顔を向けられ、スワンギルディは怪け訝げんな表情になる。
「翼、か……。スワンギルディ君は看護服属性ナースの戦士だから、さしずめ白衣の天使ってところかしら」
　しかしマーメイドギルディのこの意見には、はっとさせられた。
　白衣の天使……その言葉で、全てのピースがカチリと填はまったように思える。
「ま、私には縁のない世界だけどね～。属性への愛を高めに高めた先に待つ姿なんて」
　人柄はどうあれ、ここ最近、マーメイドギルディの言葉に感じ入ることが増えたのも事実。
　だからこそスワンギルディは、むきになって反論してしまった。
「貴女あなたにも、男子愛属性ボーイズラブという立派な属性があるではないですか！　何な故ぜその魂たましいを尊とうとび、真まっ直すぐに邁まい進しんしようと思わぬのです!!」
　熱く詰め寄るスワンギルディとは裏腹に、マーメイドギルディは興きよう醒ざめしたように苦笑して言った。
「その魂が……妥協案だから、かな？」

「妥協……とは？」
「一番の愛を捨てた後に残った妥協の愛に、懸命に縋すがっているだけよ。私も……多分、あっちの科学者さんもね。似た者同士みたい、私たち」
　マーメイドギルディはスワンギルディを横切り、凛りんとした面おも持もちで去って行った。
「あちらの科学者……まさか、あの仮面ツインテールなる少女が……？」
　廊下に一人取り残されたスワンギルディは、幾度と目にした少女の姿を思い出す。
　悲しみを仮面で隠して無理に奮ふるい立っているかのようなあの少女が、悪魔の科学者と同じだとはどうしても思えなかった。
　あるいは──マーメイドギルディが悪魔という先入観の方が、間違っているのだろうか。

◇

　俺の家のリビングのソファーには、珍しい〝来客〟が座っていた。
　陽よう月げつ学園高等部女子制服に身を包んだソーラだ。俺の部屋を物色していた時と同様、物珍しそうにリビングを見渡している。
　俺と愛あい香か、トゥアール、慧え理り那なにイースナ、そして母さんが彼女を囲むようにしてそれぞれソファーやクッションに座り、登校前の朝の時間を過ごしていた。
「ソーラの制服、唯ゆ乃のにあげちゃったけど……新しく作ってくれたのか？」
　俺はトゥアールに小声で質問する。
「エレメリアンが袖そでを通した制服なんて、二度とソーラちゃんに着

せられませんからね。あれはもうずっと結いわ翼ばね唯ゆ乃のが着続ければいいんです」
　棘とげのある言葉の中にトゥアールの唯乃への優しさを感じ、俺は心が温かくなった。
「まあまあソーラちゃんが実体化するなんて！　ずっとここに住んでいいのよ!?」
「あはは、ほんとに少しの間だけなので……」
　さすがの女神さまも、娘にするように接してくる母さんにたじたじだ。
「こ、これが、総そう二じさんの、ツインテール……。可か愛わいい……」
　イースナは子犬でも愛めでるように、ソーラをじっと見つめた。
「ありがとう、イースナちゃん」
「あ……」
　ソーラに名前を呼んでもらって嬉うれしいのか、イースナはお近づきの印にとエロゲーをプレゼントし始めた。
　お前アイドルやってるんだから、そこは自分のＣＤとかでいいじゃないか……。
「うふふ～、いいことは重なるのね～！　見て見て、みんな!!」
　母さんは小躍りしながらリモコンをかざし、ＴＶの電源を入れた。
『【速報】　テイルレッドちゃんの誕生日、確定』
　そう書かれたテロップを大写しにした画面で、リポーターが小学生にマイクを向けている。
「え……え……？」
　俺は慌あわててテレビに駆け寄った。見覚えのある子が映っていると思ったら……昨日ハデスギルディと戦ってる時に来た、あの小学生ぐらいの女の子じゃないか！

　そして映像が切り替わり、テイルレッドが「えっ、何で知ってるんだ⁉」と誕生日について口を滑らせてしまったあのシーンが映し出されたのだ。
「あの一瞬で動画撮影して言げん質ち取ってたのかよ⁉　小学生が⁉」
　映像提供者は俺に話しかけてきたあの女の子だと説明されていた。この国の未来を担う子供がエレメリアンに匹敵するほど隠し撮り慣れしていることに、戦せん慄りつを覚える。
『私は何かを成し遂げたとは思っていません。世界中の人たちの聞きたいことを聞けたのが、たまたま私だっただけです』
　その子もその子で、昨日とは打って変わって大人びた態度でコメントしてるし……。
『これまで曖あい昧まいな情報だったテイルレッドちゃんの誕生日が確定したことで、世界は祝福ムード一色。二月二日までの数日間、この熱狂は続くと思われます』
　満面の笑顔でそう締めるスタジオＭＣ。
　母さんは嬉しくて仕方がないというふうに俺の肩をベッシンベッシン叩たたいてきた。
「すごいじゃない！　世界中が総ちゃんの誕生日をお祝いしてくれてるわよ‼」
「世界中から祝われてるのは総そうちゃんじゃないからな⁉」
　俺は震ふるえる手でリモコンを操作し、チャンネルをザッピングしていく。
　当然のように、全チャンネルがテイルレッドの話題ばかりだ。
『祝日法に基づき、二月二日は「テイルレッドちゃんの日」として国民の祝日になる見通しで……』
『今までテイルレッドに関する祝日ができていなかったのが、不思議なくらいですからね』

　真面目なニュースでは、新たな祝日制定について話し合われており。
『テイルレッドたんの健すこやかな成長にー！　捧げー！　銃つつーっ!!』
　別のチャンネルでは、兵隊さんが画面狭しと整列してライフル銃を一斉に構え。
『二月二日も、我われら人類の独立記念日なのだ!!』
　さらに別のチャンネルでは米国大統領の声高らかな宣言が字幕で表示され、ノリノリな民衆たちが自国の名を叫びながら拳こぶしを衝つき上げている。
　独立記念日って、こんな気軽に新発売していいものだったっけ……。
「な……何でこんなことに……」
　俺はリモコンを取り落とし、力無く項うな垂だれた。
「そりゃ世間からすれば超特ダネでしょ、レッドの誕生日なんて……」
　愛あい香かは予想がついていたようで、やれやれと肩を落とした。
「……わぁ……」
　そしてソーラは、目まぐるしく変わるＴＶの映像を見て目を輝かせている。
　彼女にとって珍しいのは、画面に映る今の世界なのか……それとも、ＴＶというごく普通の家電製品なのか。どちらにせよ、何を見ても反応が新鮮だ。
「そうですわ……！　観み束つか君のツインテールであるソーラさんも、誕生日は同じということになりますわね!!」
「えっ……わ、私？」
　慧え理り那なに急に話題を振られ、狼狽うろたえるソーラ。



「そうそう！　総ちゃんと、テイルレッドちゃんと、ソーラちゃんと……トゥアールちゃんと、イースナちゃん！　五人も同じ誕生日なんて、素敵じゃない!!」
　そうだな母さん、素敵だな……。この世界の熱狂は俺一人じゃとても背負いきれん。分散して、みんなにも背負ってもらおう。
「はぁ～、総そう二じ様と分離していてもやっぱりソーラちゃんですね、この小動物のような仕草……総二様がソーラちゃんになった時のことを思い出します！」
　ソーラをだらしない目で見ているトゥアールを牽けん制せいしていた愛香だったが、
「あたしたち、そろそろ学校行く時間だけど……ソーラはどうするの？」
　壁の時計を見て、ソーラに尋ねる。確かに、そろそろ家を出ないとまずい時間だ。
「もちろん、再びソーラ・ミートゥカさんと名乗って学園に編入していただきましょう!!」
　嬉うれしそうに両手を合わせ、そう提案する慧え理り那な。答えを聞く前に、決定事項のようだ。
　慧理那は部外者を俺の親しん戚せきってことにして編入させたがりすぎるよな……。
「ど、どうしようかな……。総そう二じが帰ってくるまで、ここで待たせてもらおうかな……」
「え？　来ないのか？」
　しかしソーラの答えは、煮え切らないものだった。俺は思わず聞き返してしまう。
「せっかく制服着ているんですから、行きましょう、ソーラちゃん！」
　トゥアールが両手でソーラの手を握り、急せかすように立たせる。

イースナもそれに続いた。
「い、行こう……ソーラ……。あの学校、部外者も、フリーパスだよ……」
「でも……」
「わ、私も、今日はオフだから……潜入して、見守る……。それなら、いいでしょ？」
　イースナは、まるで内気な子供を遊びに誘うように辛抱強くソーラに呼びかける。
　陽よう月げつ学園高等部は部外者フリーパスではないと思うが、まあ、今日はそれでいいだろう。生徒会長のお墨付きもあるわけだし。
「……わかった。じゃあ、行ってみる……」
　観念したように微ほほ笑えむソーラ。トゥアールたちは喜び、登校の準備を始めた。
　そして母さんに促うながされ、喫茶店の店内を通って外に出ようとした俺たちは、例によって店の常連客たちの熱い歓迎を受けた。
　店内は、誕生日まで数日あるというのに誕生パーティー当日さながらに飾り付けられている。
　クリスマスの一か月前から模様替えするデパートかよ……⁉
「フッ……めでたいね総そう二じ君。テイルレッドの誕生日が、君と同じだったとは──。これも、流る浪ろうする〝時〟の定めた運命なんだろうね……」
「え……あ、そ、そうなんですね……はは」
　お客さんの一人に祝福され、俺は冷や汗だくだくで答えた。俺の視線の先には、天井から垂れ下がった「観み束つか総二君、テイルレッドちゃん、お誕生日おめでとう」の垂れ幕が。
　息子の名前と正体を隠してるヒーローの名前を軽々しく一緒に並べないでくれ、母さん‼

「マスターから聞いたけど……総二君、誕生日当日は忙しいらしいね。僕たちはずっとここで君とテイルレッドちゃんを祝い続けるよ」
「ありがとうございます」
　流りゆう暢ちような日本語でそう言ってくる外国人のお客さんに、俺は礼を言う。
　カウンターの母さんに視線を送ると、笑いながら頷うなずいていた。
　確かに、いつハデスギルディがやって来るかわからない今の状況じゃ、誕生日当日にパーティーを開いてもらっても途中で出撃──なんてことが十分にありえそうだしな。
　それよりこの外国人さん、何かさっきＴＶで独立記念日を新設してたとても偉い人と同一人物に見えるんだけど……頼むから他人の空似であって欲しい。
「…………ふぅん。愛あい香か、また総くんに〝お友達〟の女の子が増えたんだ、いいわね」
「う、うん……そうなのお姉ちゃん」
　大学に行く前に店に寄ったのだろう、カウンター席で珈琲コーヒーを飲んでいた恋れん香かさんが、愛香に話しかけていた。恋香さんがソーラを見て鋭く眼めを細めたように見えたが、気のせいか。
　俺たちは慣れっこで店内を歩いていくが、ソーラが雰囲気に呑のまれて萎い縮しゆくしている。
「オイルフィールドアゲマス」
「ええっ……こ、困ります!?　私、どちらかというとマグマの方が馴な染じみが……!?」
　すっかり顔馴染みになった「どうしても油田あげたい人」に権利書を差し出されて困惑するソーラを微ほほ笑えましく見つつ、俺たちは喫茶アドレシェンツァを後にした。

◇

　テイルレッドの誕生日発表により、明らかに街が……世界が浮かれ調子なのが感じられる。いつもと違う熱気に溢あふれた通学路を、俺たちはソーラと一緒に登校した。
　そうして慧え理り那なの伝家の宝刀・臨時全校集会によって、ソーラ・ミートゥカが二度目の留学にやってきたことが全校生徒に伝えられる。
「うおおおおおおおおおおお、ソーラちゃんリターンズだあああああああああああ!!」
「テイルレッドたんの誕生日は判明するわ、お祭り続きじゃねーか!!」
　壇上で歓声を受けるソーラは、リアクションに困ったように苦笑いを浮かべていた。
　全校集会を終え、教室に向かう途中──俺と愛あい香か、トゥアールは、ソーラを伴って歩いている慧え理り那なに合流した。そこへ、こっそりイースナもやって来たのだが──
「うわっ、何ですかイースナ、その格好！」
　トゥアールが驚きの声を上げる。イースナはタイトスカートの黒スーツに身を包んでいた。
　朝、俺の家で言っていた、「潜入」のために変装してきたらしい。
「ソ、ソーラを、警護する……。これで、安心……」
　神眼鏡ゴッドめがねのレンズをスモーク状に変化させて、即席のサングラスにしている。
　ＳＰになりきっているのだろうが、イースナがスーツで決めると子供が背伸びしてるみたいですげー微ほほ笑えましい。
　今までイースナの変装といったら着ぐるみが関の山だったのに、友達のために一生懸命になって……イースナの成長が垣間かいま見みられる

こういう何気ない瞬間に、じんとするんだよな。
「ありがとう、よろしくね、イースナちゃん」
　こうして小ちっちゃなＳＰにガードされ、ソーラは俺たちの教室へと向かった。

「こういう場合はもう全部観み束つか君の隣でいいですねー、代わってあげてくださーい」
　俺の隣の席の男子に席替えを指示する、担任の樽たる井い先生。この人のテキトーぶりもいよいよ極まってきたように感じるぞ。
「じゃあ、教科書見せてね、総そう二じ」
　ソーラは遠えん慮りよがちに俺の隣の席に座る。
　唯ゆ乃のの時のように、また刺すような視線を送られるのかと思ったが、何な故ぜかクラスメイトたちは俺とソーラを交互に見て困惑したような表情を浮かべていた。
　前にソーラが編入した時は俺がいなかったから、並んでると違和感があるのかな。
　むしろ注目されているのは、教室の後ろに立つサングラスをかけた小さな女の子だ。
「あの子、闇あん子こちゃんにちょっと似てる気がするんだけど……」
「ち、違います……。私は善いい沙すな闇子ちゃんなんて、超絶美少女じゃ、ないです……」
　クラスの男子のひそひそ話に反応し、イースナはきっぱり（？）と否定する。
　イースナの認識撹乱装置イマジンチヤフは、アイドル善沙闇子がテイルブラックと同一存在ではないと秘ひ匿とくすることに特化してるから、こういう時は困るよな……。
　まあイースナと闇子じゃ雰囲気が全然違うし、案外バレないもんかも

しれないけど。
『ああ、またイースナちゃんがジャージじゃない服でおめかししとる……写真撮らな……』
　俺は何気なく窓に視線をやって驚いた。窓の外に、メガネドンの顔が覗のぞいていた。
　イースナが心配で授業参観しに来ちゃってるよ、おかん……!!
　休み時間、昼休み……何なら授業中のちょっとした教室移動の際にも、他のクラスからソーラの見学者が殺到してきた。特に女子は、遠えん慮りよなくスキンシップを図ってくる。
「ソーラっておとなしいから、お忍びでやってきたお姫様護衛してる気分……」
　剥はがしよろしく奮闘する愛あい香かの言葉は、言い得て妙だと思った。
「いっそ、本格的に護衛しちゃいます？　イースナには負けていられませんからね」
　そんなことを言っていたトゥアールは何と、自分と俺や愛香、慧え理り那なにもイースナと揃そろいのスーツを用意してしまったのだ。
　そして放課後──一人だけ制服姿のソーラを、スーツ姿の俺と愛香、トゥアール、慧理那、イースナで護衛し、校内を練り歩く。
「スーツを着ることはほとんどないので、新鮮ですわ」
　慧理那は恥ずかしがっているものの、どこか嬉うれしそうだ。腰のラインぴっちりのスカートに淡いグレーのストッキングは、見た目の幼い慧理那にはやはり背伸びに見えるが……。
　しかも、おもちゃの拳銃まで装備して、ＳＰになりきっている。
「いやぁちょっとサイズ小さかったですかね、ボタン外さないと苦しいです」
　トゥアールはスーツの下のシャツを第二ボタンまで外し、胸の谷間を

強調している。
「トゥアールさん、どちらかというと、女捜査官、みたい……。エロゲーとかの……」
「だそうです総そう二じ様、女捜査官トゥアールちゃんを好きに監禁してくださいね!!」
　何で女捜査官を監禁というワードとイコールで結ぶんだ……!?
「あたし、ヒールなんて履き慣れてないのよ……しかも校内で……」
　とか言いつつ、愛香はすげーサマになってるな。要人警護が絵になる。
　玲れい瓏ろうなスーツに身を包んだ愛香のツインテールを見て、俺はうんうんと頷うなずく。
「そーじも、スーツ姿キマってるね……」
「総二、スーツ姿キマってるね……」
　愛香とソーラは同時に俺にお世辞を言ってくると、互いの顔を見合わせた。
　全員でこんなコスプレする必要あるのか……と最初は思っていたのだが、結果として形から入るのは正解だった。
　基本的にノリのいい生徒たちだ、要人警護という設定に合わせるように、（俺の）ソーラの時や唯ゆ乃のの時のような大騒ぎではなく、静かに、そして情熱的にソーラを見守っている。
「すいません！　我われ々われがゆのゆのファンクラ部に変わったのは、一時的なもので！　浮気ではありませんので！　今日は初心に返って、ソーラちゃんファンクラ部です!!」
「自分で浮気だって思ってなくても、実際は浮気だっていうこともあるんだよ？」
　かつてのソーラちゃんファンクラ部代表が廊下で謎なぞの謝罪をするが、ソーラが珍しくピシっと言い返していた。痛いところを突かれたと

ばかりに、頭を抱かかえて蹲うずくまるファンクラ部代表。
「ＭＩＫＯＳＨＩに乗せたい……ソーラちゃんをＭＩＫＯＳＨＩに乗せたい……」
　ＦＵＮＤＯＳＨＩ姿の男子たちが、ゾンビのような表情で後ろからついてくる。
　彼らは何な故ぜ、編入生を担かついで廊下を練り歩くことにそこまで青春を捧げるのか。
「慧え理り那な……貴女あなたがそのように凛りんとスーツを着こなす日が……はあはあ」
　ちらっと背後を振り返ると、柱の陰から理事長がこちらを見ていた。
　慧理那もおかんがこっそり見てくれているようだ。……息が荒いが。
「ああ、とうとうお嬢様が友達の警護を……私は……私は……」
　そして桜さくら川がわ先生も、嬉うれしさと寂しさの入り交じった複雑な表情で慧理那を見守っている。
「……あっ、と……」
　俺の横を歩いていたトゥアールが、大きく身体からだをよろめかせた。愛あい香かが心配そうに尋ねる。
「ちょっと、あんたもヒール履き慣れてないの？」
「……え、ええ、ちょっとフラットしたみたいで……愛香さんの胸みたいに」
「すみませーんＤＩＹ研究会の皆さーん」
　愛香は廊下を歩いていたＤＩＹ研究会に前もって声をかけて壁の修復依頼を予約した後、トゥアールをフラットな壁に埋め込んで同化させた。
「トゥアールちゃん、体調がよくないみたいだけど……大丈夫？」
「最近ちょっと寝不足みたいで……よくこうなるんです」
　ソーラが心配そうに聞いてくるので、気恥ずかしそうに頭を掻かく

トゥアール。
「トゥアールちゃん。病は気から、だよ」
　ごく普通な励ましをするソーラを、微ほほ笑えましく見守っていたが──
「──心を強く持って。自分に自信を持って。そうすれば、どんなことだって必ず乗り越えられるから」
　その何かの核心を突くかのように真剣な面差しに、俺は目を奪われた。
「トゥアールちゃんの心は、今も輝き続けている……それを忘れないで」
　ソーラの瞳ひとみが、神こう々ごうしく、黄金に輝いて見える。
　愛香たちは……ソーラの変化に気づかず、会話も聞こえていないかのように、周りの生徒たちの対応をしていた。
「──あなたは……総そう二じ様のツインテールじゃ……」
　トゥアールも何かを悟ったのだろう、ソーラへと問いかけようとしたが……俺が二人を見ていることに気づき、誤ご魔ま化かすように手を振った。
　まるで、ソーラとトゥアールが会話をしている一瞬だけ、二人が周囲の空間から切り離されたように虚うつろに見えたのは……俺の気のせいだったのだろうか。
　そうして色々な教室を巡って、グラウンドに出て運動部を見学して……。
　お忍び姫のささやかな校内行あん脚ぎやを、俺たちＳＰは全力でサポートした。
「……これが、いつも総そう二じが見ている景色なんだね……」
　ソーラは慈いつくしむように校内を、そして学生たちを見ていた。瞬まばたきでシャッターを切り、目にした光景を一枚一枚写真に撮って、

大切に保存しようとするかのように。
　最後に部室棟を周り、ツインテール部部室へと案内した。
　一息つき、長机の椅い子すに座る俺たち。
「そしてここが、ツインテイルズの学校の活動拠点だね！」
　ソーラは何が珍しいのか、（実際にはトゥアールが改造しているとはいえ）見た目的には何の変哲もないそのパイプ椅子を撫なでたり擦さすったりしている。
「ソーラちゃんは、総二様と同じセキュリティ認証で部室も基地も通れるようです。気軽にどこでも見てくださいね」
「ありがと、トゥアールちゃん！　……あの時いっぱいおっぱい揉もまれたの忘れてないけど」
「えっ⁉　総二様がソーラちゃんになった時の感覚を共有しているんですか⁉」
　ソーラは俺が女の子の身体からだになった時のことを、やたら根に持ってるみたいだったからなあ。当然その時、スキンシップの激しかったトゥアールのことは印象に残っているんだろう。
「総二もあの時は、私のカラダでおトイレ行ってピンチを脱したんだよね……」
　ソーラは頬ほおを赤らめ、俺にだけ聞こえるような小声で囁ささやいた。
「見た目はソーラかもしれないけど、あれは俺の身体、そして俺の尿意だろ⁉」
　自分でも何を言ってるのかこんがらがってきたが、俺は小声で必死に言い訳をした。
　……さっき見た、神こう々ごうしいソーラとのギャップに戸惑いながら。
「明日もこうしてみんなで楽しみましょうね、ソーラさん」

　慧え理り那なにそう言われ、ソーラは寂しそうな笑顔を浮かべた。
「……みんな、今日は楽しかったよ！　突然現れた私に、こんなによくしてくれて……愛あい香かちゃん、トゥアールちゃん、慧理那ちゃん……それにイースナちゃん。本当にありがとうね!!」
　一二時に近づく時計を見たシンデレラも……こんな顔で王子に微ほほ笑えんだのだろうか。
　その笑顔を見て──慧理那も、そしてイースナも。みんな、何かを察したようだった。
「それじゃ最後に、屋上に行きたい！　総二一人だけで、連れてってくれるかな？」
　だからだろう。ソーラがそう言っても、誰だれもついていくとは言わなかったのは。

　ソーラと二人、屋上に到着する。俺はネクタイに指を差し入れて緩め、一息ついた。
「わあ、ここが屋上かぁ」
　普通、だと思うんだけどなあ。ソーラはやはり見るもの全てが珍しいようだ。
　唯ゆ乃のといいソーラといい、普段学校に慣れ親しんでいない子が屋上に来たがるのは、どういう魅力があるからなんだろうな。
　もっとも、同じ一日編入でも学園全部を巻き込んでハチャメチャに目立った唯乃と、静かに学校生活を見て回っただけのソーラは、真逆だ。
「今日はありがと、総そう二じ。生まれて初めて……学生気分を味わえちゃった」
　その言葉で俺は、ソーラがずっと遠えん慮りよがちだった理由にようやく思い至った。
　ソーラは、長い間世界を見守っていた女神だ。

　楽しい喧けん騒そうの只ただ中なかに身を置いても尚、ただ全てを見守る存在であろうとしてしまう。
　彼女は、哀しいまでに自分を部外者だと弁わきまえてしまっているんだ。
「なあソーラ。他にやりたいことはないか？」
「もちろん私……まだまだやってみたいこと、たくさんたーくさんあるよ？」
　眩まぶしそうに目を細めながら、太陽を仰ぎ見るソーラ。
「放課後にみんなとファーストフード店に寄って、おしゃべりをしたり……洋服を買いに行って、たくさん試着したいな。似合うかどうか、全部総二に聞くの。そうだ、イースナちゃんのライブも観に行ってみたい！」
　声を弾ませて、指折り願いを紡つむいでいく。
　夢と言うにはあまりに他た愛あいのない、ごく普通の願望だ。
「そんなに意気込まなくても、やろうと思えば今日にでも全部できるじゃないか」
　何ならイースナなんて、ソーラのためだけにライブを開くとか言い出すぜ。
「ちょっと、時間が足りないかな。私、あと一〇分しか実体化していられないから」
「────え……？」
　聞き間違いか、それとも残り時間という概念自体が間違っているのか。
　しかしソーラは俺の戸惑いを察したようで、寂しそうに説明を始めた。
「この世界に下りる制約、限界の時間なの。この世界の時間に換算すれば……全ての時間を合わせて、二〇時間。今まで総二の前で実体化した

時間と今日を合わせると……もうあと一〇分しか残ってないんだ」
　俺はてっきり、ソーラはけじめをつけるために学園に来るのは一日だけに留とどめておこうとしているのだと思っていたが……予想以上に深刻に、本当に時間タイムリミットが差し迫っていたのだ。
「じゃあお前、実体化した理由が自分でもわかんないっての、嘘うそだったのか？」
「総二とあまりお話しできなくなっちゃう前に……一緒に過ごして、思い出を作りたいって思って。裸で実体化しちゃったのだけは、ホントに予想外だったけどね」
「だったら──」
　今からでも遅くない、時間を節約しながら色々なことを楽しもう。
　喉のど元まで出かけた言葉を、俺は呑のみ込んだ。
　詰め込むだけ詰め込んだ余裕のないスケジュールなんて、この娘は望まないだろう。
　今日、今まで過ごしてきた何気ない時間。放課後の屋上で穏やかに語らうこの瞬間。
　それらも全て、ソーラが「やりたかったこと」なのだろうから。
「……だから、あと一〇分は取っておいて、大切に使うね。ちょっとずつ総そう二じに会うか……それとも、さっきのお願いの一つだけでも、思い切って叶かなえちゃおうかな」
「そうだな。何でも言ってくれ、いつでもつき合うからさ」
　女神さまの気き紛まぐれの漫遊、エスコートなら任せてくれ。
　俺は着慣れないスーツで精一杯、騎士が姫にするように仰ぎよう々ぎようしくお辞じ儀ぎをしてみせた。
　そしてソーラはそれを労ねぎらうように、スカートの裾すそを摘つまんで持ち上げる。
「それじゃあ、また逢あおうね、総二。みんなによろしく──」

あっさりと光の中に消えていくソーラを、俺は笑顔で見送った。
唯ゆ乃のがここで過ごした騒がしい時間とどうしても比べてしまい、本当にソーラが楽しめていたか不安だったけど……最後のあの笑顔を見れば、それは杞き憂ゆうだったようだ。
今度こそ、振り返ったらやっぱりいた……なんてことはないだろうな？
屋上に降り注ぐ太陽の光が、今日も心地ここちいい。
エレメリアンの偽者騒動に悩まされる日々の中で、まさに俺たちの心を癒す温かなお陽様の光だったな、ソーラは。

キャラクター名鑑 040

デスギルディ



DATA

- 身長：219㎝
- 体重：198㎏
- 属性力：擬人化属性（パーソニフィ）+(?)

ハデスギルディが最終闘体となる前のかつての姿。この頃は今と違い寡黙だったが、面倒見がよく紳士的な変態なところは同じで、アルティメギルにまだ馴染めていなかったイースナを指導し、精神干渉系の技を伝授するなどしていた。ダークグラスパー時代のグラスギアのヘッドパーツが彼の頭部を模していることからわかるように、イースナに与えた影響は少なくなかったようだ。

第五章　邪悪あくのツインテール。

　俺の誕生日……つまり世間にとってはテイルレッドの誕生日を明日に控え、盛り上がりも最高潮に達しようとしていた。
　スーパーやデパートのテイルレッド誕生日セールは言うに及ばず、国単位で仕事を休みにするところまで出たらしい。
　真しん偽ぎは定かではないが、レッドを祝いに宇宙人がやって来たとＮＡＳＡが公表したという。
　俺が目を引かれたのは、ブルーインパルスならぬ、赤で塗装された戦闘機部隊レッドインパルスが編隊を組んで空にツインテール型の残跡を描く、見事なアクロバット飛行だ。
　ＴＶでその映像を見た瞬間、俺は我われ知らず敬礼を切っていたほどだ。
　そんなお祭りムードの一方で、偽ツインテイルズ出現記録もついに昨日ストップし、ニュースでもぱったりと報道されなくなった。下手をすれば、目撃はされているが偽者と断定されているそいつらはもうどうでもよくなっている可能性すらある。
　このまま何事もなく俺たちの誕生日が過ぎてくれ──と願っていたのだが、そうは問屋が卸さなかった。
『ハデスギルディ、現れました。この前と同じ単独で、人ひと気けのない場所です』
　学校から帰宅し自室に入った直後、トゥアールからそう連絡を受けた。
　高クオリティな偽ツインテイルズを産み出した犯人と発覚した、ハデスギルディ。それが再び現れたということは、今日こそ奴やつらの目的が明らかになるだろう。

向かった現場は、本当に周囲に人っ子一人いないような殺風景な岩場だ。ここならば、途中で人が集まってくることはないはずだ。
俺とブルー、イエロー、ブラック、メガ・ネは、その岩場の中心で待ち構えるようにして悠ゆう々ゆうと立つハデスギルディを視認する。
人間の多い場所を襲撃して自分で属性力エレメーラを奪おうとはせず、部下の作戦を手助けするに留とどめているのは、強者ゆえの余裕なのか。
「はぁ～い」
そんな硬質の緊迫感を帯おびた戦場を、気の抜けた声が弛緩させた。
「……マーメイドギルディ⁉」
俺は戸惑いの声を上げる。ハデスギルディの横に極彩色のゲートが出現したかと思うと、マーメイドギルディがひょっこりと姿を現したのだ。
「ハデスギルディ貴様、どういうつもりじゃ！」
「どういうつもりも何も……私はマーメイドギルディに協力しているのだよ」
にわかには信じがたい。ハデスギルディは変態でエゴイストなところはあるが、一方でマーメイドギルディの使う卑ひ怯きような手段は忌いみ嫌うような、高潔な印象を持っていたのだが……。
「いや、うまい手を考えたね。テイルレッドの誕生日をあえて公表し、世間を祝福ムードにするとは……世界がここまで浮かれている中では、ハイクオリティな偽者をどれだけ暗躍させたところで、何の効果もない。『ツインテイルズ真ま似ねっこ大作戦』は、事実上の失敗だよ」
何を買い被かぶっているのか、勝手に俺たちを讃たたえてくるハデスギルディ。そうか、こいつらがそう判断したから、偽ツインテイルズの出現がぱったり止やんだのか。
「お……おう。俺たちの作戦どおりだ」

　一連の偽者騒動では苦労させられたので、せめてそう強がっておく。
「それでも、おかげ様でデータは十分に集まったわ。失敗に終わったんじゃなくて……今日、ここで完成するのよ……『ツインテイルズ真似っこ大作戦』は」
　マーメイドギルディは、口くち許もとに妖あやしい笑みを浮かべた。
「むんっ──」
　そしてハデスギルディは、厳しい顔つきで念を込める。
　瞬間、俺たちの眼前に、四体の黒いエレメリアンが現れた。
　ゲートを通ってきたのでもなく、属性力エレメーラが結晶するような様子もなかった。
　最初からそこにあったものが今唐突に見えるようになったかのように、それは突然目の前に出現したのだ。
「たった一個のりんごに情報を付加して人間として形成するほどの、ハデスギルディ君の強大な妄想力……それを私の莫大なデータと組み合わせれば、どうなると思う？」
「私の分身体を依より代にして、君たちのデータを擬人化したのだ。こちらで動かしやすいよう、見た目は統一したがね」
「こ、こいつらが……俺たちのデータ⁉」
　同じ黒一色でも、戦闘員アルテイロイドとは違いがっしりとした筋肉質の長身だし、肩当てのようなパーツもある。しかしそんな全身黒一色のこいつらの特徴といえば、ハデスギルディと同じ髑どく髏ろのような不気味な顔だけだ。
　そしてそれがかえって、不気味さに拍車をかけている。
　まるで冥めい府ふの神の使い──死神だ。
〈肯定。私たちは、ツインテイルズの戦闘データの化身〉
　四体のうち一体が、口を開く。ハデスギルディと同じ声をしているが、データの擬人化だからか、古めかしい機械音声のようにぎこちな

い。
「その戦士たちは、デスギルディ。最終闘体このすがたになる前の私、そのものだよ」
　アラクネギルディが、進化前の自分の姿──スパイダギルディを分身として使役したのと同じか。もっともあれはあくまで分身体、意思のない操り人形だったが、こいつらは違う。
「こんな、戦闘員アルテイロイドに毛が生えた程度ののっぺらエレメリアンなど、恐るるに足らぬわ！」
　自分の師のかつての姿を見てそう嘯うそぶくのは、決別の証あかしなのだろう。
　ダークネスグレイブを構え、目の前のデスギルディを凝視するブラック。
「ああ、待って待って、焦あせらないで。お楽しみはこれからよ？」
　マーメイドギルディは手の平大の転送ゲートを宙空に出現させ、中に手を差し入れた。
　取り出されたのは、文庫本程度の大きさと厚さの、謎なぞの装置。今まで偽ツインテイルズが使っていた武器をベースにしたようなデザインだ。
　それを全部で四つ手にすると、四体のデスギルディへと放り渡していく。
「変身自在武装・テイルチェンジャー。いいセンスしているでしょ？」
「テイル、チェンジャーだと……⁉」
　マーメイドギルディが嬉うれしそうに言ったその名前に、俺は胸騒ぎを覚える。
「あなたたちツインテイルズは、どれほど強大な戦士が相手だろうと打ち勝ってしまう。これ以上組織に犠牲を出すよりも──ツインテイルズの始末は、ツインテイルズにしてもらうのが合理的よね？」

瞬間、俺のツインテールが奇妙な嫌悪感に揺らめいた。見知らぬ誰だれかにすれ違いざまに勝手に髪を撫なでられたような怖おぞ気けだ。
　ブルーたちも全く同じ感覚に襲おそわれたようで、各々のツインテールを押さえている。
「お誕生日おめでとう、テイルレッドちゃん。これが私からの──誕生日プレゼントよ」
　デスギルディが手にしたその装置は、四辺が伸長して中の機械が露出した。
　それはまるで──テイルブレスが変身を開始する瞬間のようだった。

〈〈〈〈テイルオン〉〉〉〉

　軍隊のように統制された斉唱の後、四体の身体からだが激しく発光する。
　驚きよう愕がくする俺たちの前で、赤、青、黄、黒──ツインテイルズに対応した四色の光が爆裂し、中から装そう甲こうをまとったデスギルディたちが姿を現す。
　デスギルディたちがまとっていたのは、オレンジに近い、錆さびた色の装甲だ。
「そんな……」
　俺は言葉を失う。デスギルディは──ツインテールなくして、テイルギアをまとっていた。
　警察機構の特殊部隊が装備しているような、ジャケット型の胸当て。黒一色の肉体を彩いろどるアンダースーツに、手てつ甲こう、ブーツ。
　バックパックを背負っており、左腕にはテイルチェンジャーを装着している。
　ほとんど飾り気はなく、四体全てが同じデザインで統一されている。

事務的に識別できるよう割り切っただけのように、装そう甲こうの各所に赤、青、黄、黒のラインが走っている程度だ。
　しかし、近接武器として戦闘に役立つ程度には、ところどころが尖とがっていた。
　黒ラインの一体だけには、伸ばした六角形型のバイザーがある。おそらく、眼鏡めがねだ。
　シンプルに、そして合理的に。
　その設計思想は紛まぎれもなく、目の前の装甲が量産型であることを示していた。

〈私は冥めい府ふの赤、ローグギルディ〉
〈私は冥府の青、ベールギルディ〉
〈私は冥府の黄、ジェインギルディ〉
〈私は冥府の黒、ノワールギルディ〉

　気迫も込めず、淡々と名乗りをあげるのが、かえってぞっとする。
　一瞬、何でこいつらがツインテイルズの変身機構起動略語スタートアップワードを知っているんだ──と訝いぶかしんだが、唯ゆ乃のがマーメイドギルディの目の前でこう叫んで変身していたことを思い出した。
　それにブレスではなく武器を変身アイテムに使うのは、唯乃の専売特許だ。
　わざわざその方式を選んだところといい、マーメイドギルディの唯乃への執着を感じる。
「テイルギアＴＹＰＥ-Ｘ……私の科学の集大成よ」
「テイルギア──ＴＹＰＥ-Ｘだと⁉　明らかにテイルギアＴＹＰＥ-Ｐに当てつけた名前つけやがって、テイルフェニックスが黙っちゃいないぞ‼」

「ああ、それ？　商標権が消滅したから、いいかなって思って♪」
　俺の追及を飄ひようう々ひようと躱かわすマーメイドギルディ。何を言っているんだ、こいつは。
　唯乃がしばらく姿を見せないから、そんな図々しいことを言ってるのか……？
「そしてそれをまとった彼らは、名付けてイビルツインテイルズ……。本家のみんな、じっくりと堪能してちょうだい」
　マーメイドギルディが満足げに浮かべた薄ら笑いが、開戦の合図となった。
「来るぞっ!!」
　睨ねめ据すえる俺の視界から消えるように、イビルツインテイルズは散り散りに飛ひ翔しよう。自分の装甲のラインの色に対応したツインテイルズの前に降下する。
　まずイエローが動いた。ヴォルティックブラスターのトリガーガードに指をかけ、鮮やかに回転させる。そして力強くグリップを握り、銃口を突き出す。
　だが〝冥府の黄〟ジェインギルディも、それと全く同じ動きをしていた。
　イエローとジェインギルディは、互いの銃口をそれぞれの眉間に合わせて睨にらみ合う。
〈テイルレッド視認。戦闘を開始する〉
「────ッ……」
　誇らしげにテイルギアをまとう〝冥めい府ふの赤〟ローグギルディを間近に見て、俺は身体からだがかっと熱くなるのを感じた。言葉にできない苛いら立だちが、腹の底からせり上がってくる。
　小手調べなどいるものか。ハナから全力で叩たたき潰つぶす──!!
「完全解放ブレイクレリーズ!!」

俺はブレイザーブレイドを完全解放ブレイクレリーズし、二つに割れた切っ先から迸ほとばしる炎をローグギルディへと差し向ける。
それを見たローグギルディは、驚くべき行動に出た。
左腕に装着したテイルチェンジャーを外すと、これまでに偽ツインテイルズが使っていた武器と同じ要領で、剣型の武器に変形させてしまったのだ。しかも、それを──
〈イビルブレイド、完全解放ブレイクレリーズ〉
元より光波剣で形成された刃やいばを、さらに巨大化させて炎をまとわせるローグギルディ。
俺と寸分違たがわぬモーションで飛び上がり、そして──
「グランドブレイザーッ‼」
〈イビルブレイザー……‼〉
炎の剣同士が激突し、周囲に熱波を拡散させた。ブレイザーブレイドを握る手を、鈍い痺しびれが走る。
「ぬっ……技の再現度はテイルギアＴＹＰＥ-Ｘと無関係のはずじゃ……こやつらはデータで見ただけのツインテイルズの必殺技まで、完全に模倣できるというのか⁉」
ブラックは腕をかざし、俺たちの必殺技の熱から顔を護まもりながら叫ぶ。
「ッ…………」
あまりにも技と技の威力が拮きつ抗こうしすぎていて、俺は逆に違和感を感じた。
上皿天てん秤びんの左右を釣つり合わせるため、片方の分銅を少しずつ減らしていく……そんな繊せん細さいな作業を、刹せつ那なの一瞬でやり遂げたような。
俺の技を受けた後……いやその瞬間に、威力を同じに調節したように感じられたのだ。

　不気味だ。これが……データそのものと戦うっていうことなのか。
「あたしたちの技を研究してきたってわけね！　だったら、属性玉エレメーラオーブを使うまでよ!!」
　俺の攻防を見たブルーは、得意の属性玉変換機構エレメリーションでかき乱す戦法に出た。
「属性玉エレメーラオーブ──兎耳属性ラビット!!」
〈属性玉エレメーラオーブ使用確認。対応する──疑似属性玉変換機構イビルエレメリーション、始動〉
　ブルーと全く同じ速度、同じ高さまで跳躍する〝冥府の青〟ベールギルディ。
「こいつも、ジャンプ力強化してる!?　くっ……脚属性レツグ!!」
　驚きよう愕がくしながらも、脚力強化した蹴けりを繰り出すブルー。合わせ鏡のような動きで、ベールギルディも強化された蹴りを放ち、跳躍の最頂点で互いの蹴り足がぶつかり合う。
　その反動で宙返りし、二人は同時に着地した。
「必殺技や特殊技能だけではないぞ。ベールギルディ、解析開始だ」
　ハデスギルディに指示され、ベールギルディがその髑どく髏ろの目を発光させる。
　またブルーの変態値でも計るのかと思ったが、奴やつはとんでもないことを口にした。
〈テイルブルー、解析完了。バスト、七二。……カス〉
「ん!?」
〈理解不能。何な故ぜ、そんなに胸が小さいのか。理解不能〉
「うるっせえええええええええええええええええええええええええええええええ!!」
　こいつらの真価を曝あばこうとしていたブルーが、逆に敵の術中に嵌はまり暴走した。

〈──テイルブルー、暴走確認。こちらも暴走する〉
　ベールギルディの目から光線が照射され、空中にホログラフ映像が浮かび上がる。
　巨乳アイドルが悩ましげにポーズを取っている、グラビア写真だった。
　それを見たベールギルディの肩が震ふるえ始め、そして──
〈巨乳うぜえええええええええええええええええええええええええ!!〉
　咆ほう哮こうしたベールギルディは怒りのままに疾走。襲おそいかかってきたブルーの拳こぶしに自分の拳を打ちつけ、殴なぐり合いを始めた。
「あやつ、暴走機能まで搭載しておるのか!?」
「いるか、その機能!?」
　俺はブラックに突っ込むが、現にその機能でブルーと互角にやり合っているのも確かだ。
「暴走の再現は容た易やすい……何といっても、データの数が他とは違う。テイルブルーのお家芸として、アルティメギルの資料に山ほど蓄積されているからね」
　暴走するベールギルディを見て満足げなハデスギルディ。何も言い返せねえ……。
　巨乳への憎しみと巨乳への憎しみが、等しくぶつかり合っている。
　あんなことを続けていたら、その先に待つのは確実な破滅だ!!
「トゥアール……あいつらの能力を解析できるか……トゥアール……？」
　小声で通信するが、反応が返ってこない。必死で分析してくれているのだろうか。
〈いいツインテールだ……もっと見せろ〉
　剣で斬きりかかりながら、俺のツインテールを褒ほめてくるローグギ

ルディ。
　こいつ、行動が完全に俺だ……!!
　テイルギアＴＹＰＥ-Ｘの性能も底が知れないが、それ以上にそれをまとうデスギルディの地力がとんでもない。擬人化を極めた神の名は、伊だ達てではないということか。
「ハデスギルディ……これほどの力を持つお前が、何故マーメイドギルディに荷担する⁉　そいつは仲間のエレメリアンからも警戒されるぐらい、悪事を働きまくっている奴だぞ!!」
「清濁併あわせ呑のんでこそ神の度量……たかが一科学者の暴走も許容できずして、真の神とはいえないのだよ」
「わーお、めっちゃ言われてる」
　大おお仰ぎようにお手上げのポーズをするマーメイドギルディ。
「それに、私も興味があるのでね。ただひたすら欲望のままに邁まい進しんし、頂いただきまで達したエレメリアンが……一体どうなるのかを。それは、私たちにはできぬことだ」
　冥めい王おうの穏やかな態度に隠れた、得体の知れない好奇心を垣間かいま見みた気がした。
「技の威力は何とか再現できても、それはあくまで物理的な破壊力！　人形ごときには、精神攻撃は発動できまい！」
　ブラックは神眼鏡ゴツドめがねのブリッジを指で押し上げ、属性力エレメーラを集中させていく。
「属性力エレメーラの深しん淵えんに堕おちよ、絡から繰くり人形！　セラフィックインフィニット!!」
　神眼鏡ゴツドめがねから放たれた光が実体化し、複数のおっさんとなって〝冥めい府ふの黒〟ノワールギルディに立ちはだかる。
〈おっさん確認。迎撃する〉
　なんとノワールギルディは、筋肉ムキムキのおっさんたちに〈取って

こーい〉とフリスビーを投げ始めた。嬉うれしそうにフリスビーを追っていくおっさんたち。

〈今度はこちらの番だ。──イビルインフィニット〉

　鮮やかにおっさんたちをいなしたノワールギルディは、今度は自分の眼鏡を発光させた。

「そんな……使えるのか⁉」

　ブラックもまさか幻覚攻撃まで使われると思わなかったのだろう、ノワールギルディの放った光に取り込まれてしまった。

「イビルツインテイルズはデータなどなくとも、初めから精神攻撃を得意としている。なぜならば、テイルギアＴＹＰＥ-Ｘをまとっているのはかつての私──デスギルディなのだから」

　そうだ、こいつはブラックの精神技の師匠……その分身体が固有の能力としてそれを持っていても、何も不思議はない！

〈ブラックって、可か愛わいいわよね……〉

　おっさんではない。ノワールギルディが放った幻覚はテイルブルーの形を取り、ブラックへとにじり寄っていく。

「ぎゃ────────────やめるのじゃあああああああああああああ‼」

　ブルーに密着され、全力でもがくブラック。

　おっさんを見慣れているブラックにはむしろ、こちらの方がきついのだろうか。精神攻撃の練度は、師匠あちらの方が上だ……！

「まずい！　ブラックがブルーに襲おそわれてるぞ‼」

「誤解招くようなこと言わないでよレッド‼」

　やっと暴走を終えたようだが、おかげでブルーはかなり疲労している。自爆だ……。

　おかしい、こんな状況なら絶対にトゥアールが通信でツッコんでくるはずなのに……さっきから全く声が聞こえないぞ。

「ブラックちゃーん！　このっ……あいつらを止めさせてぇや！」
　メガ・ネが指のバルカン砲を斉射するが、ハデスギルディは手を掲げてバリアーのような力場を形成、軽々と弾丸を弾はじき返していった。
　さすがにメガ・ネ単機じゃ、神の一剣ゴー・デイア・ソードの幹部相手には分が悪すぎる。
「メガ・ネ、無理するな！　距離を取れ!!」
　俺は援護に向かおうとするが、ローグギルディに回り込まれてしまった。
　エンジンがかかってきたように、イビルツインテイルズの動きはキレを増していく。
　俺もブルーも、イエローもブラックも、その猛攻に後退を余よ儀ぎなくされていった。
「！　この剣けん閃せんは――」
　ローグギルディと斬きり結んでいるうちに、俺は気づいた。
　ドラグギルディの得意としていた……そして、そのおかげで俺も体得した極意、ツインテールの剣閃。
　ローグギルディの剣閃もいつしか、感情なきツインテールとして踊っていると。
「ふざけるなあああああああああああああああああああああああ!!」
　単にモーションキャプチャーされただけの、無機質な動き。心を感じない刃やいばの閃ひらめき。
　データの羅ら列れつでツインテールの剣閃を再現され、俺の怒りは頂点に達した。
　イビルブレイドを力任せに弾き上げ、ローグギルディの胸を蹴けり飛ばす。
　俺はほんの一呼吸の間断に、仲間の戦況を確認する。

　ブルーは、属性玉変換機構エレメリーションを用いた戦術にことごとく対応してくるベールギルディの動きに翻ほん弄ろうされている。
　ブラックはダークネスグレイブとダークネスウィップを切り替えながら応戦するが、ノワールギルディも全く同じ装備を形成して繰り出している。
　そしてイエローも、ヴォルティックブラスターを連射するも──
〈弾道は予測範囲内。イビルブラスター、斉射〉
　ジェインギルディは自身も銃撃を敢行、全てを撃ち落としてしまった。
「で、ですが……武器はともかく、わたくしの武装までは模倣できないはずですわ!!」
　そうだ。イエローは多彩な武器を一挙に起動し放つことのできる戦士。柔軟にあらゆる変形が可能なこいつらの携行装備でも、一度に複数の武器には変形できないはずだ！
　そんな淡い期待を嘲あざ笑わらうかのように、ジェインギルディの装そう甲こうが蠢動を始めた。
　腕から、肩から、胸から……光を凝縮して新たなパーツを産み出し、装甲に追加するようにして変形に対応。イエローの完全脱衣形態フルブラストモードを再現してしまったのだ。
　それぞれの形はかなり違う。背中の陽電子砲に至っては、ジェインギルディのものは長さ太さともにかなり貧弱に見える。
〈フルブラスト、スタート──〉
　しかしそこから放たれる光線、銃弾は、全てが同等の威力だった。
　爆光と爆光が。閃せん熱ねつと閃熱が。質量と質量が。
　止とめ処どなく激射される爆撃同士の激突で大地が抉えぐれ、周囲が土砂のスコールに見舞われた。
　イエローは武装を全脱衣パージするが、とてもはあはあできる状況で

はない。
　俺たちの焦しよう燥そうもいよいよ窮きわまった、その時だった。
〈理解不能。……なぜ、脱ぐ？〉
　ジェインギルディの動きが止まる。
　ブルーを煽あおった奴やつとは違い、今度は本当に相手の行動が理解ができないようだ。その動揺を表すかのように、イエローの全身武装を模した装備がボロボロと崩れ落ちていく。
〈防御力──変わりなし。自分を追いつめるため？　否。テイルイエローのメンタルは弛緩している〉
「そうか……婚活メイドがＡＩをバグらせたのと同じじゃ！　どれだけ高性能でも、そやつらはデータを擬人化しただけの人形、柔軟な思考ロジックを持っておらん!!」
　ブラックは敵の突然の動作不良を、桜さくら川がわ先生がした質問でとぅあるんがバグった理由と同じだと推察した。
「ふむ。テイルイエローが戦闘時に脱ぐというデータは搭載されているはずだが……それでもやはり、理解できないことは理解できないということか。感情を数値化する功罪だね」
　ハデスギルディもそう納得する。
　夥おびただしいデータ量で制御されているとはいえ、納得できない行動は警戒する。なまじ高度なＡＩのせいで、逆に融通が利かないというわけか。
　俺たちにとって、イエローの脱衣は自然の摂理といってもいい。
　そこに「どうして」を求めたジェインギルディは、思考の迷路に陥おちいってしまったんだ。
「私も聞きたい。テイルイエロー、君は何な故ぜ、せっかく着込んだ鎧よろいを脱ぐのだ？」
「正義のためですわ……!!」

　その明快かつ強い意思の輝きに、ハデスギルディの双そう眸ぼうが喜き悦えつの光を帯おびていった。
「……むう、テイルイエローの変態値が一二万八千まで上昇している……。どうやらツインテイルズの変態値は、状況に応おうじて変化するようだね。これは興味深い……」
「やった！」
　ブルーが喜んでいるのは、戦闘で逆転の兆きざしが見えたからだと思っておきたい。
「正義ねぇ。その定義を彼らに理解させることは難しいわ……代替理由をインプットして、もっともっと調整が必要ね……」
　マーメイドギルディが目配せすると、ハデスギルディが無言で首しゆ肯こうする。
　四体のイビルツインテイルズは同時に跳躍して集結し、整列。テイルチェンジャーを胸の前に構えて一斉に変身解除した。
　そしてデスギルディの姿に戻ると、役目を終えたように消えていく。
「今日は痛み分けというところだね、ツインテイルズ諸君。また変態アデユー──」
「また明日来るから、楽しみにしててね～♪」
　ハデスギルディとマーメイドギルディは、極彩色のゲートの中に消えていった。
　撤退に全く躊躇ためらいがない。逃げているという意識がないんだ。
　何がまた明日、だ。マーメイドギルディはもちろん、ハデスギルディにとっても、俺たちとの戦いは面白おかしく実験をしているに過ぎないってことか。ふざけやがって……！
「お手て柄がらじゃぞ、イエロー！　お前の脱ぎ癖ぐせのおかげで、助かったぁ……！」
　緊張感から解放され、ブラックは弱々しく尻しり餅もちをついた。そ

して天を仰ぎ、嘆息する。
「ああっ……わたくし、ご主人様を救うことができましたのね……!!」
　イエローは、俺の顔面に飛びつくように抱きついてきた。
「ありがとう、ありがたいから、離れて！　む、胸が……」
　今の露出度でこの密着はヤバい……!!
「ッ……許さないわよあいつ、あんな出来損そこないのあたしのクローンなんか作って……!!」
　イエローを俺から剥はがしながら、虚空へ怒気を撒まき散らすブルー。
「いや、めっちゃそっくりじゃったぞ。そっくりすぎてビビったぞ」
　ブラックはメガ・ネに引き起こされながら、イビルツインテイルズの完かん璧ぺきさにうなった。
　完璧だからこそ、俺は悔くやしかった。

◇

　地下基地に帰投し、変身を解除する俺と愛あい香か、慧え理り那な、イースナ。
　みんなのツインテールに、疲労の色が見える。俺も、ひどい顔をしているんだろう。
「……総そう二じさん、すごく、怖い顔、してる……」
　イースナが不安げに見てくるが、平静を装う余裕も今の俺にはなかった。
「あいつらは、一線を超えた。テイルギアまで模倣するなんて……やっちゃいけないことをしやがったからな」
　俺は憤りに任せて、廊下の壁を拳こぶしで殴なぐりつける。愛香に肩を叩たたかれて、コンソールルームへと向かった。

　ドアが開くと、トゥアールがメインモニターの前で立ち尽くしているのが見えた。
　やはりトゥアールも、テイルギアＴＹＰＥ-Ｘの存在には相当怒っているのだろう。
　しかしこころなしか、顔が青ざめているような……。
「□□□□□□」
　トゥアールの身体からだが、力無く揺れる。俺は咄とつ嗟さに飛び出していた。
「トゥアールッ！」
　その華きゃ奢しやな身体を抱き留とめ、慌あわてて呼びかける。
　愛あい香かと慧え理り那な、イースナとメガ・ネも、血相を変えて走り寄ってきた。
「……あ……そ、総そう二じ様……。寝不足みたいで、フラっときちゃって……。大事な戦いなのに、オペレートできなくてすみません……」
　健けな気げにも微ほほ笑えみかけてくるトゥアール。
「駄目だってば、具合悪いなら無理しないで休んで!!」
「あ、愛香さんにだけは言われたくありませんよ……筋肉痛でも絶対出撃するくせに……」
　肩から伝わるのは、か細い震ふるえ。
　俺はトゥアールの肩と足を持って抱き上げると、愛香たちに呼びかけた。
「みんな、トゥアールを部屋に運ぶから手伝ってくれ」
「ううっ……いいなぁ……って、不謹慎ね、さすがに……」
　何か言いたげだった愛香だが、速すみやかにトゥアールの部屋へと向かう。
「わかりましたわ！」

　そして慧理那、イースナとメガ・ネも、手分けして看病の準備を整え始めた。
　気疲れが重きを占めているんだろう。ゆっくり休んでもらわなければ。

　トゥアールを寝かしつけ、しばらくの間は全員で看病を続けた。その後は母さんと俺で交代で見に行くことにし、愛香たちには帰ってゆっくり休んでもらうことにした。
　俺は自室のベッドに寝転んで天井を見つめ、今日の戦いを思い出す。よりによって明日誕生日だっていうこのタイミングで、とんでもないものを持ち出してくれたもんだぜ。
　二月二日はもう、俺一人だけの誕生日じゃないんだ。穏やかに過ぎて欲しかった。
　トゥアールの様子を見に行く時間にはまだ早いが……ただ寝っ転がっていても落ち着かない。俺は勢いをつけてベッドから跳ね起き、地下基地へと向かった。
　しかし……トゥアールの自室までの通り道であるコンソールルームで、俺は足を止める。
　トゥアールはパジャマに白衣を羽は織おり、メインモニターの前で端末を操作していたのだ。
「トゥアール……まだ休んでろって」
「すみません。けれど、じっとしていられなくて……」
「いや……気持ちはわかるけどさ……」
　かくいう俺も、苛いら立だちとやるせなさが綯ない交まぜになり、休むどころではなかったのだから。
「あいつら、とうとうテイルギアまで真ま似ねしやがったからな。もう、『真似っこ大作戦』なんてのほほんとしたもんじゃないぜ……」

俺は中央の会議用テーブルに座り、大きく嘆息する。
トゥアールは俺に背を向けたままずっと作業をしていたが……やがて端末を操作する手を止める。静けさを破ることなく、弱々しい足取りで俺に歩み寄ってきた。
「どうしたんだ、トゥアール？」
何かを言いたげに俯うつむくトゥアールに、俺は努めて穏やかに語りかけた。
「……ごめんなさい……私、総そう二じ様たちにずっと隠していたことがあります」
トゥアールは、自室に運んだ数時間前よりもさらにやつれた顔で告白した。

「――テイルブレスオルターは、破壊されていません。マーメイドギルディに……盗まれました」

にわかには言葉の意味を呑のみ込めず、俺は呆けてしまった。
しかしそのままの意味だとわかると、椅い子すから立ち上がってトゥアールに詰め寄る。
「待ってくれ……だってブレスはあの時、粉々に爆発したじゃないか!?」
「それが擬装だったんです。私も、メデューサギルディとの戦闘映像を何度も見返さなければ、気付くことはなかったでしょう……」
トゥアールはモニターに戦闘映像を映し、その瞬間をスローモーションで表示した。
地面に転がったブレスの背後に、小さな転送ゲートが出現。中から腕が伸び、ブレスを掴つかんで……ゲートが消えた後、爆発が起こった。
確かに、マーメイドギルディがブレスを強奪する瞬間が、はっきりと

映されている。
「何てことだ。どうやってテイルギアの技術を入手したんだと思ってはいたけど、まさかここまで堂々と現物をかっ攫さらっていたなんて……」
「マーメイドギルディは、テイルブレスオルターからテイルギアのシステムを解析したんです。模倣武器を作り、そしてそのデータを積み重ね、ついにテイルギアそのものをコピーした……それがあの、ＴＹＰＥ-Ｘです」
　ツインテイルズの武器を嬉うれしそうに振り回すエレメリアンたちが、俺の脳裏に浮かんでは消えていく。あいつらは全員、マーメイドギルディの実験に協力させられていたんだ……。
「ここまでするか──って思うでしょう？　する相手と戦ってるんですね、私たち……」
　俺に真実を打ち明けて、やっと解放されたという思いからだろう。トゥアールは乾いた自じ嘲ちようの笑みを浮かべた。
「すぐに皆さんに打ち明けて、敵がテイルギアを模倣してくるかもしれないから用心しましょうと言うだけでよかったのに……ごめんなさい。私、認めたくなかったんだと思います」
「謝るのは俺だ。トゥアールの様子が変だなって思っていながらも……聞いていいかどうか、迷ってるだけだった」
　トゥアールには何の落ち度もない。むしろ、マーメイドギルディの暗躍を許し、ブレスを強奪されたのは、俺の責任でもあるんだ。
「私……何もかも忘れたくて、気づかなかったふりをしたくて……。基地を改造してみたり、部室を改良してみたり、片っ端ぱしから発明品を作ってみたりしましたが……駄目でした」
　心中を察するに余りある。
　武器を真ま似ねされて……ツインテイルズを真似されて……とうと

う、テイルギアまで。
　この数日間、俺たちが思う以上にトゥアールは恐怖を感じていたのだろう。背後から少しずつ迫り来るような、暗あん澹たんとした恐怖を。
「イースナがグラスギアをまとって私を追いかけてきて……結いわ翼ばね唯ゆ乃のは、ペガサスギルディの遺志を継いでもう一つのテイルギアをまとった。脅きよう威いではあったけれど、まだ私は大丈夫でした。だって彼女たちには、心があるから。テイルギアを使う資格があるから……」
　俺は眼めを細めて頷うなずいた。
「けれど、ついにエレメリアンが……ただの怪人がテイルギアをまとっているのを見て……私、目の前が真っ暗になりました」
　俺が戦闘中に感じていた、言葉にできない怒りの正体は、これだったんだ。
　テイルギアとの対戦はこれが初めてではない。だけど今まで敵としてそれをまとい立ち塞ふさがった奴やつらは皆、それぞれの正義があった。心の輝きがあった。
　だからこそ俺たちも、自分のツインテールを燃やして戦い抜いてきたんだ。
「心で振るうからこそテイルギアは強いのに……あいつらは、心さえもデータで代替して使役する……私が人生の全てを懸けたものが、あんなにもあっさりと再現されてしまう……」
　今回ばかりは、決定的に違う。
　敵は──心すら無機質に再現した、兵器だ。
「自分でもびっくりするほど、心が折れていくのがわかるんです。マーメイドギルディの思うつぼですね……」
　震ふるえを増していくトゥアールの声に、俺はやりきれない怒りを噛かみしめた。

　エレメリアンは人間の心を奪って生きる生命体だ。
　だから奴らの作戦は、人間の心を、戦う意思を折ることで完成するものばかりだ。効率がいいのだから、それに特化するのは当然のことだろう。
　しかしその中でも、マーメイドギルディの作戦は異質だ。
　正面から全力で砕き折ろうとするのではなく、相手にわざと軋きしみ音を聞かせながらじわじわと嬲なぶり折っていくような陰湿さを感じる。
　トゥアールは白衣の裾すそを力なく握り締め、俺に表情を見られまいとするように俯うつむいた。
「……こんな時、いつも思うんです。何で私には戦う力が無いんだろう……何で私は変身できないんだろう、って」
「…………」
「ツインテール属性を手放すのは、自分で選択したことなのに……馬ば鹿かですよね」
　そして弱音を吐と露ろする「こんな時」でも、君が欲するのは……「戦う力」なんだな。
　ツインテールになりたい、戻りたいとは……決して口にしないんだな……。
「っ……あ、ごめんなさい！　つまらない話ばかりして！　毎日ここで、一人で作業をしていると……余計なことばかり考えてしまって……駄目ですね……」
　俺が辛しん気き臭く黙り込んでいたせいだろう。トゥアールは、健けな気げに明るく振る舞い始めた。
　踵きびすを返し、スキップをしながらモニターの操作端末へと戻ろうとする。
『ある日、どうしようもなく一人が寂しくなって……髪の毛を二つに結

んだの』
　初めにツインテールを結んだその理由わけを、俺は聞いた。
　ツインテールではないという孤独を、俺は知った。
　だから……ツインテールにできない女の子を、せめて一人にしたくはなかった。
「──トゥアール」
「……!!」
　俺はトゥアールを、背中から抱き締めていた。



　一瞬身体からだを強こわ張ばらせたトゥアールだが……すぐに、俺の胸に背中を預けるようにして力を抜いた。
　しかし程なく、か細い力で俺を振り解ほどこうと身体からだをよじる。
「やめて総そう二じ様……それ以上優しくされたら……私、もう頑張れなくなる……」
「別に、優しくなんてしていない」
　俺はあえて、腕力でその抵抗をねじ伏せた。
　トゥアールを抱き締める腕に力を込める。
「違うんです……こうやっていじけて、総二様に慰なぐさめてもらうのを期待してただけ……私にそんな資格はありません……!!」
「逆に聞くけど、どうしてちょっと他人に甘える程度のことで罪悪感を懐いだくんだ？　何でそんなことにいちいち資格がいるんだ？」
　トゥアールの温ぬくもりが、厚い服を通してなお俺の身体に伝わってくる。
　熱っぽい吐と息いきも、腕に感じる。
　そして……彼女の小さな震ふるえも、俺の心へと響く。
「俺がツインテール属性を奪われた時、誰だれよりも親身になって俺を励まし続けてくれたのは、トゥアールだっただろ」
「それは……私は闘いで総二様を支ささえることができなかったからで──」
「それでも俺は、救われた」
「……総二様……」
「いいじゃないか、別に。根っからの武人のエレメリアンたちは、そんなものは弱さだって笑うかもしれないけど……俺は逆だと思う」
　愛あい香かにも言い聞かせたことだけど……仲間なんだ、もっと気軽に助け合えばいいんだよ。戦い以外の時でもな。

「これが俺たちの強さじゃないのか？　気軽に支え合えるって、大切なことだよ。ここまで好き勝手しているマーメイドギルディは……もし本当に助けが必要になった時には、きっと誰も手を差し伸べちゃくれないぞ」
　その時あいつは、必ず後悔することになると思う。
「孤独を誇ることは、強さなんかじゃない。ただの強がりだ」
　俺が確信とともにそう言うと、ようやくトゥアールは頷うなずいてくれた。
「――そうだろ、みんな？」
「えっ……」
　俺の呟つぶやきに驚いて、入り口に視線を向けるトゥアール。
　自動ドアが開く。愛香に慧え理り那な、イースナ、メガ・ネがそこに立っていた。
　俺はツインテールの気配がわかっちゃうからどうしても、な。
　隠れている必要がなくなった愛香たちは、揃そろって中に入ってきた。
「あたしたちがいるってわかってて、そんな大胆なことしたんだ。ふーん……」
「あ、これは……!!」
　愛あい香かにジト目で睨にらまれ、俺はトゥアールから離れた。
　励ましたい思いからとはいえ、女の子にちょっと大胆なことをしてしまったな……。
「ったく夜が更けるまで話し込みおって、慧え理り那ながおねむになってしもうたぞ!!」
「ふえぇ、大丈夫ですわ……」
　イースナは慧理那に肩を貸しながら、口を尖とがらせる。
「……トゥアールさんが元気になって、よかったですわ……」

　寝ぼけ眼まなこでも、トゥアールの心配をする慧理那。彼女は小さくても、みんなのお姉さんだ。
　夜の一一時過ぎか……確かに普段なら慧理那はとっくに眠っている時間だな。
　トゥアールを心配して残ってくれた厚意に、報いたい。
「……よし、それじゃあ今日はみんなここでお泊まり会でもするか！」
　俺は皆に向け、そう提案した。
「考えてみれば、俺たち全員で地下基地で夜を明かすなんて、今までなかっただろ？　ここさ、こんなに広いのに一度も合宿所に使わないなんて勿もつ体たいないぜ！　急だけど、ツインテール部の合宿ってことにしよう!!」
　会心のアイディアに思えたのだが、全員一気に静まり返ってしまった。
　あ、あれ……嫌だったか。慧理那なんて、合宿と聞いたら飛び跳ねると思っていたのに。
　やべっ、勢い込んで宣言して滑ってしまった。ティラノギルディかな。
「そ、そーじ、ここで……寝るの……？」
　何な故ぜみんな、もじもじしているのかな。
「５Ｐですか、初体験でそれは難易度が……いえ、腹を括くくります！　一番疲れるのは総そう二じ様なんです、私は総二様が何もしなくていいようにウゴオオオオオク!!」
「あんたは早速ストレートになりすぎなのよ!!」
　そう吐はき捨ててストレートを炸さく裂れつさせる世界チャンプ。
　トゥアールはテーブルの上を猛然と回転しながら吹き飛んでいった。
「まあ……た、たまにはいいかもね？　うん、親睦を深める意味でもね、うんうんうん」

ヘッドバンキングにも似た頷うなずきの連射で、愛香が宿泊に同意する。
「あの、わたくし観み束つか君の隣がいいですわ！　温泉の時は少し離れてしまいましたので!!」
「どうせお布ふ団とんの並びなんて関係なくなるのじゃ、スタート位置は大事かもしれんがのう」
「？」
イースナの呟つぶやきに慧理那が首を傾かしげる。俺もよくわからんな……。
「フフフ……」
自分の母親が忍者のように腕組みをして天井から逆さまにぶら下がっているような気配がして振り返ったが、そこには誰だれもいなかった。そうか気のせいか。
天井に、人一人が出入りできるような穴が開いているけど。
「えーとねお姉ちゃん、今日はそーじの家に泊まるから……いやいや違うって！　ひょっとしたらそんなこともあるかもしれないけど……え、あの子……ソーラ？　いないけど……」
「お母様……わたくし観み束つか君のお家にお泊まりを……ふぇ、二十五回？　何がですの？」
愛あい香かと慧え理り那なが、それぞれ家族に電話で泊まりの連絡を入れる。
「もしもしメガ・ネかー？　わらわわらわ。総そう二じの家にお泊まりしてくるからなー」
「了解やでー」
そして二人の真ま似ねっこをしたくなったのか、イースナもメガ・ネに電話をかけていた。
糸電話でもいけるぐらいの距離に、メガ・ネが立っているのだ

が……。
　それが終わるとイースナは、慧理那と一緒にトゥアールに歩み寄っていった。
「ホンットヘタレじゃな、なぁにが『優しくしないで』じゃ、きゅんきゅんしとったくせに」
「愛香さんならあの場面で大洪水でしょうけど、私はムードを作れる女なんですよ!!」
「次は何かあったら、遠えん慮りよなくわたくしに話してくださいましね！」
「ありがとうございます慧理那さん……あとこの人数だと慧理那さん一人で二十五回は総二様が干ひ涸からびると思います……」
　メガ・ネが人数分の布ふ団とんを一度に抱かかえ、コンソールルームに戻ってきた。
　イースナや慧理那と話しながら、その布団を敷いていくトゥアール。それが終わると、飛び跳ねながら愛香の側そばに近づいていった。
「ねえねえ愛香さん、覗のぞき見してたんですよね？　見ました？　見ました？　総二様が後ろから、こう！　私を抱き締めて!!」
　愛香の肩をべしべしと叩たたくトゥアール。
　素面しらふで酔っ払っているかのようなハイテンションだ。
「ふにって！　むにゅって！　総二様の腕で私の胸が潰つぶれてるのを、自分で見下ろせるんですよ！　感動的でしたよ!?　あはははははは愛香さんには無理っすなあはははははははは!!」
「そうね、あたしにできるのは全てが潰れたあんたを見下ろすくらいだわ」
「ぎゃあああああああああああああああああああああ蛮族の腕力で愛しき温ぬくもりが消えていくああああああああああああああああああああ!!」

愛香にこねこね（物理）されたトゥアールが、床に転がされる。
ほんの十数分前の彼女と並べて比較すると、あまりにも切ない。
「……ったく、現金なヤツね」
しかしそんなトゥアールを見下ろす愛香の目は、安あん堵どの優しさに満ちていた。
じゃあ何な故ぜこねこねするんだ……。

◇

「何で処女のままなんですか私はあああああああああああああああああああ!!」
「朝っぱらからうるさいわねえええええええええええええええええええええ!!」
コンソールルームに布ふ団とんを敷いて、一夜明けた朝。
コケコッコーの代わりに何やら叫び声が聞こえ、俺は目を覚ました。
「いやおかしいでしょう、普通あの流れで本当にただ寝ますか!?　あの状況なら児童漫画誌の小学生主人公だって性に目覚めますよ!?」
コンソールルームの隅で、パジャマ姿のトゥアールがコロコロと床を転がっている。
同じくパジャマ姿の愛あい香かと、二人で何やら話しているようだ。
「全員でお泊まりなんかしたらこうなるってわかり切ってるじゃない、何を期待してんのよあんたは……」
「愛香さんだってすっげー切なそうにもじもじしてたじゃないですか夜通し!!」
「あたしの目の届く位置にそーじの寝顔があるのが悪いんでしょ！　今回は寝ぼけてあたしのツインテール結ぼうとしてこないし……距離が遠かったのかなあ……」

俺は布団を畳たたみ、二人の元へと歩いていった。愛香が俺に気づき、勢いよく飛びすさる。
「ひえっ⁉　そ、そーじおはよ……き、聞いてなかったよね、うん、そーじだし……」
「おはよう愛香。トゥアールも、昨日はよく眠れたか？」
「すいません、これまでで一番眠れませんでした……ですが身体からだはグツグツムラムラしてますのでご心配なく」
　確かにトゥアールは全く眠そうにしていない。大丈夫ということでいいんだろうか。
「ねえそーじ、好き 今日はそーじの好き誕生日だね。好き　好き」
「往生際が悪いですよ愛香さん！　小声で一〇回言ったら標準の音量で一回言ったのと同じみたいなマイルールを持ち出さないでください‼」
「わかったわよ無理だったわよあたしたち全員ミッション失敗よ！　お誕生日おめでとう！　　そーじ‼」
　何やらすっげーやけくそ気味に誕生日を祝ってくれると、愛香はとぼとぼとコンソールルームから出て行ってしまった。そうか、ついに俺たちの誕生日の当日か……。

　コンソールルームの奥には、シャワースペースや洗面所がある。俺は顔を洗おうとそこに向かったが、先ほど出ていった愛香の姿もそこにあった。
「散々な誕生日になっちゃったわね……。また今日来るって予告されちゃったから、誕生パーティーもできないよ」
　タオルで顔を拭きながら苦笑する愛香。
「愛香も慧え理り那なも、誕生パーティーの前後には何な故ぜか重要な戦いが重なっただろ。俺もある程度覚悟はしてたよ。トゥアールやイースナが、可か哀わい想そうだけどな……」

　この世界にやって来てから……だけではなく、二人にとっては初めての誕生パーティーになるはずだった。思う存分、楽しんで欲しかったんだが……。
「だからせめて俺は今日、イビルツインテイルズを倒す。トゥアールの憂うれいを晴らしてあげるのが、一番の誕生日プレゼントになると思うんだ」
「そうだね、最近忙しすぎて、みんなのプレゼント買いに行く暇ひまもなかったもんね……」
　愛あい香かは洗面所の壁にもたれかかると、不安げな目を向けてくる。
「あのさ、そーじは……怖くないの？　自分の力を全部コピーした敵が相手なんだよ」
「……怖いとしたら、そんなコピー相手に自分が屈してしまうことだ」
　俺は昨日この基地の壁に叩たたきつけた右拳こぶしを再び握り締め、心を新たにした。
「それにイビルツインテイルズは、ツインテールをしっかり再現できてない。あいつらの真ま似ねっこ作戦は、最初から一貫してそれだぜ？　だったら絶対に負けられねぇよ」
「やっぱ今回も、そーじはツインテールで絶望を乗り越える、ってわけね」
　愛香は少し呆あきれたように苦笑したが、それで自分の迷いも晴れたかのように、清すが々すがしい面差しで俺を見つめてきた。
「……そーじのそういう真まっ直すぐなとこ……あたし、好きだよ」
　言った途端、愛香は失言を咎とがめるかのように自分の口を指で押さえてしまった。



「あ、その……これは、違くて……」
「サンキュ、愛あい香か」
　素直に礼を言うと、愛香はジト目で俺を睨にらんでくる。
「…………ま、いっか。一応目標は達成したし」
「目標？」
「お誕生日おめでと、そーじ」
　二度目の言葉は、最初よりもずっと優しく、そして温かかった。
　その時、まるで何かのタイミングを見計らっていたかのように、洗面所の扉の陰からイースナがひょっこりと姿を現した。
「ひ、貧乳さんの持ち時間、しゅーりょー……。次は、私の、番」
「何よ持ち時間って⁉　ってか何で覗のぞき見してんのよ⁉」
　しかも、イースナの後ろには慧え理り那なも順番待ちをするかのように笑顔で立っている。
　仲間のツインテールを見て、俺は先ほどの決意をより強いものとするのだった。

　布ふ団とんの片付けも終わり、俺たちはツインテール部の合宿の本分──すなわち会議を始めた。
　トゥアールはモニターに、昨日のイビルツインテイルズとの戦闘データを表示する。
「自分自身のツインテール属性に、ブレスというデバイスを用いてもう一つのツインテール属性を共鳴させ、装そう甲こうを形成するのが、テイルギアの神髄です。それを再現するとなると、素体のデスギルディは文字通り擬人化属性パーソニフイで擬似的にツインテール属性を形成しているとしても、肝心のテイルギアのツインテール属性が足りません」
「そう、ですね……。いくらマーメイドギルディ、でも……貴重なツインテール属性の、属性玉エレメーラオーブを……四つも、組織からくす

ねたら、その場で即刻、処刑です……」
　イースナが同意する。そう言われればそうだ。テイルギアは、技術だけ同じものがあっても易やすす々やすと再現できるようなものじゃないんだよな。
「奴やつらはブルーの属性玉完全解放ブレイクエレメリーズのように、現在進行で戦うツインテイルズのツインテール属性をトレースすることで、別の属性玉エレメーラオーブをツインテール属性と同じように使用しているだけだと推測されます。戦闘時こちらと同じ動きが多いのも、その副次効果かと」
　あれほど落ち込んでいても、歯を食いしばって敵の分析は進めていたんだな……すごいよ、トゥアール。
「そこでですね──」
　俺たちは早朝会議を続け、イビルツインテイルズとの再戦に備える。
　その時、無情にもコンソールルームに出現アラートが鳴り響いた。
「────ハ、ハデスギルディ……出現、しました……」
　緊張に声を震ふるわせるトゥアールの肩を、愛香が力強く叩たたいた。
「これは、戦いなんて午前中で終わらせて、そーじたちの誕生パーティーを思う存分やれっていう神様の思おぼし召しでしょ」
「ああ。それじゃ、悪い方の神様倒しに行くか」
　そんな愛あい香かを頼もしく思いながら、俺も宣言する。
「──あいつらはわざわざご丁寧に、邪悪のイビルツインテイルズなんて名乗りやがったんだ。自分たちで勝手にフラグ立てやがったことを、後悔させてやろうぜ。人間の世界で──邪悪あくの栄えた例ためしはない。必ず滅びるものだってな」

◇

　出撃したのは、昨日の戦いと同じ岩場。今回は最初から、マーメイドギルディとハデスギルディが並び立っている。
　対する俺たちは──
「こんな戦いに仮面ツインテールを連れてくるなんて、何を考えておるのじゃ、レッド！」
　俺とブルー、イエロー、ブラック、メガ・ネに加えて、仮面ツインテールも同行していた。ブラックが心配するのも当然だ。
「私が頼んだんです、ブラック。あちらの科学者が戦場でデータ収集をしている以上……たとえ戦う力が無くとも、私だけ離れた基地から見ているわけにはいきません……!!」
　それも理由の一つではあるのだろうが……トゥアールは、マーメイドギルディへの怯おびえを払ふつ拭しよくするためにもこの場に同行したいと願い出たのだ。
　荒療治だが、それはヴァルキリアギルディへの恐怖を克服したブルーと同じ方法だ。普段どんなにいがみ合っていても、愛香とトゥアールは似た者同士なのだと感じる。
　もちろんそれには、何があろうと俺たちでトゥアールを守り抜くことが条件。責任重大だ。
「仮面ツインテール……ここから前に出ないで」
　ブルーが爪つま先さきで地面に線を引き、仮面ツインテールをその後ろに下がらせる。これが、俺たちの最終防衛ラインだ。
「フッ……お誕生日おめでとう、テイルレッド」
「世界中がお祝いしてくれてるんでな、お前らの言葉なんていらねえよ」
「フフフ、これは手厳しい。だが確かに、想像以上にすごいものだったよ。この世界の人々が君たちツインテイルズに向ける信頼は」

「信頼……？」
　怪け訝げんに問い返す俺に、ハデスギルディは言葉を重ねた。
「真ま似ねっこ作戦も立つ瀬がなかった。どれだけ精巧に似せたところで、『君たちが取るはずのない行動を取った』だけで、たちどころに偽者と断じられてしまうのだから」
　そもそも俺の誕生日が世界に周知される前に、真似っこ作戦は破は綻たんしていたんだ。
　ハデスギルディにとっても、世界の偽ツインテイルズへの反応は予想外だったようだ。
「テイルブルーは人間に警戒されているように感じたのだが……それでも、悪事は働かないと信用されているようだしね」
「塵ちりも積もれば山となるってね。あたしもイエローもブラックも、最初はレッドの敵じゃないかとか報道されたりしたんだから。それでも、行動で覆くつがえしたのよ」
「素晴らしい……私も俄が然ぜんやる気が湧いてきたよ。マーメイドギルディの研究には興味を持っていたわけではなかったが……擬人化属性パーソニフイを究めた者として、是非、君たちという一流の真を超えてみたくなった」
　俺たちの会話をにやけ顔で聞いていたマーメイドギルディが、無言で首しゆ肯こうする。
　ハデスギルディの前に四体のデスギルディが出現し、一斉にテイルチェンジャーを構えた。
〈〈〈〈テイルオン〉〉〉〉
　何の感慨も無く完了する変身。偽いつわりの赤、青、黄、黒が、再び戦場に降臨する。
　俺たちツインテイルズは、正体を秘ひ匿とくする運命にある。初めから変身して現場に向かわなければならない。

今日ほど、エレメリアンの前で変身できないのを悔くやしいと思ったことはないぜ。
こいつらの前で四人並び立ち、これが本物の変身だと見せつけてやりたかった。
その代わり──本物のテイルギアを、本物のツインテールを見せてやる!!
〈〈〈〈戦闘データ、更新完了〉〉〉〉
「さあ今回はどうするのかしら？　お聞きの通り、戦闘データは更新済み。もう昨日のように予測不可能の行動を取ってフリーズさせるなんて手は通用しないわよ？」
マーメイドギルディが手をかざしたのを合図に、イビルツインテイルズは戦闘態勢に入る。
〈〈〈〈戦闘を、再開する〉〉〉〉
無機質な声が、決着戦の始まりを告げる。
「上等だ。言っておくが、俺たちツインテイルズも昨日よりアップデートしてるぜ!!」
「──いくわよみんな！　エターナルパッド！」
「アブソリュートリング！」
「よし、メガ・ネ！　インフィニットコンバインじゃ!!」
疾走しながら最強装備を手にし、ブルー、イエロー、ブラック、メガ・ネの四人の身体からだが発光。三つのシルエットとなって光を突き抜け、一いつ気き呵か成せいに攻め込む。
しかしイビルツインテイルズは動じることなく、最強変身チエインエヴォルブした三人のシステムすらも自身の身体に取り込んだ。
〈イビルエターナル、発動〉
〈イビルアブソリュート、発動〉
〈イビルインフィニティ、発動〉

　ベール、ジェイン、ノワールの三体が、ブルーたちのツインテールの結び方を模した機甲のメタルツインテールを頭部に形成する。
　こいつらも、ツインテールを持っていた。ツインテールを形成し、潜在データを全開に出力したこの姿が、こいつらの最強変身チエインエヴオルブ……完全体というわけか。
「ざぁ～んねん、最強変身チエインエヴオルブすれば勝てると思った？　言ったでしょ、あなたたちの全ての戦闘データを組み込んであるって‼」
『そちらこそ残念でしたね。イビルツインテイルズも最強変身チエインエヴオルブできるであろうということは、すでに予測済みです』
　今日の仮面ツインテールは離れたマーメイドギルディたちにも声が聞こえるよう、マスクの拡声機能を使っている。その言葉通り、この展開は予測されていたことだ。
　俺は三人に続くべく、装そう甲こうに彩いろどられた左腕を眼前に突き出し……そして、拳こぶしを握り締めた。
　もう今の俺なら──大丈夫だよな、ソーラ。
　眩まばゆい輝きが凝縮し、ツインテイルブレスが出現した。
　見ていてくれトゥアール。ツインテイルズが……真のテイルギアをまとう俺たちが！　奴やつらの偽いつわりのテイルギアを打ち破るのを‼
「お前たちのそんな紛まがいものの装甲を、テイルギアと呼ばせはしない‼」
　両腕を交差させる。トゥアールの思いも合わせて抱き締め、この身に宿すために。
「────ツインテイルオン‼」
　究極の炎が、俺の全身を熱く燃やす。
　アルティメットチェインへと最強変身チエインエヴオルブした俺を見て、ハデスギルディはほくそ笑む。

「いいのかな？　究極のツインテールの戦闘データはいくらあっても余剰はない……刻一刻とイビルツインテイルズの糧かてとなるのだよ？」
「くれてやるぜ、そんなデータ。だが……俺のツインテールは、お前たちには絶対に真ま似ねすることはできない！　データじゃ再現できないツインテールを、見せてやるぜ!!」
〈イビルアルティメット、発動〉
　一拍遅れてローグギルディも頭部に赤いツインテールを形成し、完全体となる。
　四対四の総力戦の火ひ蓋ぶたが、切って落とされた――。

第六章　女神のツインテール。

　俺はまずブレイザーブレイドのまま攻撃を試み、ブルーたちは早くもウェイブランスエクシード、ヴォルティックブラスターフォートレス、ダークネスグレイブメビウスの強化武装でイビルツインテイルズと交戦を始める。

　奴やつらのテイルチェンジャーもブルーたちの武器に合わせて強化変形し、その汎用性の高さを実証している。

「君たちはワンオフの装そう甲こうをまとっているからこそ、それが一番だと錯覚しているんでしょうけど……それは違うわ。困難な条件を乗り越えた最高のものを一個二個ようやく作るより、妥協してスペックを落としてでも同じものを大量に作れる方が、兵器としては正しいのよ」

　悪魔の科学者が、激突する俺たちへと高慢な持論を投げかける。

「この戦いはいわば、運用テストよ。君たちとの戦いを経てデータをブラッシュアップして、テイルギアＴＹＰＥ-Ｘを完全なものにする。それを量産すれば、均一化した戦力を多くの異世界に投入できる！　エレメリアンはみんな、今よりずっと楽に生きられるわ!!」

　俺たちを倒す……だけじゃ終わらないっていうことか。

　今より更に量産したテイルギアＴＹＰＥ-Ｘを、あらゆる異世界に投入する。相手の力をトレースできるこいつらは、使い勝手のいい侵略兵器に変貌するんだ。

「テイルギアは、世界を守るために作られたものだ！　侵略兵器なんかにさせてたまるか!!」

「何言ってるのレッドちゃん……エレメリアンの科学は元々、人間世界を侵略するためのものよ？　侵略兵器を使って勝手に世界を守っていたのは、あなたたちの方でしょう？」

　こんな奴の言葉で、心を乱すな。それこそ、奴らの思うつぼだ。

俺はマーメイドギルディから視線を切り、天に向かい吠ほえ立てる。俺のツインテールを召喚するために。

「テイルレガリア────────────ッ!!」

それを見たローグギルディは、すかさず拳こぶしを天に突き出し、光の束を照射した。

〈イビルレガリア……形成……!!〉

機甲のツインテールと、形だけ全く同じ光で形成されたツインテールが、天空で互いを激しくぶつけ合う。

その間かん隙げきを縫ぬって急迫してきたローグギルディと、俺は渾こん身しんの力で斬きり結ぶ。

「あんたらがあたしたちの力をトレースしてるってんなら、やり返してやるわ！　属性玉完全ブレイクエレメ解放リーズ!!」

全身から蒼光を放射するブルーを見て、ベールギルディもすかさず動いた。

〈属性玉完全解放ブレイクエレメリーズ、発動確認。疑似属性玉完全解放イビルブレイクエレメリーズにて対応する〉

「……！　だったらこっちはそれを！　さらに属性玉完全解放ブレイクエレメリーズしてやるわっ!!」

〈疑似属性玉完全解放イビルブレイクエレメリーズの属性玉完全解放ブレイクエレメリーズを、さらに疑似属性玉完全解放イビルブレイクエレメリーズで対応する〉

「～～！　だったらこっちは──」

能力のかけ合いは、千日手に突入している。あれもブルーの作戦のうちだといいが……。

「絶対脱衣形態アブソリュートブラストモードを発動しますわ！　皆さん、ご注意を!!」

〈疑似絶対脱衣形態イビルアブソリュートブラストモード、発動。アペ

ンドデータ〝ドＭ〟にて、理解を完了とする〉
　そしてイエローは極大爆撃に周囲を巻き込まないよう、天高く跳躍。
　ツインテールをアンカーにして空間そのものに打ち込み、全武装を解放。初戦と同じように装そう甲こうの変形で絶対脱衣形態アブソリュートブラストモードに対応したジェインギルディの爆撃と激突する。
　それは空中での撃ち合いでありながら、大地そのものが直撃を受けているような凄すさまじい衝撃を周囲に拡散していった。
　ジェインギルディは前言どおり、脱衣への動揺は克服してきているようだ。
　トゥアールの安全を確認しつつ、俺は対戦しているローグギルディの斬ざん撃げきを回避する。
「メガ・ネ！　メビウスクラッシャーじゃ!!」
　タイヤパーツを連結した武器を旋回させ、ノワールギルディへと投げつけるブラック。
〈イビルクラッシャー形成。迎撃……!!〉
　ノワールギルディも同等の武器を形成し、カウンター気味に叩たたきつける。超重武器同士の激突が、大気を震ふるわせた。
　閃せん光こうが、爆光が、斬ざん光こうが、次々に炸さく裂れつしていく。
　俺たちの戦いは互角を維持したまま、少しずつ時間が過ぎていった。
『あちらはデータです、生身の人間よりも当然スタミナに優れているはず……長時間戦闘は不利です、皆さん！』
　今度は俺たちだけに向けた通信をしてくる仮面ツインテール。確かに、そのとおりだ。
「属性玉完全解放ブレイクエレメリーズの疑似属性玉完全解放イビルブレイクエレメリーズの属性玉完全解放ブレイクエレメリーズの疑似属性玉完全解放イビルブレイクエレメリーズを……」

ウェイブランスエクシードで白兵戦を挑みつつ、さらには相手のトレース技に応戦しているブルー。相当疲ひ弊へいしそうだぞ、あの戦い方は……！

もちろん、通常形態より火力が遥はるかに増しているイエローも、消しよう耗もうは激しい。

長時間戦闘が苦手なブラックはなおのこと、戦いが長引けば不利だ──！

〈仲間を気にする余裕があるか。目の前の戦いに集中すべきである〉

ローグギルディの声に、僅わずかながら熱がこもる。

「アップデートしてお喋しゃべりになったか？　余裕がなかろうが気にするんだよ、俺たちは!!」

〈それは弱さだ。意思伝達終了、粉砕する──〉

データの塊かたまりにせよ、心を形成しているからこその、感情の揺らぎ。しかしそれも、一瞬のことだった。

〈イビルセイバー、形成。射出開始……!!〉

ローグギルディはカウンター狙ねらいではなく自らの判断でブレイザーセイバーと同じ形状の刃やいばを背に形成。俺目掛けて、勢いよく撃ち放ってきた。

「飛べ、セイバ──────ッ!!」

俺も背中にまとったブレイザーセイバーを全射出し、それに応戦する。

無軌道に乱れ飛ぶ炎の刃が、空を、地面を抉えぐり斬きり、轟ごう音おんを響かせて激突していった。

駄目だ、俺たちはこれほどまでに心のツインテールを燃やしているのに、こいつらはどこまでも食らいついてくる。このままじゃ、戦いは永遠に終わらない！

「力を……もっと力を振り絞るんだ！　こいつらが対応できなくなるま

で、力を……!!」
　俺の闘志に呼応するように、赤きテイルギアが激しくスパークしていく。
「……それが君の答えか、テイルレッド。気迫の割りには存外とつまらぬものだったね……」
　離れて戦いを見ていたハデスギルディが、まるで関心を失ったかのように鼻白む。
「私たちが無む闇やみに煽あおり立てたのがまずかったようだ。私が見たかったのは、真作のみが持ちえる光。何物を前にしても断じて揺るがぬ、大いなる輝きだというのに……真作が贋がん作さくを超えようともがくことほど、滑こつ稽けいなことはないよ」
「その贋作をけしかけてきた張本人が、勝手なことを言いやがって……!!」
　ローグギルディの剣を受け止めながら、俺はハデスギルディを睨にらみ付けた。
「だ、弾丸が……ツインテールに見え……きゃあああああっ!!」
　その時。イエローが突とつ如じよとして動きに精彩を欠き、ジェインギルディの銃弾が直撃した。
「あれだけ手の内を明かしたというのに、君たちが何も学習していないのも残念だよ……。私の擬人化能力が時間経過とともにどうなるか、すでに身を以もつて知っていただろうに」
「！　これ、は……!!」
　俺は目の錯覚を疑ったが……どうやら現実らしい。
　無数に繰り出され続ける、ローグギルディの攻撃がツインテールに見える。
「何よこれ、ベールギルディの槍やりの突きが全部ツインテールに見える!?」

「貧乳もか！　わらわも……ぬわあああああ、気が散るのじゃーっ!!」
　ブルーやブラックも、同じ状態に陥おちいっているようだ。
「これが擬人化属性パーソニフイから生まれた、イビルツインテイルズの真価だ。彼らは戦えば戦うほどその属性力エレメーラを周囲に拡散し、やがてそれは結界と化す。擬人化属性パーソニフイの結界……つまり……」
「！　まさか……ありとあらゆるものが、ツインテールに〝擬人化〟されるっていうのか!?」
　俺の疑惑を、ハデスギルディは無慈悲に首しゆ肯こうした。
　そうだ……最初のこいつの妄想だって、ただのりんごにしか見えなかったのが時間が経たつにつれ本当に女の子に見えるようになった。これはその発展形──恐るべき結界だ!!
「このまま俺たちが攻防を続けて結界の濃度が高まれば、それこそ空気や地面までツインテールに擬人化して見えるかもしれない……そうなったら、戦いどころじゃなくなるぞ!!」
　そしてそれは、程なく現実になり始めた。応戦するブルーたちの攻撃までツインテールに見えだし、周囲がツインテールだらけになってしまったのだ。
　何事もないかのように攻撃を続けるイビルツインテイルズに比べ、俺たちはこの激変に対応しきれず、次々に攻撃を食らい始めた。
「マーメイドギルディよ。データをもっと収集したいかもしれないが、これまでだ。贋がん作さくに屈する真作を、私は見たくはないのでね……」
「……はいはい。それじゃあ、私も、一番の目的を果たさせてもらうわ」
　落胆の溜ため息いきをつくハデスギルディ。その横に立つマーメイドギルディが、自ら動いた。

「どう？　私の科学は。……テイルギアＴＹＰＥ-Ｘの力は。一緒に研究したくなったでしょう？　今度こそ受け取って欲しいわね……アルティメギルへの招待状を」
　遠く離れ、祈るように手を組んで俺たちの戦いを見守る仮面ツインテールに、悪魔の囁ささやきをするマーメイドギルディ。
　テイルギアや仮面で聴力が強化されている俺たちには、数百メートルぐらい離れた今の状態でも、その場にいる者の声が聞こえる。マーメイドギルディも、それがわかってこうして話しかけているのだろう。
「ね、トゥアールちゃん」
　しかし、マーメイドギルディがその名を口にした瞬間、俺たちは顔面が蒼白になった。
「……マーメイドギルディの奴やつ、何で……⁉」
　俺たちの反応に満足したように、マーメイドギルディは右腕を掲げる。
　それを合図に、イビルツインテイルズの攻撃が一時中断した。
「私はあなたが造ったブレスのプログラムコードを解析した。その中に書かれていたのよ、〝トゥアール〟って。自負の証あかしや遊び心で、プログラムコードに自分の名前を書き綴つづるプログラマーは少なくないわ。ましてあなたほどの科学力を持つなら……そのプライドたるや、ね」
「……癖くせなだけです。テイルブレスオルターを強奪された時に、名前を知られた覚悟はしていました」
　言われてみれば……トゥアルフォンにスタートゥアール、とぅあるん……挙げればきりがない。トゥアールは、戦闘装備やアンチアイカシステム以外は、発明品そのものに全て自分の名前をもじってつけていた。プログラムソースにも自分の名前を仕込んでいても、何の不思議もない。

「あなたがアルティメギルに来るなら──レッドちゃんたちを見み逃のがしてあげてもいいわよ？」
「わ、私が……アルティメギルに……」
「聞くなトゥアール……大丈夫だ！　俺たちは絶対に負けない!!」
　ここでこいつらを倒さなければ……またトゥアールがマーメイドギルディの影に怯おびえて過ごさなければならなくなる。
　まして、名前を知られたと判明した今となっては！
「そう……じゃあ、もう少し続けましょう」
　マーメイドギルディが再び右腕を掲げると、イビルツインテイルズはゲームのポーズボタンを解除したかのように即座に再始動する。
　対する俺たちは、明らかに動揺してしまっており、さらに攻撃の被弾が増えていった。
　ブルーが、イエローが、ブラックが……自分の影に、劣勢を強しいられていく。
「あら、トゥアールちゃんのせいでみんながピンチね？　でも責めないであげて、力が無いのにトゥアールちゃんが戦場に来るのは……来たくなっちゃうのは、仕方がないことなの」
　媚こびるような声で、マーメイドギルディは俺たちを煽あおってくる。
「トゥアールちゃん。あなたはエレメリアンに魂たましいをぶつけたくて、戦場に現れているんじゃない。ただ未練なだけよ……ツインテールが健在だった頃ころの自分の亡霊を追いかけて、戦いの場に足を運んでしまうだけ」
「違います！　私は……もう、過去を振り返ったりしません!!」
　声を震ふるわせるトゥアールを見て、ブルーの攻撃が荒々しさを増す。
「ッ……の口だけ女、今日という今日は許さないわ……あたしが粉々に

してやる!!」
「わあ、怖い。でもね、私も今日は遊びじゃないの……。もう、時間がないから」
　マーメイドギルディは自ら歩を進め、トゥアールへと近づいていった。
「私がどんなに他のエレメリアンより弱くっても、人間の一人ぐらいどうにでもなるわよ」
　まさか、あいつが自分でトゥアールを攫さらおうっていうのか……!?
「皆さん、大丈夫です、目の前のイビルツインテイルズに集中してください！　自分で決めてここへ来たんです、自分の身は自分で守りますから!!」
　俺たちを心配させまいと叫ぶトゥアール。しかし、彼女が後あと退ずさっていく背後には大岩が。退路を断たれ、追いつめられていた。
「ハデスギルディ、貴様！　こんな醜みにくい蛮行を見過ごすなど、それでも神を名乗る戦士か!!」
「好きにすればいい……これで負けるならば、ツインテイルズもそれまでの存在だよ」
　ブラックの抗議を、ハデスギルディは冷めた口調であしらう。
「甘いわよねぇレッドちゃん。後ろにエレメリアンが二体も控えてるのに……イビルツインテイルズを倒せばそれで終わりって、馬ば鹿か正直に燃え尽きるつもりだったの？」
　そのとおりだ……他の武人肌なエレメリアンたちならいざ知らず、マーメイドギルディならただ見ているだけで終わるはずがないと、いくらでも予期できたはずなのに……!!
「トゥアールッ……！」
　トゥアールの元へ駆け寄ろうとするブルーだが、やはりベールギルディの攻撃で後退させられる。イエロー、ブラックも同じだ。擬人化の

結界が、それに拍車をかける。
「く、くそ……！」
　俺も、ローグギルディを突破できずに被弾だけが増えていく。イビルブレイドをテイルギアに受け、火花を散らしながら……俺は、トゥアールへと手を伸ばす。
　駄目だ……身体からだを駆け巡る、怒りの炎を抑えきれない。
　人じん智ちを絶したマーメイドギルディの悪行に、理性が飛びそうだ。
　このままじゃ、俺のツインテールは……また暴走してしまう……!!

「────ツインテールから、心を失わないで」

　崩れかけた膝ひざが、その声に踏みとどまる。
　振り返った俺が見たものは──太陽の光を背負った、神こう々ごうしき少女の姿。
「ソーラ……!?」
　ツインテールの女神。ソーラだった。
　俺は彼女を、自らの炎に焼かれた意識の中で見る幻影かと思った。
　しかしブルーたちも皆、呼吸さえ止めて瞠目している。
〈敵性判断、開始。データ、皆無〉
　俺たちと相対していたイビルツインテイルズが一様に困惑し、前回の戦いのようにフリーズしてしまった。
　ああ。そりゃあ、データなんて一つもないだろうよ……。
「──駄目でしょ、テイルレッド。無理をして……ツインテールをいじめるつもり？」
　ソーラが身にまとっているのは、陽よう月げつ学園高等部の女子制服ではなかった。

清せい廉れんな白布で全身を包み、ツインテールを結ぶリボンは、星のように眩まばゆい黄金。

俺も初めて見る……まさに、女神の装衣ドレスだ。

「ちょっと、あの顔ってまさか……！　ハデスギルディ君の擬人化属性パーソニフイの能力なの⁉」

だが、マーメイドギルディの問いも耳に入らず、ハデスギルディは打ち震ふるえていた。

「あ、あなたが……何な故ぜここに⁉　しかも、ツ、ツインテールに……」

ついにハデスギルディは畏敬に姿勢を正し、ソーラに向かって跪ひざまずいた。

「は、ははあっ……‼」

な、何でハデスギルディがソーラに傅かしずくんだ⁉

「馬ば鹿か者、好奇心で戦場にまで首を突っ込むな！　こやつらは人の心を奪う怪人じゃぞ‼」

学校であれだけソーラを気遣っていたイースナが、真っ先に危険を叫ぶのも当然だ。

「うん──よく知ってるよ」

カオスに塗り固められた戦場の只ただ中なかで、ツインテールの女神は悠ゆう然ぜんと歩を進めた。

「しっかりしなさい、ツインテイルズ！」

そしてソーラは毅き然ぜんとツインテールをたなびかせ、俺たちを叱しっ咤た激げき励れいする。

「どんな絶望の中でも、優しさを忘れないで。怒りに身を焦がさないで。あなたたちのツインテールは……テイルギアは、優しく世界を包むものなんだから」

ソーラは俺たちの前に立つと、左腕を天に掲げた。

降り注ぐ太陽の光を反射するほどの白磁の細腕に、光が集まっている。
目に見えないはずの陽光が、一条の束となってソーラの手首に集束していく。
その光の出所は──俺たち四人のツインテールだった。
「……テイルブレス!?」
俺はソーラの左手首に形成されたブレスを見て、思わず叫んだ。
俺たちのテイルブレスとそっくりだけど……黄金のラインに縁取られている。
そしてテイルブレスの宝玉とそこから中心を走るラインが赤、青、黄、黒……絶えず四色に点滅している。
「みんなのツインテール、ちょっとずつ借りるね。この……ソルテイルブレスに」
ソーラは左腕を天に掲げたまま、凛りんとした声こわ音ねで唱となえる。

「────テイルオン」

ソーラの身体からだを取り囲むように炎の帯が走り、繭まゆ状に形成された。
赤と、僅わずかずつ青と黄と黒の粒子も吸収しながらが光の粒子がほとばしり、全身に張り付いていく。
肩、胸、腰、足──上から順に、爆裂するように光が弾はじけ、装そう甲こうが形成されていった。
蒸気のように噴き出す、赤い光条──。
その驚きよう愕がくを、いったいどんな言葉ならば現せるだろうか。
ソーラが俺と同じ赤いテイルギアを装着し、テイルレッドに変身した

のだ。
　違いといえば、左腕にブレスを装着したため、両腕の装備が逆になっていることだけだ。
　俺たちはデスギルディがテイルギアをまとった時よりも遥はるかに勝る衝撃を受けながら、その光景に見入った。
　俺が一時的にソーラの身体になった時も、変身時はテイルレッドの幼さに戻っていた。
　だからこのスタイルでテイルレッドになったのを見るのは、皆初めてのことなのだが──
「何よあれ……テイルレッドに胸があるじゃない!!」
「風ふ情ぜいがありませんね……やっぱりレッドたんはぺったんこお胸のふにふにお腹なかでこそ、持ち得る力を極大に発揮できる存在なのです……!!」
　驚きよう愕がくよりも自分の主張の方が勝ってしまったブルーとトゥアールを見て、ソーラは嬉うれしそうに微ほほ笑えむ。
「フフッ……うんうん、あなたたちはそうじゃなくっちゃね！」
　そうだ……トゥアールが、もう怯おびえていない。温かな太陽の温ぬくもりに、心が癒されたかのように。
「テイルレッドが女の子言葉使うなんて、違和感バリバリじゃぞ……！」
「ですが、かっこいいですわ……ここにもテイルレッド！　二人のツインテイルレッドですわ!!」
　ブラックやイエローの声に応こたえるように、ソーラの全身から炎が立ち昇った。
「貴女あなたは……一体、何者か！」
　ハデスギルディが、畏敬と驚異を交ぜた感情とともに、問いかける。
　思い出す……俺が初めて変身した時も敵にそう問われて、ただただ狼

狽うろたえるばかりで答えることができなかった。

　しかし、ソーラは──

「私は、テイルレッド！　今この瞬間にだけ存在する夢ゆめ幻まぼろしの存在──ミスティテイルレッドだよ!!」

　清せい澄ちような眼まな差ざしを向けて堂々と名乗り上げ、ツインテールを麗うるわしく風に揺らした。



〈敵性戦力と判定。目標、捕捉──〉
　イビルツインテイルズは、俺たちより優先すべき攻撃対象と認識したのだろうか。
　四体同時に、ミスティテイルレッド目掛けて跳躍する。
「危ないっ！」
　俺が咄とつ嗟さに叫ぶも、ソーラは余裕の微笑で応こたえた。
「全然？」
　イビルツインテイルズたちの剣が、槍やりが、銃撃が、鎌かまが、次々と空を切る。
　ソーラが超高速で回避したというよりも、イビルツインテイルズが勝手に攻撃を外したように見える。そして攻撃が二度、三度と続くと、それは錯覚ではないと確信した。
「すごい……」
　これが、女神の戦い。彼女の歩法そのものがツインテールとなっているのがわかる。
　ツインテールを無尽蔵に擬人化する結界も、あらゆるツインテールを見守ってきた女神の前では何の用も成さない。
　いつも柔らかに、穏やかにたなびいていたツインテールはこの戦場で、敵の攻撃すらもなびかせてしまう。
　地球を温かく照らす太陽の光に、どれだけ気け色しきばんで剣を振り下ろそうとも、断ち斬きれぬが道理。イビルツインテイルズの攻撃はことごとく、ツインテールの残像を摺すり抜けていった。
　ミスティテイルレッドはツインテールを優雅に掻かき上げると、左右のフォースリヴォンに同時に触れる。
「ソルブレイザーブレイド……!!」
　ソーラがそう紡つむぎ引き抜いたブレイザーブレイドは、基本中結形態ノーマルチエインでありながら、二刀同時装備。

左右に剣を携たずさえたミスティテイルレッドは右の一いち斬ざんでローグギルディを、左の一いつ閃せんでベールギルディを、返す右でジェインギルディを、今一度左を閃ひらめかせ、ノワールギルディを。
俺たちに相手を返すと言わんばかりに僅わずか一斬ずつで四体を転倒させ、そのままハデスギルディへと疾しつ駆くする。
「駄目でしょ、こういう時は君みたいな立場の戦士が止めないと……おしおきだよ」
これまで分身体の維持だけに力を注いでいたハデスギルディが、初めて自らの両腕で攻防を開始した。
「むっ……う、あ、貴女あなたはやはり……あの方ではないのか……しかし……!!」
ハデスギルディの言葉はまるで要領を得ない。だが奴やつがミスティテイルレッドに押されているのは、困惑のせいではないだろう。
「すごい……基本中結形態ノーマルチエインなのに、ハデスギルディとわたり合ってる！」
「ええ、あの強さならば勝てますわ！」
優勢のミスティテイルレッドを見て、ブルーとイエローが歓喜する。
その美しき戦い、麗うるわしきツインテールに見とれていた俺は──彼女の身体からだに異変が起きていることに気づいた。
身体の輪郭が……ツインテールが、徐々に薄らぎ始めている。
「あ、あ──」
そうだ……そうだった。
ソーラには、もう、時間が──。

『放課後にみんなとファーストフード店に寄って、おしゃべりをしたり……』
『洋服を買いに行って、たくさん試着したいな。似合うかどうか、全部

総そう二じに聞くの』
『そうだ、イースナちゃんのライブも観に行ってみたい！』

　普通の女の子のようなことをしたい。
　笹の葉に吊つるす短冊を書き綴つづるかのような無む垢くさで、たくさんの夢を俺に語ってくれた。
　ソーラは今、その願いの一つ一つを剣の一太た刀ちへと等価交換し、儚はかなく霧む散さんさせていく。
　駄目だ、ソーラ……君に残された時間は……掛け替えのない時間は、こんなことのために使うものじゃないんだ!!
「完全解放ブレイクレリーズ！」
　ソーラは左右に持った二刀のブレイザーブレイドを、同時に完全解放ブレイクレリーズさせる。
「オーラピラーッ！」
　そしてそれぞれの剣の切っ先に灯ともった火球をハデスギルディ、マーメイドギルディへと投げつけた。
「ひっ……ど、どうしてこんなことにっ……!!」
　マーメイドギルディはハデスギルディを盾たてにして火球を回避。ハデスギルディは都つ合ごう、二つの火球が変化した結界によって二重に拘束バインドされた。
「む、う……！」
　ハデスギルディは拘束バインドを砕いて脱出しようとする。
　その瞬間、戦場にいる全ての者たちが目撃した。
　宇宙開かい闢びやくから幾いく星せい霜そう──数百億の時を一瞬に凝縮し、天あま翔かけるツインテールを。

「エンシェント！　ブレイザ────────────ッ!!」

遥はるかなる古いにしえよりこの世界を照らし続けた、慈愛の太陽光ほのお。
為なす術すべ無く立ち尽くすハデスギルディに直撃し、衝撃波だけで再度イビルツインテイルズを吹き飛ばし、さらにはその背後で逃げようとしていたマーメイドギルディにまで、猛然と突き抜けていった。
左右二刀で描かれたツインテールのエンブレムが、冥めい王おうの身体からだに炎の斬ざん痕こんを刻む。
「うぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」
さしものハデスギルディも為なす術すべ無く炎に巻かれ、空高く吹き飛んでいく。
空を貫いて立ち昇った火柱は、遥はるか太陽までの架け橋となったかのように錯覚させた。
「ひっ……ああああああああああああああ!!」
マーメイドギルディはただの炎の余波で、全身を炎に包まれて地面を転がった。
「……えへへっ……」
ミスティテイルレッドは炎の柱に背を向け、俺に優しく微ほほ笑えみかける。
その身体はすでに、背景が透けて見えるほどに薄れてしまっていた。
「……ソーラ……」
ツインテールとツインテールが、一本のリボンで引かれ合うように。
どちらからともなく俺たちは歩み寄り──そして抱き締め合った。

◇

俺とソーラは再び時の狭はざ間まで心と心を繋つなげ、宇宙空間で向き合っていた。
　俺はテイルレッドではなく、元の男の身体だ。
「ソーラ……どうして……どうしてこんなことを……」
　前とは違い、互いが裸である気恥ずかしさも意識から飛んでしまうほどに、俺はやるせなさに打ちひしがれていた。
　これが、最後の邂かい逅こう。言葉を交わし合える、最後の時間。
　現実ではあとたったの数秒だって、ソーラには残されていないんだ。
「俺たちを助けるために、君の大切な時間が……願いが、失われてしまった……」
　悔やんでも悔やみきれない。俺が冷静でさえいれば、彼女を戦いに駆り立てることなく戦況を覆くつがえすことができたかもしれないのに。
「ねえ総そう二じ、何勘違いしてるの？　私はやりたいからやったんだよ？」
　ソーラは、初めておもちゃの指輪を指にはめた幼い少女のように目を輝かせ、左手首のブレスを見つめた。
　そして悪戯いたずらっぽい笑みを浮かべ、俺に見せつけるようにブレスを胸の前で構える。
「テイルオン！」
　そう唱となえても、この精神世界ではソーラの見た目には何の変化もない。
　しかし彼女の目には映っているのだろう。自分の身を包む、真紅のテイルギアが。
「色々考えて……これが一番やりたいことだったからやったの！　これは……私の我わが侭まま」
「ソーラ……」
「……嘘うそじゃないよ。だって……嬉うれしかったんだもん」

　ブレスを消して後ろ手に組むと、ソーラはツインテールをたなびかせて身を翻ひるがえした。
　おそらくはここが本当の宇宙空間であろうと、彼女のツインテールならば無重力などという戒いましめに邪魔されることなく、美しく舞うのだろう。
「私はツインテールのせいで世界がおかしくなったって、ずっと悲しんでいたのに……こんなにも真まっ直すぐに、ツインテールの力で戦う人たちに出で逢あえたんだから」
　俺たちの眼下には、地球がある。
　それをソーラは、慈いつくしむような目で見下ろした。
「私──テイルギアが大好き。憧あこがれてたんだ。総そう二じみたいに〝変身〟するのを」
　彼女はこうして幾いく星せい霜そうの時の中で、多くの地球、多くの世界を見つめてきたのだろう。
　自ら近づきもせず、しかし離れもしない。
　まさしく大いなる愛を以もつて地球を永遠に照らす、あの太陽のように。
「こんな素敵なものを作った子が笑えないなんて……そんな世界、嘘だよ！」
　そしてその太陽は今、あの蒼あおく美しい星のどこかに在ある、小さな小さな微点だけを心残りとしていた。
　地球から視線を切ると、ソーラは俺の胸に手の平を触れ、そっと寄り添ってきた。



「君が誰だれかを助ければ、その誰かもいつか君を助けてくれる。君が世界を助ければ、きっと世界も君を助けてくれる。一つが二つになって、二つが一つになる──それが、総そう二じのツインテールなんだよ」
　ツインテールを難しく考えてはいけない。
　ツインテールの本質を見失ってはいけない。
　ツインテールの始祖たる女神にそう窘たしなめられ、俺はしっかりと頷うなずく。
「私はもう大丈夫だから……。これからずっと、笑顔でいられるから。あと一人、ツインテールで悲しんでいる女の子を、笑顔にしてあげて。私の、最後のお願い」
「──ああ。約束する」
　ソーラの手に自分の手を重ね、俺は万感の思いをこめて応こたえた。
「そうだ。そんなに私のやりたいことを気にしてくれるなら……最後に、ちょっとだけ女の子な気持ちにさせてもらおうっと」
　願いの最後の一つを、女神は恥ずかしそうに口にした。
　一人だから、できなかったこと。ツインテールにしてもできなかったこと。
　他人との触れ合いを。
「総二……」
　ソーラは俺の首に腕を回すと、そっと瞳ひとみを閉じて顔を近づけてきた。
　彼女の望む触れ合いが何なのかを理解した瞬間。俺の唇くちびるは、柔らかな感触に包まれる。
　自分でも不思議なくらい気恥ずかしさがなかったのは……彼女の願いが、あまりにも純粋だったからだろうか。
　温かい。今にも消えようとしているソーラだが、その優しい温ぬくもりを、俺は確かに感じた。

◇

「テイルレッドがテイルレッドにちゅーしとる……」
　ブラックの呆ぼう然ぜんとした声で、俺は我われに返った。
　目の前にはソーラの顔、そして俺はテイルレッド。
　そうか、みんなの目には、そう映ってるんだ……。
「……ふう」
　俺から離れ、ミスティテイルレッドから変身解除するソーラ。
　そしてブルー、イエロー、ブラックへと順に視線を移し、最後にトゥアールに向かって微ほほ笑えんだ。みんな、短い付き合いだが……彼女の僅わずかな時間を分かち合った、大切な友達だ。
「それじゃあ、またね……」
　そして最後に俺に再会の約束をすると、ソーラは陽光に煌きらめきながら消えていった。
　だから俺は、こう返すんだ。
「……ああ。俺とお前がツインテールを愛する限り……きっと」
　一筋の悲しみもツインテールに滲にじまぬ晴れやかな笑顔で、俺は女神を見送った。
「熱っ……熱っつ……ああもうっ熱い!!」
　何というしぶとさか、地面を転がって身を包んだ炎を消すと、マーメイドギルディは這ほう々ほうの体ていで立ち上がった。
「……またやられたわ……伏ふく兵へいはお互い様ってことね、レッドちゃん……」
　台風が過ぎ去った後のような、心地ここちよい静けさに包まれる戦場。
〈不確定戦力、消滅。戦力の再分析を開始する〉

　そんな中、四体の冥めい府ふの戦士たちは、まるで今ミスティテイルレッドの一撃を受けたことなどメモリーから消去したかのような自然さで、俺達の前へと並び立った。
「……皆さん、私が足手まといになってしまい、すみません……」
　先ほどのマーメイドギルディの言葉が余程堪こたえたのだろう、離れて立つトゥアールは仮面を震ふるわせて俯うつむいている。
「それは違うぞ、トゥアール。君が足手まといだった時は一度もない。むしろ、何度助けられたと思ってるんだよ」
　トゥアールは今まで、変態怪人たちに圧おされてくじけそうになった俺たちを戦場で励まし続けてくれたんだ。次は俺たちが、トゥアールを励ます番だっていうだけだ。
「慰なぐさめ合うのはいいけれど、あなたたちじゃツインテールの擬人化結界を突破できない。まして随分とダメージを受けてしまった今、絶対にイビルツインテイルズには勝てないわよ」
　確かに……ブルーも、イエローも、ブラックも、相当数の攻撃を受け、しかも体力も尽きかけている。対してイビルツインテイルズは、ほぼ万全の状態だ。
　しかし俺は今、逆に戦い始めた時以上の力が溢あふれ出てくるのを感じていた。
「ソーラが俺たちに教えてくれた……贋がん作さくにはない、真のテイルギアの力を!!」
　俺が一歩進み出ると、反射行動のようにローグギルディが剣を振りかぶった。
　だが俺は奴やつのイビルブレイドをテイルカリバーで悠ゆう々ゆうと弾はじき上げ、逆にその鈍にび色いろの装そう甲こうへと痛烈な一いっ閃せんを見舞った。火花を散らして後退するローグギルディ。
〈警戒。テイルレッドの動きが……先ほどの未確認敵性戦力に類似〉

猛烈な勢いで剣を繰り出すローグギルディ。擬人化結界の影響で無数のツインテールと化したその剣けん閃せんを……俺は、紙一重で躱かわしていった。女神の優雅な動きを、なぞるように。

〈……!?　やはり、動きが違う……!?〉

「擬人化属性パーソニフイの余波で、目に見える全てがツインテールのはず……まさかテイルレッドちゃん、あなたには結界が通用していないの!?」

「いいや。いまだに見えているぜ……周囲の全てが、ツインテールにな」

「ッ……それじゃあどうして普通に動けるの!?　いつもどおり戦えるの!?」

ローグギルディもマーメイドギルディも、俺の動きに驚嘆している。

違う。動きが変わったんじゃない……いつもの俺に戻ったんだ。

ソーラの教えが……慈愛が、俺に大切な初しょ心しんを取り戻してくれた。

ごく普通にツインテールを愛するその心が、テイルギアの何よりも大きな力になると!!

「俺は忘れていた。目に映る全てがツインテールなんて……むしろ、俺の日常なんだって」

とある昼下がりにふと窓の外を眺め、雲がツインテールに見える。グッズや日用品もツインテールに見える。俺の何気ない日常が、ツインテールだった。

ならば戦場でツインテールが視界を埋め尽くすことなど、何を恐れる必要がある!!

「お前らが見せている光景なんて……お前らが自信満々に繰り出してきている戦法なんて、ようはいつもの俺だ！　いつもどおり戦えるのが道理じゃないか!!」

俺は咆ほう哮こうと共に、斬きり結んだ剣ごと押し切り、ローグギルディを弾はじき飛ばす。
「いつも……えっ……何言ってるのこの子⁉」
真顔で後あと退ずさるマーメイドギルディ。
しょせん、邪悪な科学者では正しきツインテールを理解することはできないようだな。
この思いを分かち合おうと仲間たちを見ると、全員白目になっていた。……あれ。
俺の動きを警戒してか、ローグギルディは残る三体の元へと飛びすさり、四体揃そろって俺たちを睨ねめ据すえる。俺もブルー、イエロー、ブラックと揃い立ち、それに相対した。
「みんな！　俺がリードするから……信じて、ついてきてくれ‼」
まだ仲間が困惑している分は、俺がサポートする。俺が……みんなを支ささえる‼
「さあ──ここからは俺たちの逆襲だ。ツインテールを結ぶぞ‼」
俺は仲間たちのツインテールにコンタクトを取ると、散り散りに飛ひ翔しようした。
女神は、ツインテールの特性で世界が分かれてしまったと嘆いていた。
だがツインテールは、結んでできる髪型だ。
二つを一つに結び、力を合わせることも強さなんだ‼
「俺たちがこの戦いで地力を上げたところで、こいつらはそれに食らいついてくる。一人ずつ……一体ずつぶつかり合えば、互角のままだ……キリがない。だけど‼」
俺は眼前のローグギルディを捨て置き、ブルーと戦うベールギルディに急迫する。
「確かに、レッドが側そばにいてくれれば……ツインテールだらけで

も、全然なんともないわ」
　俺に背中を預けたブルーは、結界の只ただ中なかでも落ち着きを取り戻し、微笑を浮かべた。
「それに、レッドだけじゃない。あたしたちそれぞれにも、譲れない、揺るがない思いがある。それも力に変えてくれるのが……あいつが託してくれた、あたしたちのテイルギアよ!!」
　正面からしか攻撃できないローグギルディとベールギルディを迎え撃つ形で、俺とブルーは同時に強烈なカウンターを喰らわせる。
「わかんないでしょ、あんた。あたしが何でレッドを守ろうとするか。どうしてそうすると強くなれるか」
〈容易。戦力の低下を防ぎ、自身の生存確率を下げぬためだ〉
「あんたたちが今のあたしを再現するなんて、一生かかってもできないわよ!!」
　ブルーのウェイブランスエクシードが一いつ閃せんし、ベールギルディがギアから火花を散らしながらたたらを踏む。
　俺はローグギルディを蹴けり飛ばし、その反動で宙返りすると、ブラックと戦っているノワールギルディの下へと着地した。俺を追い、ローグギルディが疾走する。
「テイルカリバー希望装填ホープモード──黒髪属性ブラツクヘアー!!」
　テイルカリバーに属性玉エレメーラオーブの能力を付加する希望装填ホープモードを発動し、黒色の光をまとった剣で一閃。闇やみのカーテンが振りまかれ、ローグギルディの視界を阻む。
〈初めて発動する能力……しかし、対応は可能〉
　ブラックがその闇を突き破ってローグギルディに急襲し、対応する隙すきも与えずに攻撃を仕掛ける。
「太陽の核は一五〇〇万度もの猛烈な熱量を秘めておるが、その表層温度は僅わずか六〇〇〇度に過ぎぬ……。テイルレッドのツインテールを

真ま似ねした貴様も、まさにこれと同じよな」
〈急に現れる……ストーカーの習性、データの範囲内──〉
　イビルブレイドでブラックの攻撃を受け止めるローグギルディ。
「テイルカリバー希望装填ホープモード！　青髪属性ブルーヘアー!!」
　俺は続けて別の能力をテイルカリバーに付加し、水流を放射。ノワールギルディへの〝道〟を作り上げた。
　ブラックはメガ・ネのパーツをイジェクトして戦闘機形態メガネウインガーに再合体させ、搭乗。モーターボートの要領で水流の上を滑走し、ノワールギルディへと迫る。
〈撹かく乱らん……？　否、私たちは対応している。追いついているはず〉
「わらわが惹ひかれ、憧あこがれたツインテールは、太陽が内に秘めた核の灼しやく熱ねつ！　貴様ごときがなぞった上辺の炎など、恐るるに足らぬ！　はあああっ!!」
　合体パーツを擬似的に構成しメガ・ネの変形に対応しようとしたノワールギルディだが、一歩間に合わない。ローグギルディともども、ブラックのダークネスグレイブメビウスで斬きりつけられる。
〈ぐうううっ……！　再計算……〉
　ノワールギルディが想定外の事態に思考を乱す。
　徐々に、しかし確実に自分たちの応答速度を上回っていく俺たちの連係を前に、イビルツインテイルズは個々の対応に追われ、かえってフォーメーションを崩し始めた。
「あの子たちは一体何を言ってるの……？　二人がかりだから何だって言うの⁉」
　離れてデータを収集するマーメイドギルディの狼狽ろうばいを捨て置き、俺は大きく飛びすさる。
　イエローの元へと着地すると、並んで互いの武器を構えた。

「テイルカリバー！　生命装填ライフモード!!」
　テイルカリバーの柄つか尻じりから首輪紐リードが伸び、イエローのヴォルティックブラスターに結合する。瞬間的に火力を極大化させる、俺たち二人の秘策だ。
「ヴォルティックブラスターフォートレス！　最大被虐フルパワーですわ!!」
〈ドＭのデータはインプット済みだ。ローグギルディ、エネルギー直結を要求。これはドＭの特性を活いかした克こつ己き心しんによる強化である〉
〈ドＭ了解。連係射撃で迎撃する──何ッ……!?〉
　俺とイエローの合体攻撃は、完かん璧ぺきに反撃が追いついたはずのローグギルディとジェインギルディの光球を打ち砕き、二体に直撃した。
〈威力が拮きつ抗こうしない。何な故ぜだ、ローグギルディ〉
〈理解不能……！〉
　データなんて所しよ詮せん、百科事典みたいなもんだ。
　ドＭとはこういう存在ですよ、と羅ら列れつしているだけで、根本を理解していない。
「イエローはドＭだから強いんじゃない……ドＭの自分自身に悲しみ、乗り越え、そして未いまだにドＭだからこそ強いんだ!!」
〈かなり理解不能……!!〉
　俺は絶え間なく仲間たちの心とツインテールを結び、敵を翻ほん弄ろうしていく。
　逆に、イビルツインテイルズ側の連係の起点とならなければいけないローグギルディは、あくまでただの共闘に徹するのが精一杯で、こちらのツインテールについてこれない。
「嘘うそよ……擬人化の結界を克服したのはまだしも、ツインテイルズ

がフォーメーションを使ってきた場合も想定してプログラムしてあるはず！　何故対応できないの⁉」

　野次のように俺たちへ叫びかけてくるマーメイドギルディへ、俺は言い放った。

「プログラムなんかじゃ、本当のツインテールは結べないからだ‼」

　俺はイエローとの同時攻撃でジェインギルディを吹き飛ばし、間かん髪はつ容いれずにブルーへと合流する。

〈幼馴染属性チャイルドフッド、発動〉

　ベールギルディはこれまでの攻防からして真っ先に俺を警戒してか、疑似属性玉変換機構イビルエレメリーションを発動した。

「幼馴染属性チャイルドフッドの属性玉エレメーラオーブなんて、使いどころが難しくてあたしでも滅多に使わないのに……‼」

　ほんの一瞬の時間を逆行し、相手の攻撃をなかったことにする。属性玉エレメーラオーブの中でも最上級の能力難度を誇る、幼馴染属性チャイルドフッド。

　時間を超越し挑んでくるベールギルディを前に、俺はテイルカリバーに残された最後の理ことわりを解放する。

「俺たちのツインテールには、多くの戦いの記憶と、それ以上に思い出が蓄積されている！　積み重ねてきた時間の輝きが、俺たちの強さだ‼」

　思い出は、単なるデータの記録なんかじゃない。

　心に在あるだけで身体からだを熱くする、紛まぎれもない力だ。

　俺はテイルカリバーを逆手に構え、刃やいばを中心から二つに割ってに変形させた。右の刃を倒してＬの字を━時計の三時を描いた奇抜な形の刃が、戻りゆく時間へと追随する。

「テイルカリバー！　時空装填クロノモード‼」

〈────⁉　すでに、攻撃……されている……⁉〉

ベールギルディは、知覚許さぬ刹せつ那なで一条の光が刻まれた胸を押さえた。
「お前がブルーの力でほんの僅わずかだけ時間を逆行したように……俺はほんの少しだけ、ツインテールを伸ばしたんだ!!」
〈時間を、加速させたのか……!!〉
しかし、俺もこれは乱用できるものじゃないな……。ツインテールという時間を延ばすのは、諸もろ刃はの剣つるぎだ。
そこへすかさずブルーも攻撃を叩たたき込み、俺を援護する。
俺たちの飛び翔しようと疾走はついに残像と化し、空にツインテールを次々と描いていく。
赤と青、黄、黒の閃せん光こうは、螺ら旋せんを描くように戦場を乱舞した。
〈理解不能……同一の能力を持つ敵を相手に、ここまで圧倒されるとは……!!〉
イビルツインテイルズは計らずして四体同時に脚をふらつかせ、並び立つ俺たち四人を前に後あと退ずさった。
決着の時を迎え、俺はテイルカリバーを持つ手に力を込めたのだが──
「これは……!?」
テイルカリバーが黄金に輝き、さらに虹にじ色の粒子を刀身にまとわせ始めた。

ツインテールの無限の力を信じ。生命いのちと等価であると悟った。
輝光で道を切り拓き、絆きずなによって新たなる扉を開けた。
希望に自分が助けられ、覚悟が仲間を救った。
そして仲間の道標となる喜びを胸に、仲間と紡つむいできた時空を感じた。
どうしようもない無力を知りながら……ついに、究極へと至っ

た……！

「究極のツインテールに覚かく醒せいするまで俺のツインテールに積み重ねてきた、全ての理ことわりが今──テイルカリバーに解放された!!」
　ブルーの、イエローの、ブラックのツインテールから放たれた光が一つになり……テイルカリバーへと込められていく。
「あたしたちの力！」
「全て受け取ってください！」
「そして、叩たたき込めっ!!」
　これが……ツインテイルズの全ての力を結集した一撃だ。
　お前たちが神の名の下に人間の心を奪うというのならば……俺は、女神の名の下にこの剣を振るい、ツインテールを守る!!
〈理解不能……いや〉

「ゴッドブレイザー────────────────ッ!!」

〈理解、可能。ゆえに再現、不可能。これが──ツインテール……!!〉
　無機質な髑どく髏ろの貌かおに小さな微ほほ笑えみを浮かべ、ローグギルディたちは光の中へと呑のみ込まれていった。
「はぁ……っ……は、ぁ……」
　テイルカリバーは息を荒らげる俺の手を離れ、空に溶け込むようにして消えていった。
　そして、空の彼方かなたが煌きらめく。ハデスギルディが炎燻くすぶる右胸を押さえながら、地上へと降下してきた。
「堪能致しました……。これが、女神の剣……」
　全身を放電させながら膝ひざをつき、すでに姿なきソーラを賞嘆するように眼めを細める。

なんてタフな野郎だ……。

「テイルレッド……君の刃やいば。解放したまではいいが、完全には使いこなせなかったようだね……。まるでできたての惑星ほしだ。形が定まっていない、これからの存在だよ」

最強変身チエインエヴオルブを解除した俺たちは、あらためてハデスギルディと対たい峙じした。

合体状態で酷こく使しされた身体からだを癒すため、メガ・ネも地面に座って休止状態スリープモードになっている。

「そして、君たちツインテイルズの強さの一端を垣間かいま見た気がするよ。ツインテールの女神の寵ちよう愛あいを受けた存在だったとは……よくぞ、私の擬人化属性パーソニフアイを撃破した」

ハデスギルディは、身体にくっきりと刻まれた斬ざん痕こんをむしろ誇るように撫なで擦さする。

「その代償に、私は擬人化属性パーソニフアイの核コアを貫かれてしまったがね……後悔はないよ」

核が貫かれたと言っておきながら、まだ余裕があるのが謎なぞだが……もう、ハデスギルディに戦う力は残っていないはずだ。

「テイルギアＴＹＰＥ-Ｘは完全に破壊した。お前の負けだ、マーメイドギルディ!!」

一方で俺たちは、今度こそ絶対に逃がしてはいけない邪悪──マーメイドギルディへと意識を傾注した。

「終わったみたいだな～、ハデスギルディ～」

澄んだ声こわ音ねが、未いまだ予断を許さず緊迫を続ける戦場の空気を一変させる。

忘れもしない、幼く陽気な声。

ハデスギルディの背後に突とつ如じよとして現れた影に、俺は睨にらむように視線を差し向けた。

「アポロギルディ！」
　今日は白ローブをまとわず最初から正体を曝さらけ出し、小さな巨人は悠ゆう々ゆうとした歩みで俺たちの前に立ちはだかる。
「すっげーな、テイルレッド！　僕、人間の戦い見てこんなにわくわくしたの、初めてだ！　それにあの女神さまとも戦ってみたかったな～、どっちが本物の太陽か!!」
　その屈託のない笑顔は、一片の邪気も感じさせない子供そのものだ。
「アポロギルディ！　貴様は幼さと裏腹、道を外れた部下は己が手で正す責任感のある戦士と思っておったが……これほど邪悪な科学者を放置して、それでも神の一剣ゴー・デイア・ソードの隊長か!!」
「あはは、何言ってんのさー。僕、自分が神の一剣ゴー・デイア・ソードの隊長なんて一言も言ってないぞー？」
　ブラックに吠ほえ立てられ、苦笑いをするアポロギルディ。違うのか……確かに、こいつの強さを見た俺たちが、勝手に隊長だと思い込んでいただけだが……。
「神の一剣ゴー・デイア・ソードの隊長が誰だれか知りたいなら、ちゃあんと──」
　悪戯いたずらっぽく眼めを細めるアポロギルディ。その姿が突如、俺たちの視界からかき消える。
「ここにいるって！」
「……アポロギルディちゃん!?」
　そして離れていたマーメイドギルディの眼前に出現、その腕を力任せに掴つかんだ。そのまま、俺たちに差し出すかのように放り投げてくる。
「あうっ……!!」
　地面が抉えぐれるほどしたたかに叩たたきつけられ、マーメイドギルディは苦しみ喘あえぐ。

「こいつが神の一剣ゴー・デイア・ソードの隊長──マーメイドギルディだ。意外だろ？」
　どうせまた俺たちをからかっているのだろうと怪しんだが……アポロギルディの目は、本気だった。
「そんな、戦闘力のないこいつが……神の一剣ゴー・デイア・ソードの隊長!?　俺たちを欺あざむく擬態だったのか!?」
　軽く放り転がされただけで這ほう々ほうの体ていとなっているこいつが、俺たちがあれだけ死闘を演じてきた神の一剣ゴー・デイア・ソードの大将だとは……とても信じられない。
「んーん、こいつ本当に弱いよ？　その代わり科学力がアルティメギル一なのも本当。別に強くなきゃ強部隊の隊長やっちゃいけないって決まりはないよな？」
「そりゃあ、人徳があれば弱くても頭は務まるだろうけど、それならなおさら──」
　俺はあらためて、マーメイドギルディに視線を送る。
　こいつの人柄を慕って強戦士たちが集うとは、絶対に考えられない。
　かといって、最強部隊の隊長という重要な役職が、組織の科学発展の手て柄がらだけで与えられていいものでないこともわかる。
「こいつはあの手この手で地固めをして、済なし崩し的に裏から神の一剣ゴー・デイア・ソードを支配する立場になったんだー。つまり、隊長ってことなんだよな～」
　アポロギルディの言葉を補足するように、ハデスギルディも俺の疑問に答えた。
「不思議に思っていただろう？　神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士だけ、倒しても属性玉エレメーラオーブが出現しないのを。それはこのマーメイドギルディが、出撃する前の神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士一人一人に近づいて細工をし、倒された瞬間に属性玉エレメーラ

オーブが自分の元へ転移するようにしていたからなのだ」
「な……！　何てことを……！」
　真っ先に声を上げたのは、俺の背でそれを聞いていたトゥアールだった。
『私の実験には、多くの属性力エレメーラが必要なの』
　ガイアギルディとの戦いの時にこいつが言っていたのは、こういうことだったのか。
「仲間の属性玉エレメーラオーブまで奪っていたってことは……お前、今まで散々言ってた、同胞のために研究してるってのも嘘うそっぱちかよ!!」
「一応みんなのためではあったわよ……頑張る役得ごほうびはたくさんあってもいいでしょ？」
　この状況で飄ひよう々ひようとそう口にするマーメイドギルディに、俺はいよいよ怒りさえ通り越して憐あわれみさえ覚え始めた。
「ヴァルキリアギルディぐらい強くて隙すきのない奴やつをどうやって籠ろう絡らくするのかって思ってたら……あいつの首領様への恋心を利用しやがった。えぐいことするよなー」
　さすがのアポロギルディも、その事実を伝える時だけは、心底軽けい蔑べつするようにマーメイドギルディを見下していた。
「──あんた、ヴァルキリアギルディにそんなことを……!!」
「こうして身内の恥を明かしたのも、君たちに対する敬意ゆえだ。だが、アルティメギルの〝切り札〟たる誇りを持つ神の私たちは、小細工を弄ろうしはしはない。安心してくれたまえ」
　怒りに拳こぶしを握るブルーをを見てか、詫わび入るようにそう言うハデスギルディ。
　安心して、残る自分たちと戦え──ってことかよ。隊長より部下の方が脅きよう威いだなんて、神の一剣ゴー・デイア・ソードはどこまで常識

が通用しない部隊なんだ……。
「フッ……今日は本当に楽しかったよ。ありがとう、ツインテイルズ諸君。また変態アデュー」
　ハデスギルディが極彩色のゲートの中へ消え、そしてアポロギルディは──
「そんじゃばいばーい！　あ、そいつは好きにしていーぞー。もう用済みだからさー」
　無邪気な挨あい拶さつと共にに、ぞっとするような声こわ音ねで死刑宣告を残していった。
　立ち上がることもできないのか、地面に膝ひざをついたまま俯うつむくマーメイドギルディ。
　勝利の感慨など何一つもない、虚むなしい風が吹き抜けていく。
　生いけ贄にえのように差し出された野心家だけが、無力に打ちひしがれていた。

◇

　乾いた音が響き、アルティメギル首領の間を支配する静寂を斬きり裂さいた。
　首領が、手にしたワイングラスを自ら握り砕いたのだ。
「感じる……感じるぞテイルレッド。お前のツインテールを、とうとうこの場にいながらにして感じるようになった」
　聖布ヴエールで囲まれた玉座に坐し、首領は遥はるか遠き異世界へと期待を馳はせる。
「その剣ならばあるいは、余の元への道を切り拓くことができよう。待っているぞ……」
　凜り々りしい足音が響きわたる。

首領の間へとやってきたのは、戦いを終えたばかりのハデスギルディだった。
「お愉たのしみになるのは喜ばしいですが……どうかこの場で待つというお言葉を違たがえないでいただきたい。よもや、あなた様御自ら向かわれることはありませぬよう」
「それは……約束できぬなあ？」
聖布ヴエールの奥のシルエットが、喜き悦えつに揺れる。
ハデスギルディは諦あきらめたように嘆息し、肩を竦すくめた。
「しかし、なかなか手て酷ひどくやられたな、ハデスギルディ」
「は……テイルレッドはもちろん、突とつ如じよとして現れた女神ソーラの幻影──心地ここちよき手て強ごわさでありました。あなた様と同じ御顔の、あの女神は」
未いまだ以もつて胸に残るツインテールの斬ざん痕こん、そして貫かれた第一の核。
ハデスギルディは首領の御前においてもその傷を卑しく隠そうとせず、むしろ堂々と誇るように曝さらけ出していた。
「それにしても、テイルレッドが女神ソーラの愛を受け継いだ戦士だったとは……現世の究極のツインテールに相応ふさわしき戦士です」
「あ奴やつらツインテイルズは強力な認識阻害の術理を身に帯おびているようだ。さしものお前たちも気づかなんだようだが、余は初めて見た時から歓喜しておったぞ。テイルレッドと女神ソーラは瓜うり二ふたつだ……とな」
ティラノギルディが倒された報を受けた時、首領は初めてテイルレッドの姿を確認し、そして歓喜した。
神の一剣ゴー・デイア・ソードへの出撃許可を下してから今日に至るまで、全ては首領の手の平の上の出来事だったのかもしれない。
「そしてテイルレッドは、この余ですら見通せぬさらなる姿を秘め隠し

ているように感じるのだ……それを曝あばく日が楽しみなものよ」
　テイルレッドに秘め隠された正体を見たその時。全知全能の首領は果たして、いかなる反応を示すのであろうか。
「して、ハデスギルディよ。マーメイドギルディは──」
　意味深な笑みとともに問いを投げる首領へ、ハデスギルディは恭うやうやしく礼をした。
「彼女の望みどおりにいたしました。おそらくは、今頃ごろ──」

◇

　マーメイドギルディ──アルティメギル最高科学者。
　こいつには、幾度となく手て酷ひどい目に遭わされてきた。俺たちが知らないだけで、数多くのエレメリアンたちも悪しき実験の犠牲となってきたのだろう。
「……お前の野望は終わりだ、マーメイドギルディ」
　今日、ここで……こいつの生み出す負の連鎖を断ち切る。
　万策尽きてへたり込むマーメイドギルディへと、俺は歩み寄った。
　ブルーは右から、ブラックは左から。イエローは後ろから。今回ばかりは断じて逃のがさないという決意とともに包囲する。
　そして俺は仮面ツインテールを背中にかばったまま、この戦いの結末を見届けさせる。
「お前が今まで仲間にしてきたように、今度は自分自身が切り捨てられる時が来たということか……因果応報じゃな」
　四人とも最強変身チエインエヴオルブの力は使い果たしてしまったが、一般兵並みの戦闘力のこいつを相手にするには十分すぎる。
「……そうね、私もここまでみたい。まー、しょうがないかぁ」
　自分を取り囲む俺たちを見て、マーメイドギルディはついに諦あきら

めを口にした。
「マーメイドギルディよ、何な故ぜここまで外道に堕おちた。お前はこんな大それたことができるような奴やつではなかったはずじゃ」
　ブラックの憐あわれむような問いに、マーメイドギルディは俯うつむきながら自じ嘲ちようした。
「ハデスギルディ君にも言われたわ……つまんない女になったって。勝手だなぁ、みんな」
　目の前に転がるテイルチェンジャーの残ざん骸がいを拾うマーメイドギルディ。
　しかしそれは力無く崩れ、灰が風に乗って消えていった。
「違うのよ、ブラックちゃん。あなたが組織に入った頃には、私はとっくに変わっていた。きっかけはずっとずっと前だもの……その頃はまだ、抑えが効いていただけ」
　マーメイドギルディは、その黒く彩いろどられた野望の始まりを、静かに語り出した。
「私はね……首領になりたかったの。そのために、何でもしたわ。その〝何でも〟が、あなたたちから見ればいわゆる〝外法〟なのかもしれないけれど」
「なるほど……上の地位を目指した猛も者さは数いれど、そんな大望を懐いだいたエレメリアンはお前ぐらいのものじゃろう。そこまでしなければ目指せず……そこまでしても届かなかった地位だったのじゃな」
「地位じゃない。言葉通り、アルティメギル首領と同じ存在になりたかったのよ」
「同じ存在、じゃと？」
「私が変わったきっかけ……何か、教えてあげましょうか？」
　固かた唾ずを呑のんで聞き入る俺たちに、マーメイドギルディは衝撃の事実を語った。

「──エレメリアンの核。自分の属性玉エレメーラオーブを、抜き取ったのよ」

　マーメイドギルディは、自分の左胸を指が沈むほど握り締めた。
　エレメリアンの属性玉エレメーラオーブがどこにあるのかはわからないが……そこは、およその人間の心臓の位置だ。
「テイルレッドちゃん、あなたが究極のツインテールなら、首領は究極のエレメリアン……属性力エレメーラから生まれながらにして、属性力エレメーラを超えた存在なの」
　俺たちの反応がおかしくて仕方がないというふうに、マーメイドギルディはさらに舌滑りをよくしていった。
「どうせ死んじゃうなら、機密情報とかバンバン流しちゃおっかな？　首領はね……自分自身の属性玉エレメーラオーブを捨て去ることで、究極の進化を遂げたと言われているわ。だから私も、それにあやかったってわけ」
「ありえないだろう……俺たちもお前らも、属性力エレメーラを使って戦っている。それを捨てて進化するだと？　ましてや属性玉エレメーラオーブは、お前たちの生命いのちじゃないか」
「そう……アルティメギルにとって、ツインテール属性は絶対じゃ。多くのエレメリアンが、ツインテール属性を蔑ないがしろにすることは首領への反逆だと思っておる！」
　俺の疑問に続けて、ブラックが声を荒らげる。
「事実、わらわもツインテールを蔑ろにするエレメリアンはことごとく処罰した！　その首領がよもや、ツインテール属性を捨てた存在じゃと!?」
　エレメリアンはその属性如何にかかわらず、ツインテールへの敬意を

忘れない生命。
　それを統すべる首領がツインテール属性を持っているのは、当然のことだろう。
　しかしその首しゆ魁かいがよもや、自らツインテールを捨て去った存在だというのなら……俺たちが今まで戦ってきた数々の猛も者さたちが、ついてくるはずがない。
「違うわよブラックちゃん……失ったからといって、蔑ろにしたことにはならない。その証拠に──究極のツインテール・テイルレッドちゃんは、一度ツインテール属性を失うことで覚醒したじゃない」
　違う。俺は失いかけたツインテールを取り戻したからこそ、よりツインテールとの絆きずなを深めたんだ。
　こいつとも首領とも、決定的に違うはずなのに……何な故ぜ、ここまで執しつ拗ように同一視しようとするんだ。
「私は自分自身の科学でその究極に到達したかっただけ……。テイルレッドちゃん……誰だれもがあなたのように、心の強さだけで奇跡を超越できる聖者じゃない。凡人が奇跡を『作る』には……全てをかなぐり捨てて尚、足りないのよ」
　マーメイドギルディの視線は、俺の後ろに離れて立つトゥアールに向けられたまま動かない。俺たちではなく、トゥアールだけに語りかけているような錯覚に囚われた。
　真綿で首を絞しめられるような嫌な感覚……言い知れぬ不安に襲おそわれたのは、俺だけではなかったようだ。
「もういい、黙って。みんな……こいつはもう倒すわ。いいわね」
　ブルーは何かに急き立てられるように、ウェイブランスを大上段に構えた。
　微かすかに震ふるえる切っ先が捉えるのは、悪魔の科学者の生命いのち。

「あら、どうしたの？　有益な情報をたくさん喋しやべらせてから始末した方が得でしょうに……これ以上聞きたくないの？　それとも……聞かせたくないの？」
　その問いに答えることなく、ランスは静かに振り下ろされる。

　今、大いなる悪しき野望が一幕を閉じた。

テイルギア設定資料 13



武器：ソルブレイザーブレイド
必殺技：エンシェントブレイザー

女神ソーラが現実世界に実体化する最後の時間を使い変身した、幻のツインテイルズ。無機質なデータでテイルギアを模倣したイビルツインテイルズと対称的に、彼女は四人のツインテイルズの心を借りてソルテイルブレスを形成、テイルギアを身にまとった。そのため、テイルレッドより再現性は劣るもののブルー、イエロー、ブラックと同じテイルギアも理論上は形成が可能。凄まじい力を持つが、制圧に特化したものであり、ソーラは戦闘で生命体を撃破・消滅させることはできない。これは彼女が全てを見守る女神であるがゆえの制約であり、侵略者としてのエレメリアンと戦う総二たちとは大きく立場が異なることによる。

エピローグ　最凶の覚かく醒せい。

　マーメイドギルディへと突き出されたウェイブランスは━━横から突き出されたレイピアによって止められていた。
「━━待って、くれ……っ!!」
　予想だにしない援軍に、俺は目を疑った。
「スワンギルディ!?　どうしてここに!?」
　マーメイドギルディを助けに割って入ったのは……スワンギルディだった。
　スワンギルディはウェイブランスを力尽くでどかせると、マーメイドギルディを庇かばい出た。
「待ってくれ、ツインテイルズ……この場はどうか、矛ほこを収めてくれ!!」
「あんたまさか……あたしに仕返しでもしに来たの!?」
　確かにスワンギルディは、かつて決闘を終えたばかりの自分に不意打ちをしてきたブルーを恨んでいてもおかしくはない。しかし……この覚悟を湛たたえた眼まな差ざしは、とてもそんな後ろ暗い気持ちでできるものじゃない。
「そんなつまらぬ理由で挑んでもお前に太た刀ち打ちできぬことなど、私が一番知っている!!」
「では、今度はあなたがわたくしたちと戦うと……!?」
　イエローの質問にも、スワンギルディは大きく頭を振る。
「尋常の勝負ならば手出しはしない！　だが、戦う意思のない同胞が殺されようとしているのを、黙って見過ごすことはできない!!」
「同胞って……お前だって見てきただろう！　こいつが今まで、どんな悪事を働いてきたか！『ツインテイルズ真ま似ねっこ大作戦』だって、エレメリアンを捨て駒にデータを収集するための茶番だったんだぞ!!」

「私とて彼女は許せない！　だが、わからないのだ！　誇り高くあれと、日々生きるために戦うだけの私たちが正しいのか！　悪逆に手を染めても……アルティメギルの、エレメリアンという種の未来のために進化を求める彼女が正しいのか……!!」
　ブルーはスワンギルディの眼前にランスを突き出し、どくように促うながす。
「わかりきったことでしょ、そいつは間違ってる。─悪よ」
　だがスワンギルディは両腕を拡ひろげてマーメイドギルディを庇ったまま、身み動じろぎもしない。
　やるせない表情で唇くちびるを噛かみ、ランスの穂先を下ろすブルー。
　スワンギルディは感謝するように眦まなじりを決し、俺たちへと衝撃の事実を伝える。
「聞いてくれ─マーメイドギルディはもう、長くは生きられないのだ!!」
　俺たちは全員、息を呑のんだ。
「死への恐怖が……焦しよう燥そうが、悪あく辣らつな手段へと誘いざなってしまったのだ！　私が責任を持って、彼女を二度と出撃させないと誓う！　だから─」
「ホントなの、あんた。もうじき死ぬ、って」
　スワンギルディをいなすように遮さえぎり、ブルーは落ち着き払った声で聞き質ただした。
「……そうよ。生命いのちである属性玉エレメーラオーブを抜き取ったんだもん、当たり前でしょう？　ここまで生きてこれたのが、自分でも不思議なくらいよ」
　俺は不自然に光るマーメイドギルディの頭部へ視線を向けた。光のヒビが入っている……。肉体が崩壊し始めた時のティラノギルディと同じ

現象だ。
　おそらくマーメイドギルディは、嘘うそを言っていない。
　包囲を解いた俺たちに、スワンギルディは深々と頭を下げた。
「さあ、立つのです。あなたは完全に敗北した。後は静かに──」

「──間に合った」

　マーメイドギルディは、喜き悦えつに淀よどんだ声でそう呟つぶやいた。差し出されたスワンギルディの手を取ろうともせず、小さく肩を震ふるわせ始める。
「レッドちゃんはともかく、ブルーちゃんが問題だったのよねぇ……。イビルツインテイルズのデータを私自身に取り込むまでの、数分間……アルティメギルの機密をバラしまくってでも命乞いして時間稼ぎしようって考えてたけど、まさかスワンギルディ君がねぇ？」
「ほーら来た……!!」
　舌打ちしながらランスを構え直すブルー。
「男の子って、女が好きだって言ったらこんなにも頑張ってくれるものなのね♪　……ホントにありがと、ダーリン♡　アハハハハハハハハハ!!」
　ブルーは、狐きつねにつままれたような表情で立ち尽くすスワンギルディを押しのけた。
「あたしはこれっぽっちも信じてなかったからね、あんたみたいな奴やつ!!」
　二度目の躊ちゆう躇ちよは無い。マーメイドギルディにウェイブランスを突き込むブルー。
　その瞬間──激しい光とともに、マーメイドギルディを繭まゆのような球体が包み込んだ。

　浮遊する光の数字と数式……データで形成された球体に、ランスが弾はじかれてしまう。
「わかってないわねえ……。あなたたちに私が言ったことは、全部本心よ。スワンギルディ君……あなたを、好きだって言ったこともね……」
　光の繭の中で、マーメイドギルディは完全に余裕の笑みを浮かべていた。イエローがブラスターを発射し、ブラックがグレイブを振るうが、いずれも球体によって防がれる。
「ねえ、これ──何だと思う？」
　そしてマーメイドギルディは、手の平に載せた何かを俺たちに見せつけてきた。
「私の属性玉エレメーラオーブよ。抜き取った後も、大事に大事に取っておいた……ね」
　最後にブレイザーブレイドを振りかぶっていた俺は……その属性玉エレメーラオーブに刻まれた紋章を目にし、雷に打たれたように動きを止めてしまう。
　マーメイドギルディの属性玉エレメーラオーブに刻まれていた紋章は──ツインテール属性だった。
「私はずっとずっと、どうすれば首領と同じ進化を遂げられるか、研究を続けてきた……。あなたたちだったのよツインテイルズ！　あなたたちこそが、私が求めたシステムだった！　そして今……それは完成の時を迎えたの!!」
「馬ば鹿かな、お前は……ツインテール属性だったっていうのか!?」
　マーメイドギルディは俺の驚きよう愕がくが嬉うれしくて仕方ないとばかりに口くち端はを歪ゆがめると、自身の右手首にテイルブレスオルターを装着した。
「これでこのブレスは、あなたたちと同じになる……!!」
　テイルブレスオルターの核なき空洞に、自分の属性玉エレメーラオー

ブを叩たたきつけるマーメイドギルディ。
　属性玉エレメーラオーブが粘菌のように蠢うごめいて触手が伸び、テイルブレスオルターを侵食していく。
　ブレスの核になんてなっていない。ぐちゃぐちゃに融合させただけの紛まがい物だ。
　だがそれでも……マーメイドギルディには、十分だったようだ。
「もうやめるのだ、マーメイドギルディ！　本当に死ぬつもりか!!」
　スワンギルディが駆け寄り、繭まゆを叩くが──
「うわああああああああああああああああっ……!!」
　非情にも衝撃波を叩きつけられ、吹き飛ばされてしまった。
　繭は役目を終えるように……いや、本当の役割を果たすかのように、マーメイドギルディに吸収されていく。
「感じる、生命いのちを……属性を！　愛を……!!」
　マーメイドギルディの哄笑とともに、激しい紫し電でんが迸ほとばしる。
　俺はトゥアールをかばいながらも、その禍まが々まがしい光景に戦せん慄りつした。
　それは崩壊ではなく、羽化。ひび割れ砕けた頭部からは……彼女の真の貌かおが現れた。
　これまで花はな冠かんむりのようなパーツに隠れていたマーメイドギルディの双そう眸ぼうが、妖あやしく光り輝く。
　彼女の白衣は舞い上がり、翼となって背にたなびいた。
　歪いびつな金の骨組みが──電子回路が走り、科学者の肉体を侵食していく。
　白衣が姿を変えた翼にまでそれは及び……天使の翼を模した回路が形成された。
「──悪いわねぇ、スワンギルディ君……白衣の天使は私だったみたい」

「マーメイド、ギ……ル……ディ……」
「もう違うわ」
　倒れ伏し、意識を手放す最後の瞬間まで、スワンギルディは手を伸ばし続けていた。
　しかしその手はもう、届くことはない。
「私はエンジェルギルディ。死の運命を乗り越え、私だけの究極へと到達した……!!」
　新たな生命いのちの胎動に、周囲の大地が激震を始める。
　テイルギアをまとうのではなく、自らの肉体に取り込む。
　半人半機の怪人━━テイルギアそのもののエレメリアン。
　これが……悪魔の科学者が求めた究極だっていうのか……。



「これこそが、ツインテール力〇ゼロ……そして、それを越えた先に待つ力！　首領様の戯言ことばも、聞いておくものねぇ!!」
　怯おびえきって俺の背に隠れるトゥアールへ、エンジェルギルディはその開かれた双そう眸ぼうを存分に向けてきた。
「それにしても……トゥアールちゃん。あなたは自ら進化を望んで、属性玉エレメーラオーブを捨てるっていう〝真理〟に辿たどり着いたと思っていたのに。破滅を恐れず科学に殉じたと信じていたのに！　蓋ふたを開けてみたら、本当にただ自分の属性をレッドちゃんに託しただけ……興きよう醒ざめだわ!!」
　エンジェルギルディは、興奮気味に捲まくし立てる。
「私のまだるっこい芝居に無反応だったところを見ると、あなたは何も知らないで属性玉エレメーラオーブを捨てたのね。それが……どれだけ恐ろしい行為なのかも知らずに」
「……ぇ……」
　か細く答えるトゥアールへ、さらに声を荒らげるエンジェルギルディ。
「人間も、エレメリアンも、創造神への背信の末路は変わらない……。何か、予兆があったでしょう!?　身体からだが思うように動かないとか、異常に眠いとか、その逆とか!!」
　予兆。やけにふらついたり、急に眠れなくなったり。そんなありふれた不調が、まさか。
　命乞いに過ぎなかったはずの先ほどのマーメイドギルディの独白が、全て符合していく。
　この二人の科学者は……光と闇やみ。全てが対極にあった。
「白けるけど、口にしてあげる。私はあらゆる手段を用いて、死の運命を超越した……。けれどスタート地点は同じでも、その場で足踏みして何もしなかった子は、どうなるかしら？」

悪魔の目もく論ろ見みにようやく気づき、俺は弾はじかれたように叫んでいた。
「やめろ……黙れ────────っ!!」
俺の叫びを嘲あざ笑わらうかのように、エンジェルギルディは天高く浮遊した。

「───あなたはもうすぐ死ぬのよ、トゥアールちゃん」

その一瞬。世界が白滅し、俺たちの時間が鼓動を停めた。
「それが……ツインテール属性を奪われたのではなく、自ら捨て去ったあなたの運命──」
非情な置き土産みやげを囁きささやき、右手を軽く薙なぐエンジェルギルディ。
それだけで地面が爆裂し、俺たちの追撃が阻まれる。そのままエンジェルギルディは、極彩色のゲートの中へと消えていった。

トゥアールは、言葉もなく大地に膝ひざをつく。
やがて彼女の膝に、一粒の雫しずくが滴したたり落ちた。
二粒と、三粒と。雫はその数を増やし、そして──
「私が……死ぬ…………？」
季節外れの大雨が、俺たちの頭上に降り注いだ。
ツインテールを濡ぬらすこの雫は──一体誰だれの涙だろうか。

『このままじゃ総そう二じは、大切なものを失うことになる』
女神が……ソーラが嘆いていたのは、失うと危き惧ぐしていたのは……。
大切な物──ツインテールじゃない。

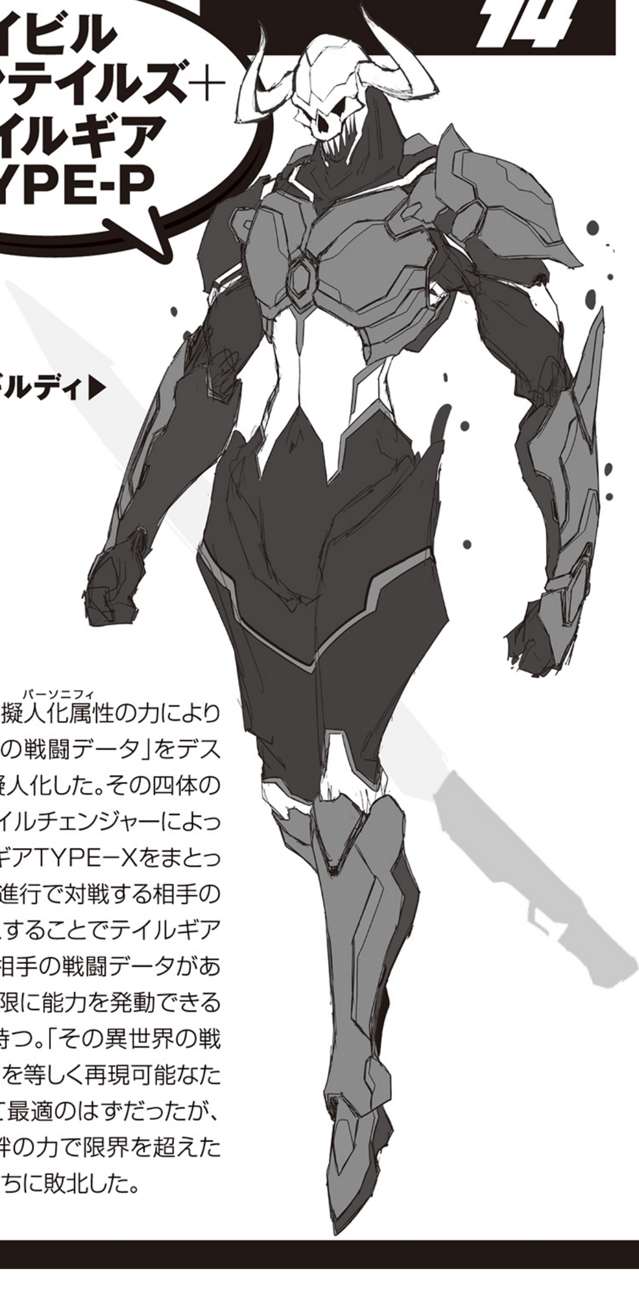
大切な者――トゥアール、だったんだ。

属性力エレメーラという心の力が紡つむいできた神話。歴史。物語。その――罪と罰。
俺たちツインテイルズの最大の試練が……今、始まろうとしていた。

テイルギア設定資料14

イビル ツインテイルズ＋テイルギア TYPE-P

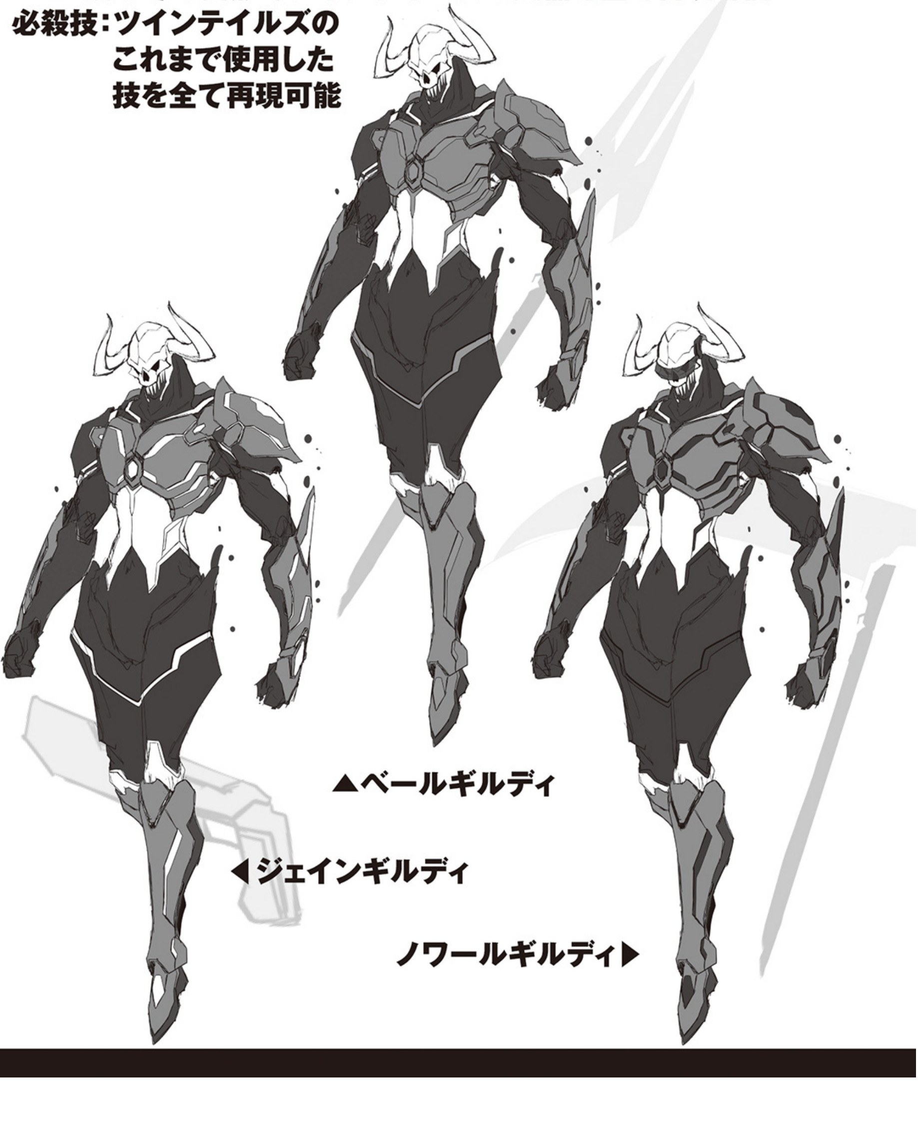
ローグギルディ▶



ハデスギルディは擬人化(パーソニフィ)属性の力により「ツインテイルズの戦闘データ」をデスギルディの姿で擬人化した。その四体の戦士がさらに、テイルチェンジャーによって量産型テイルギアTYPE−Xをまとった姿である。現在進行で対戦する相手の属性力(エレメーラ)をトレースすることでテイルギアを維持しており、相手の戦闘データがある限り、理論上無限に能力を発動できる恐るべき特性を持つ。「その異世界の戦士」の限界戦闘力を等しく再現可能なため侵略兵器として最適のはずだったが、ツインテールの絆の力で限界を超えたツインテイルズたちに敗北した。

EVIL TWINTAILS+ TAILGEAR TYPE-P

武器：テイルチェンジャー
　　　及びその変形でツインテイルズの武器を全て再現可能
必殺技：ツインテイルズの
　　　　これまで使用した
　　　　技を全て再現可能



▲ベールギルディ

◀ジェインギルディ

ノワールギルディ▶

あとツインテールがき

こんにちは、【Ｔｗｉｔｔｅｒ　ＩＤ（@mizusawa_yume）】、略して水みず沢さわ夢ゆめです。

これまでこの作品では、あえて各キャラクターの強さを数値化していませんでした。数値を明確にすることで、イメージが固定されてしまうのを避けたかったからです。

しかし健康診断で色々な数字と向き合う年になって、僕は自分の様々な事柄を数値化され提示される怖さのようなものを知りました。

そのような心境から生まれたのが、今回出たとあるキャラクターです。

今後そのキャラがどんな心に残る台詞せりふを言ったとしても、「でもこいつ作者が健康診断の結果シート見て思いついたキャラなんだよな」と読者が思うようになったら威厳も何もないので、本人の名誉のためにあえて名前は伏せます。もう手遅れな気もしますが伏せます。

そんなふうに、どれだけシリアスな展開であっても最後には笑ってもらえる作品であろうと心がけています。同じくどれほど大きな試練や障害が立ちはだかっても、必ず最後にそれを覆くつがえす大爆発大逆転をする物語であろうと。

この先に待つ最大の爆発を信じ、応援していただければ幸いです。

今回も、イラストの春日かすが様や担当の濱はま田だ様、完成と出版に携たずさわる全ての方、そして読者の皆様に、感謝とツインテールを！

水沢　夢

Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家。パソコン用品が思うように動かなくなったのでもう買い換えようかなと思った途端に急に調子よくなって「こいつ意思があるんじゃ」とか思ったりします。今回は道具と心がテーマのお話です。

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。15

２０１８年４月27日　電子書籍版発行

者　水沢　夢

人　立川義剛

人　野村敦司

集　濱田廣幸

所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１８年４月23日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451729-3


GAGAGA BUNKO
APRIL
2018
ガ報
GAHO
No.132
10th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!
ガガガ文庫
4月刊
絶賛発売中!!!
新年度スタート!
出会いの季節にぴったり
ガガガのシリーズ陣!!!
女神の口から
語られる
ツインテールの真実!
定価:本体611円+税
著者コメント
侵略者と同じ技術の戦闘システムで戦うヒーローたち。彼らは何故強いのか? その答えが15巻にあります。
再び総二の目の前に現れるソーラ。
「あなたはもう、戦わないで」と悲しげに
忠告する彼女の真意とは?
そして、アルティメギル最強の"切り札"が
襲来する……。女神の口から語られる
ツインテールの真実とは!?
［俺、ツインテールになります。15］
著:水沢 夢 イラスト:春日 歩


成績が悪すぎて
職員室に呼びだされた狭山は、
そこで学歴コンプ持ちの
ビリギャル、仲里杏奈と出会う。
案の定、藤崎に目を付けられ、
ふたりして
留年回避プロジェクトに
挑むのだが——？
"痛"青春ラブコメ、第2弾！
新たなダメ人間は—— ビリギャル？
定価：本体630円+税
裏面にも情報満載!
著者コメント
お久しぶりです(延期してごめんなさい)。あのダメ人間どもが遅ればせながら帰ってきました。よろしくです。
NOW PRINTING
青春絶対つぶすマンな俺に救いはいらない。2
著：境田吉孝 イラスト：U35



きびしい検閲をかい潜り、第2巻登場!!
定価:本体574円+税
著者コメント
超リアルラノベ業界お仕事モノ。1巻以上に攻めた内容になっています。僕が業界を干される前にご一読を!
差し入れ、部数マジック、テンプレ論。そして編集者にとっての恐るべき敵、「やつ」が現れる……!? 冗談なの? いやいや全部本気だよ? ドSロリ編集長とユカイな仲間たちでおくる編集部るぽラノベ第2稿!
[編集長殺し2]
著:川岸殴魚 イラスト:クロ



個性的な日和寮にも慣れ始めてきた優斗。
しかし、ことある毎に自分を
甘やかすよう突っかかってくる弥栄と
喧嘩してしまう。ついには
「母の日」を巡って勝負することに!?
ママへの感謝が迸る、
新感覚バブコメ第2弾!
自立したい系男子vs
甘やかされたい系女子!
定価:本体593円+税
今慈ムジナ
はねこと
年下寮母に甘えていいですよ? 2
GAGAGA
著者コメント
女の子に甘えたいし、女の子に振り回されながら甘やかしたい。我儘な僕に応える一冊に仕上げました!
[年下寮母(おかーさん)に甘(あま)えていいですよ? 2]
著:今慈(いまじ)ムジナ　イラスト:はねこと



定価:本体1,200円+税
レイロアの司祭さま 3
はぐれ司祭のコツコツ冒険譚
朧丸
はぐれ者こそ
急がば回れ?
著者コメント
メタル系モンスター! ゴザル女忍者!ウサ耳魔法使い! 今回も、ごった煮風味なファンタジーとなっております。ぜひご賞味くださいませ。
春を迎えたレイロア。
ノエル達はレベルが上がりにくい
忍者を助けたり、幽霊からの依頼を受けたり、
相変わらず忙しい日々。そんな中、
相棒達にもちょっとずつ変化が起きていて?
せちがらゆるい異世界冒険活劇第三幕!
[レイロアの司祭さま3
~はぐれ司祭のコツコツ冒険譚~]
著:朧丸 イラスト:野崎つばた


『青春絶対つぶすマンな俺に救いはいらない。2』発売記念
キミは狭山よりマシ?
ダメ人間度チェック!
□ なにをやるのもめんどくさい。
□ 昼夜逆転こそ究極のライフスタイルだ。
□ 約束は破るのがデフォルト。期待をかけられるほど逃げたくなる。
□ 他人の話は聞きたくない。ウルトラマイペース人間でなにが悪い。
□ ヤバそうなやつとは即断交。鮮血のごとき赤の他人である。
□ 将来の夢はユーチューバーだ。だって、小学生のなりたい職業ランキング上位だし。
□ 引きこもりサイコウ。「家の外に出たら死んでしまう病」を患っている。
□ 「テラス○ウス」に出てくるみたいなお洒落で胸糞悪いやつらとは一生かかわりたくない。
□ 権力と腕力には弱いが、年寄りと女子供には強い。
□ とくにネットではイキリがち。
□ リアルでも「なんJ」語を積極的に使う。一般ニキを煽るの楽しいンゴwww
□ 嫌いな言葉は「友情・努力・勝利」である。
□ なにもしていないのに、目が合っただけで子どもに泣かれたことがある。
□ メンタルが折れがち。趣味は「自殺ごっこ」。
□ 向上心? なにそれおいしいの?
□ そもそも他人に「ダメ人間」とか言うやつのほうが「ダメ人間」じゃねえの? つまり、全部周りが悪い。
□ 人生、諦めが肝心。
□ 現実疲れた。異世界行きたい。チートで無双して、迫りくる美少女たちのラッキースケベにおぼれたい。
□ 自分はモテないわけじゃない。釣り合う相手がいないだけ。
□ まあ…ぜんぶ養ってくれる石油王くらいなら妥協してもいい。
□ つーか、もはや三次元女子には興味ないでゴザルwww 女子は二次元に限るwww
□ SNSで「○○と別れました。もう恋なんてしません」とかポエム投稿している人を見るといいね!を押す手が止まらない。
□ ズル休みや遅刻の言い訳レパートリーは数えきれないほど持っている。
□ がんばってるやつを見ると、自分がダメ出しされているような気がする。
□ たとえ自分が悪くても、無理やり土下座させられるまで絶対謝らない。
『青春絶対つぶすマンな俺に救いはいらない。』とは?
どうしようもないダメ人間・狭山明人の更生をはじめ、私、藤崎小夜子が室長を務める「特別生徒相談室」が、わが校の個性的な生徒たちの悩みを解決する物語なのです。えっへん。
更生なんて1ミリも頼んでねぇ…
狭山明人 とにかくクズ。高校二年生。
古賀拓斗 引きこもりユーチューバー。
好きなことで生きていくンゴ
人には向き不向きがあるんやもんねぇー?
矢野真澄 女神系アルバイター。
藤崎小夜子 中等部の電波少女。
人生に悲しいことはつきものだよね
相田怜治 メンヘラハンサム。
ホント、救いようのないゴミクズね
小野寺薫 かつて陸上部のスターだった無気力系女子。
診断結果 狭山からのひとこと付き!「ダメ人間度チェック表」
チェック25 キング・オブ・クズ 感動したぜ、兄弟。お前こそ人間界最下位ランナー。お前が、No.1だ!!
チェック19~24 役満ダメ人間 クズとして実に有望。社会不適合レベル。だがまだだ、お前はもっとクズになれる!
チェック10~18 パーフェクト負け犬 付き合いが深まるとクズさがバレて嫌われるタイプだな。お前、素質アリ!!
チェック3~9 ザ・凡人 なにちゃんと社会生活してんだよ。もっと学校も会社も休めよ、堕落しろよ……。
チェック0~2 UMAレベルの聖人君子 お前のような聖人君子は許せねぇ!! 消えろ、ぶっ飛ばされんうちにな!!!
イラスト:U35

ここガ知りたい! ガガガ特捜部

世界終末系の映画は泣かせにくるよネー! 先生たちの「最後の一日の過ごし方」とは?

質問 映画『アルマゲドン』を見て号泣しました。もし明日、世界が滅亡するとしたら先生たちは何をしますか? （さんかくコーン・28歳・東京都）

●おまわりさーん!この人です!……砂義出雲先生☞普段なら捕まりそうな格好でちょっとだけ家の外の様子を伺ってすぐに帰って寝ます。
犬村小六先生☞女子高生の格好をして女子校に潜入します。
海津ゆたか先生☞会社のパソコンを叩き壊す。

●終末系映画あるある……牧野圭祐先生☞空を呆然と見上げるモブキャラになります。
水沢 夢先生☞明日世界は滅亡しないさ。俺が隕石に穴を掘りに行くからね。

●せちがらいのじゃ〜……赤城大空先生☞子作り（相手はいない）。
今慈ムジナ先生☞映画『最高の人生の見つけ方』を見て泣きます。そして僕の側には誰もいないことにも泣きます。
小山恭平先生☞書きかけの小説を完結させるために必死に書きなぐり、だけどどうでもいいところが引っかかって結局間に合わず、うなだれている自分の姿が容易に想像できます。

質問募集! 郵便ハガキ、Twitterで先生方に訊いてみたいことを書いて送って下さい。あなたの質問を特捜部が徹底調査致します。
その他の先生方からの回答は、編集部ログ(GAGAGAWIRE)で見られます。

疑問質問なんでもござれ! ガガガくん通信!!!!

GAGAGA

Twitterやハガキでボクへの質問を大募集ダヨ!

Q:4コ下の弟とケンカが絶えない。性格が正反対な弟についイラっとしてしまう。どうしたらうまくやっていけるでしょうか。（ぶんぶん・22歳・茨城県）

A:「ケンカするほど仲が良い」… なんてことねーヨナ! ぶっちゃけ、家族だからってムリして仲良くする必要なないと思うヨ! ガガガくんも昔はかーちゃんに超反抗してたモン。キミには、『ストライクフォール』がオススメ。アツいロボットバトルのなかで、変化する兄弟の関係が書かれる秀作ダ! 読み終えたら、弟の良い部分も見えてくるカモ…?



著:長谷敏司
イラスト:筑波マサヒロ

GAGAGA headline

ガガガ文庫作品は「本」を飛び出し原作とは異なる魅力を発信中!このコーナーはガガガのメディアミックスニュースを毎月ご紹介!

TVアニメ されど罪人は竜と踊る

6/27 Blu-ray 第1巻発売決定!!

TVアニメ大好評放送中の『されど罪人は竜と踊る』Blu-ray第1巻が早くも6月27日に発売決定! 特典情報も随時お知らせいたします!!

- 発売日:2018年6月27日
- 価格:9,500円(税抜)
- 限定特典:原作者浅井ラボによる書き下ろし小説ほか
- 映像特典:放送直前特別番組完全版PV(2種)/ノンクレジットOP・ED映像



コミカライズ やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。

コミックス⑫巻、発売中!



『―妄言録―』(スクウェア・エニックス刊)最新巻が絶賛発売中!! 今巻ではいよいよアニメ2期の最終話のエピソードまでを収録!

原作:渡 航
キャラクター原案:ぽんかん⑧
漫画:佳月玲茅

コミカライズ 弱キャラ友崎くん

原作6巻&コミックス1巻 5/18同時発売!!

※イラストは既刊のものです。



「ガンガンJOKER」にて連載中の『弱キャラ友崎くん』最新巻(スクウェア・エニックス刊)が原作6巻と同時に発売予定! お楽しみに!!

原作:屋久ユウキ　キャラクター原案:フライ　漫画:千田衛人

コミカライズ 最強職《竜騎士》から初級職《運び屋》になったのに、なぜか勇者達から頼られてます

原作2巻&コミックス1巻 5/18同時発売決定!

「マンガワン」にて好評連載中の「@comic」が待望のコミックス発売!! 大注目のコミカライズをお見逃しなく!!

原作:あまうい白一　キャラクター原案:泉 彩　漫画:幸路





イラスト:シソ　イラスト:かやはら　イラスト:みっつばー

第12回小学館ライトノベル大賞［ガガガ部門］

ガガガ賞	『お前の母ちゃん魔法少女！』栗ノ原草介 『《このラブコメがすごい!!》堂々の三位』未確認飛行オレオ
優秀賞	『グリムの赤い万華鏡』氷桃甘雪 『ピンポンラバー』谷山走太
審査員特別賞	『空飛ぶ卵の右舷砲』喜多信

最終結果！

※「ガガガ大賞」は該当作品なし

ゲスト審査員川村元気氏からの講評！

講評を受けて、大幅な改稿を加えた受賞作たちが5月より続々出版予定！受賞時の特長を伸ばし、ウィークポイントをバネにしてさらに面白くなった作品陣をお楽しみに!!

『お前の母ちゃん魔法少女！』は、母親から息子が魔法少女を継ぐのが嫌で、代わりになる後継ぎを探すという設定が興味深く、キャラクターやストーリーどれもバランス良くできていると思いました。文体は独特で好き嫌い分かれるかもしれませんが、コメディが書けることはそれだけで評価に値すると思いました。

『《このラブコメがすごい!!》堂々の三位』は、ライトノベルの作家と、まとめサイトの管理人のラブコメというメタ構造が興味深く、なかばライトノベルについて勉強するような気持ちで読みました。発想の面白さもそうですが、ライトノベル執筆におけるHOW TOがよく研究されていると思いました。ただ肝心のキャラクターやラブストーリーに新鮮味が薄く、途中から何かの指南書を読んでいるような気分にもなりました。このメタ構造の題材だからこそのエンディングが見つかると良いのではないかと思いました。

『グリムの赤い万華鏡』は、赤ずきんをモチーフとしたユニークな作品でした。グリム童話とライトノベルをかけ合わせるアイデアは面白かったのですが、さらに見たこともないストーリー展開やキャラクターも期待してしまったぶん、物足りなさを感じました。

『ピンポンラバー』は、ミックス卓球という題材のチョイスに面白さがあると思いましたが、映画『ミックス。』ですでに描かれてしまったのが残念です。ストーリーも王道青春もので、丁寧に書かれていましたが、それだけにキャラクターになにか独特のクセというか特徴がほしい気がして、そこが惜しい気がしました。

『空飛ぶ卵の右舷砲』は文章力、描写力は頭ひとつ抜けている印象でした。植物のモンスターに人間が駆逐された世界、というアイデアも面白い。ハリウッド映画が好みそうな世界観だと思いました。ただ世界観の面白さに比して、人間側のキャラクター設定がどこかで見たようなところもあり、そこの部分が惜しい気がしました。SF色がかなり強いので、ガガガ文庫としてどのような読者を獲得するのか注目したいと思います。

ガガガ文庫公式HP、GAGAGAWIREにて全文掲載！

書店員さんとガガガくん

ガガガくんに負けないくらい黄色が似合う今月の書店員さん! おすすめはアニメ放送直前のこの作品ダ!

ガガガくん

今月の書店員さん



アニメイト町田店 菅野純一さん

住所:〒194-0013 東京都町田市原町田4-11-14 コロンブスビル1F・2F 電話番号:042-721-6871
営業時間:午前10時～午後8時 定休日:なし URL:https://www.animate.co.jp/shop/machida/

アニメと言ったらアニメイト! みなさんと作品の出会いの場です。是非、町田に来た際はお立ち寄り下さい。

菅野さんのオススメ本



『されど罪人は竜と踊る』

基本バトルものです。戦闘における駆け引き・読合いに注目! 現実とファンタジー両方の世界観があり面白い。



▶人気シリーズを贅沢な面陳で配置！表紙が見えるのでつい手に取ってしまいたくなる棚ダネ！

編集後記

・坐骨神経痛がビリビリ来てから「体重を抑えないとな」と考えるのは遅すぎるのでしょうか……?(野)

・花粉症との戦いを終え、春眠との戦い。防戦一方だぜ……(☆)

・遅ればせながら『ゲーム・オブ・スローンズ』にハマり中。ティリオン!(濱)

・「花粉少女ブタクサちゃん」という涙と鼻水が止まらない感動ラノベを考えました。(岩)

・なにかこう、秘術的なもので花粉症を克服できないものか。(小)

・アニメに影響されるタイプのオタクなのでここ最近ずっとキャンプ行きたい感じ。(田)

・ふらっと入った楽器店で運命のベースに出会ってしまった。ガチ練します。(林)

編集部への質問もこちら!!

作家・イラストレーターへのファンレター、感想などは以下の宛先に、作者名を明記のうえ、お送りください。

〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館ガガガ文庫編集部○○○(作者名)宛

ガガガ10周年電子特典　カバーイラスト


10th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!


10th Anniversary
GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!!


10 th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!



10th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!


10th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!


10th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!


10th Anniversary
GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!!


10 th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!


10th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!!!


10th Anniversary GAGAGA
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!!!


10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!!